798-167
1200501607592
798
167

續花會集

壹の子六

798
167

目次

紅玉（大正二年七月）……一
海神別莊（大正二年十二月）……二九
戀女房（大正二年十二月）……七九
湯島の境內（大正三年十月）……二一三
錦染瀧白糸（大正五年二月）……二三五
日本橋（大正六年五月）……二五七
天守物語（大正六年九月）……四四九
山吹（大正十二年六月）……五〇一

戰國茶漬（大正十五年一月）……五三七
多神教（昭和二年三月）……五九七
お忍び（昭和十一年一月）……六三七
かきぬき……六八五

紅玉

時。

現代、初冬。

場所。

府下郊外の原野。

人物。

畫工。侍女。（烏の假裝したる）

貴夫人。老紳士。少紳士。小兒五人。

——別に、三羽の烏。（侍女と同じ扮裝）

小兒一　やあ、停車場の方の、遠くの方から、あんなものが遣つて來たぜ。

小兒二　何だい〳〵。

小兒三　あゝ、大なものを背負つて、蹌踉々々〳〵來るねえ。

小兒四　影法師まで、ぶら〳〵して居るよ。

小兒五　重いんだらうか。

小兒一　何だ、引越かなあ。

小兒二　構ふもんか、何だつて。

小兒三　御覽よ、脊よりか高い、障子見たやうなものを背負つてるから、凧が歩行いて來るやうだ。

小兒四　絲をつけて揚げる眞似エして遣らう。

小兒五　遣れ〳〵、おもしろい。

凧を持つたのは凧を上げ、獨樂を持ちたるは獨樂を廻す。手にものなき一人、一方に向ひ、凧の絲を手繰る眞似して笑ふ。

畫工　（枠張のまゝ、絹地の畫を、やけに紐からげにして、薄汚れたる背廣の背に負ひ、初冬、枯野の夕日影にて、あか〳〵と且つ寂しき顏。醉へる足どりにて登場）……落第々々、大落第。（ぶらつく體を杖に突掛くる狀、疲切つたる樵夫の如し。しばらくして、叫ぶ）畜生、狀を見やがれ。

聲に驚き、且つ活ける玩具の、手許に近づきたるを見て、絲を手繰りたる小兒、衝と開いて素知らぬ顏す。

畫工、其の事には心付かず、立停まりて嬉戲する小兒等を眺す。

よく遊んでるな、あゝ、羨しい。何うだ。皆、面白いか。

小兒等、彼の樣子を見て忍笑す。中に、絲を手繰りたる一人。

小兒三　あゝ、面白かつたの。

畫工　（管をまく口吻）何、面白かつた。面白かつたは不可んな。今の若さに。……小兒をつかまへて、今の若さも變だ。（笑ふ）はゝゝは、面白かつたは心細い。過去つた事のやうで情ない。面白いと云へ。面白がれ、面白がれ。尙ほ其の上に面白く成れ。むゝ、何うだ。

小兒三　だつて、兄さん怒るだらう。

畫工　（解し得ず）俺が怒る、何を……何を俺が怒るんだ。生命がけで、描いて文部省の展覽會で、平つくばつて、可いか、洋服の膝を膨らまして膝行つてな、いゝ圖ぢやないぜ、審査所のお玄關で頓首再拜と仕つた奴を、紙鐵砲で、ポンと撥ねられて、ぎやふんとまゐつた。それでさへ怒り得ないで、悄々と杖に縋つて背負つて歸る男ぢやないか。景氣よく馬肉で呷つた酒なら、跳ねも、いきりもしようけれど、胃のわるい處へ、げつそり空腹と來て、蕎麥ともいかない。停車場前で餮飩で飲んだ、臟腑が宛然蚯蚓のやうな、しツこしのない江戸兒擬が、何うして腹なんぞ立て得るものかい。ふん、だらしやない。

他の小兒はきよろ〳〵見て居る。

小兒三　何だか知らないけれどね、今、向うから來る兄さんに、絲目をつけて手繰つて居たんだぜ。

畫工　何だ、絲を着けて……手繰つたか。いや、怒りやしない。何の眞似だい。

小兒一　兄さんがね、然うやつてね、ぶら〳〵來た處がね。

小兒二　遠くから、まるで以て、凧の形に見えたんだもの。

畫工　はゝあ、凧か。（背負つてる繪を見る）むゝ、其處で、（仕形しつゝ）と遣つて面白がつて居たんだな。處で、俺が恁う近く來たから、怒られやしないかと思つて、其の惡戲を止めたんだ。だから、面白かつたと云ふのか。……かつたは寂しい、つまらない。壯に面白がれ、もつと面

白がれ。さあ、絲を手繰れ、上げろ、引張れ。俺が、凧に成つて、上つて遣らう。上つて、高い空から、上野の展覽會を見て遣る。京、大阪を見よう。日本中を、いや世界を見よう。……さあ、あの兒來て煽れ、それ、お前は向うで上げるんだ。さあ、遣れ、遣れ。（笑ふ）はゝゝ、面白い。

小兒等しばらく逡巡す。畫工の機嫌よげなるを見るより、一人は、畫工の背を抱いて、凧を煽る眞似す。一人は駈出して距離を取る。其の一人。

小兒三　やあ、大凧だい、一人ぢや重い。

小兒四　うん、手傳つて遣ら。（と獨樂を懷にして、立並ぶ）——風吹け、や、吹け。山の風吹いて來い。——（同音に囃す。）

畫工　（あふりたる兒の手を離るゝと同時に、大手を開いて）恁う成りや凧繪だ、提灯屋だ。そりや、しやくるぞ、水汲むぞ、べつかつこだ。

小兒等の絲を引いて駈るがまゝに、ふら〳〵と舞臺を飛廻り、やがて、樹根に撞と成りて、切なき呼吸つく。

暮色到る。

小兒三　凧は切れ了つた。

小兒一　暗く成つた。——丁ど可い。

小兒二　又、……あの事をしよう。

其の他　遣らうよ、遣らうよ。——（一同、手はつながず、少しづゝ間をおき、ぐるりと輪に成りて唄ふ。）

青山、葉山、羽黑の權現さん
あとさき言はずに、中はくぼんだ、おかまの神さん

畫工　（茫然として默想したるが、吐息して立つて此を視む。）おい、おい、其は何の唄だ。

小兒一　あゝ、何の唄だか知らないけれどね、恁うやつて唄つて居ると、誰か一人踊出すんだよ。

畫工　踊る？　誰が踊る。

小兒二　誰が踊るつて、此のね、環の中へ入つて踞んでるものが踊るんだつて。

小兒三　でもね、氣味が惡いんだもの。

畫工　氣味が惡いと？

小兒四　あゝ、あの、其がね、踊らうと思つて踊るんぢやないんだよ。ひとりでにね、踊るの。

踊るまいと思つても。だもの、氣味が惡いんだ。

畫工　遣つて見よう、俺を入れろ。

一同　やあ、兄さん、入るかい。

畫工　俺が入る、待て、（畫を取つて大樹の幹によせかく）さあ、可いか。

小兒三　目を塞いで居るんだぜ。

畫工　可、此の世間を、醉つて踊りや本望だ。

青山、葉山、羽黑の權現さん

小兒等唄ひながら畫工の身の周圍を廻る。環の脈を打つて伸び且つ縮むに連れて、畫工、殆んど、無意識なるが如く、片手又片足を異樣に動かす。唄ふ聲、愈々冴えて、次第に暗く成る。

時に、樹の蔭より、顏黑く、嘴黑く、烏の頭して眞黑なるマント樣の衣を裾まで被りたる異體のもの一個顯れ出で、小兒と小兒の間に交りて齊しく廻る。

地に踞りたる畫工、此の時、中腰に身を起して、半身を左右に振つて踊る眞似す。

續いて、初の黑きものと同じ姿したる三個、人の形の烏。樹蔭より顯れ、同じく小兒等の間に交つて、畫工の周圍を繞る。

小兒等は絕えず唄ふ。いづれも其の怪き物の姿を見ざる趣なり。あとの三羽の烏出でて輪に加はる頃より、畫工全く立上り、我を忘れたる狀して踊り出す。初手の烏もともに、就中、後なる三羽の烏は、足も地に着かざるまで跳梁す。

彼等の踊狂ふ時、小兒等は唄を留む。

一同　（手に手に石を二ツ取り、カチ〳〵と打鳴らして）魔が來た、でん〳〵。影がさいた、もんもん。（四五度口々に寂しく囃す）眞個に來た。そりや來た。

小兒のうちに一人、誰とも知らず恁く叫ぶとともに、ばら〳〵と、左右に分れて逃げ入る。

木の葉落つ。

木の葉落つる中に、一人の畫工と四個の黑き姿と頻に踊る。畫工は靴を穿いたり。後の三羽の烏皆爪尖まで黑し。初の烏ひとり、裾をこぼるゝ褄紅に、足白し。

畫工　（疲果てたる狀、撞と仰樣に倒る）水だ、水をくれい。

いづれも踊り留む。後の烏三羽、身を開いて一方に翼を交はしたる如く、腕を組合せつゝ立ちて視む。

初の烏　（うら若き女の聲にて）寢たよ。まあ……だらしのない事。人間、恁うは成りたくないものだわね。——其のうちに目が覺めたら行くだらう——別にお座敷の邪魔にも成るまいから。

……どれ、(樹の蔭に一むら生茂りたる薄の中より、組立てに交叉したる三脚の竹を取出して据ゑ、次に、其上に圓き板を置き、卓子の如くす。)

後の烏、此の時、三羽とも無言にて近づき、手傳ふ狀にて、二脚のズック製、おなじ組立ての床几を卓子の差向ひに置く。

初の烏、又、旅行用手提げの中より、葡萄酒の瓶を取出だし卓子の上に置く。後の烏等、青き酒、赤き酒の瓶、續いてコップを取出だして並べ揃ふ。

やがて、初の烏、一挺の蠟燭を取つて、此に火を點ず。

舞臺明くなる。

初の烏　(思ひ着きたる體にて、一ッの瓶の酒を玉盞に酌ぎ、燭に翳す。)おゝ、綺麗だ。燭が映つて、透徹つて、いつかの、あの時、夕日の色に輝いて、丁ど東の空に立つた虹の、其の虹の目のやうだと云つて、薄雲に翳して御覽なすつた、奥様の白い手の細い指には重さうな、指環の球に似てること。

三羽の烏、打傾いて聞きつゝあり。

あゝ、玉が溶けたと思ふ酒を飲んだら、どんな味がするだらうねえ。(烏の頭を頂きたる、咽喉の黑き布をあけて、少き女の面を顯し、酒を飲まんとして猶豫ふ)あれ、こゝは私には口だけ

れど、烏にすると丁ど咽喉だ。可厭だよ。咽喉だと血が流れるやうでねえ。こんな事をして居るんだから、氣に成る。よさう。まあ、獨言を云つて、誰かと話をして居るやうだよ……(四邊を眴す)然う〳〵、思つた同士、人前で內證で心を通はす時は、一ッに向つた卓子が、人知れず、脚を上げたり下げたりする、幽な、しかし脈を打つて、血の通ふ、其の符牒で、默つて居て、暗號が出來ると、何時も奥様がおつしやるもんだから。——卓子さん(卓をたゝく)殊にお前さんは三ッ脚で、狐狗狸さん、其のまゝだもの。活きてるも同じだと思ふから、つい、お話をしたんだわ。しかし、うつかりして、少々大事なことを饒舌つたんだから、お前さん聞いたばかりにして置いておくれ。誰にも言つては不可いよ。一寸、注いだ酒を何うしよう。あゝ、いゝ事がある。(醉倒れたる畫工に近づく。後の烏一ッ、同じく近寄りて、畫工の項を抱いて仰向けにす。)

醉ぱらひさん、さあ、冷水。

畫工　(飲みながら、現にて)あゝ、日が出た、が、俺は暗夜だ。(其まゝ寢返る。)

初の烏　日が出たつて——赤い酒から、私の此の烏を透かして、まあ。——畫に描いた太陽の夢を見たんだらう。何だか謎のやうな事を言つてるわね。——さあ〳〵、お寢室ごしらへをして置きませう。(もとに立戻りて、又薄の中より、此のたびは一領の天幕を引出し、卓子を蔽うて

建廻はす。三羽の烏、左右より此を手傳ふ。天幕の裡は、見ぶつ席より見えざるあつらへ。）

お樂みだわね。（天幕を背後にして正面に立つ。三羽の烏、其の兩方に行む。）

もう、すつかり日が暮れた。（時に、はじめてフト自分の他に、烏の姿ありて立てるに心付く。

されどおのが目を怪む風情。少しづゝ、あちこち歩行く。歩行くに連れて、烏の形動き絡ふを

見て、次第に疑惑を增し、手を擧ぐれば、烏等も同じく擧げ、袖を振動かせば、齊しく振動か

し、足を爪立つれば爪立ち、踞めば踞むを透し視めて、今はしも激しく恐怖し、慌しく駈出す。）

帽子を目深に、オーバコートの鼠色なるを被、太き洋杖を持てる老紳士、憂鬱なる重き態度

にて登場。

初の烏　ハタと行當る。驚いて身を開く。紳士其の袖を捉ふ。初の烏、遁れんとして威す眞似

して、かあ〳〵、と烏の聲をなす。泣くが如き女の聲なり。

紳士　こりや、地獄の門を背負つて、空を飛ぶ眞似をするか。（掴ひしぐが如くにして突離す。初

の烏、揑と地に坐す。三羽の烏は故とらしく吃驚の身振をなす。）地を這ふ烏は、鳴く聲が違ふ

ぢやらう。うむ、何うぢや。地を這ふ烏は何と鳴くか。

初の烏　御免なさいまし、何うぞ、御免なさいまし。

紳士　はゝあ、御免なさいましと鳴くか。（繰返して）御免なさいましと鳴くぢやな。

初の烏　はい。

紳士　うむ、（重く頷く）聞えた。とに角、汝の聲は聞えた。――こりや、俺の聲が分るか。

初の烏　えゝ。

紳士　俺の聲が分るかと云ふんぢや。こりや、面を上げろ。――何うだ。

初の烏　御前樣、あれ……

紳士　（杖を以つて　其の裾を壓ふ）ばさ〳〵騒ぐな。槍で脇腹を突かれる外に、樹の上へ得上る身體でもないに、羽ばたきをするな、女郎、手を支いて、靜として口をきけ。

初の烏　眞に申譯のございません、飛んだ失禮をいたしました。……先達つて、奥樣がお好みのお催しで、お邸に園遊會の假裝がございました時、私がいたしました。あの、此のこしらへが、餘りよく似合つたと、皆樣が然うおつしやいましたものでございますから、つい、心得違ひな事をはじめました。あの……後で、御前樣が御旅行を遊ばしましたお留守中は、お邸にも御用が少うございますものですから、自分の買もの、用達しだの、何のと申して、奥樣にお暇を頂いては、こんな處へ出て參りまして、偶に通りますものを驚かしますのが面白くて成りませんので、つい、あの、癖になりまして、今晩も……旦那樣に申譯のございません失禮をいたしました。何うぞ、御免遊ばして下さいまし。

紳士　言ふ事は其だけか。
初の烏　はい？（聞返す。）
紳士　俺に云ふ事は、それだけか、女郎。
初の烏　あの、（口籠る）今夜は何ういたしました事でございますか、私の形……あの、影法師が、此の、野中の宵闇に判然と見えますのでございます。其さへ氣味が惡うございますのに、氣をつけて見ますと、二つも三つも、私と一所に動きますのでございますもの。
三方に分れて行む、三羽の烏、また打頷く。
もう可恐く成りまして、夢中で駈出しましたものですから、御前樣に、つい――あの、そして……御前樣は、何時御旅行さきから。
紳士　俺の旅行か。ふゝん。（自ら嘲ける口吻）汝たちは、俺が旅行をしたと思ふか。
初の烏　はい、一昨日から、北海道の方へ。
紳士　俺の北海道は、すぐに俺の邸の周圍ぢや。
初の烏　はあ、（驚く。）
紳士　俺の旅行は、冥土の旅の如きものぢや。昔から、事が、恁う云ふ事が起つて、其が破滅に近づく時は、誰もするわ。平凡な手段ぢや。通例過ぎる遣方ぢやが、爲んと云ふ事には行かな

かつた。今云うた冥土の旅を、可厭ぢやと思うても、誰もしないわけには行かぬやうなものぢや。又、汝等とても、恁う云ふ事件の最後の際には、其の家の主人か、良人か、可えか、俺が居ぢや、或手段として旅行するに極つとる事を知つて居る。汝は知らいでも、怜悧な彼は知つて居る。汝とても、少しは分つて居らう。分つて居て、其の主人が旅行と云ふ隙間を狙ふ。故と安心して大膽な不埒を働く。うむ、耳を蔽うて鐸を盜むと云ふのぢや。いづれ音の立ち、聲の響くのは覺悟ぢやらう。何も彼も隱さずに言つて了へ。何時の事か。一體、何時頃の事か。これ。
侍女　何時頃とおつしやつて、あの、影法師の事でございませうか。其は唯今……
紳士　默れ。影法師か何か知らんが、汝等三人の黑い心が、形にあらはれて、俺の邸の內外を横行しはじめた時だ。
侍女　御免遊ばして、御前樣、私は何にも存じません。
紳士　用意は出來とる。女郎、俺の衣兜には短銃があるぞ。
侍女　えゝ。
紳士　さあ、言へ。
侍女　御前樣、お許し下さいまし。春の、暮方の事でございます。美しい虹が立ちまして、盛り

の藤の花と、つゝじと一所に、お庭の池に影の映りましたのが、薄紫の頭で、胸に炎の搦みました、眞紅なつゝじの羽の交つた、其の虹の尾を曳きました大きな鳥が、お二階を覗いて居りますやうに見えたのでございます。其の日は、御前様のお留守、奥様が欄干越に、其の景色をお視めなさいまして、――あゝ、綺麗な、此の白い雲と、蒼空の中に漲つた大鳥を御覽――お傍に居りました私に然うおつしやいまして――此の鳥は、頭は私の簪に、尾を私の帶に成るために來たんだよ。角の九つある、龍が、頭を兜に、尾を草摺に敷いて、敵に向ふ大將軍を飾つたやうに。……けれども、虹には目がないから、私の姿が見つからないので、頭を水に浸して、うなだれ悄れて居る。どれ、目を遣らう――と仰有いますと、右の中指に嵌めておいで遊ばした、指環の紅い玉でございます。開いては虹に見えぬし、伏せては奥様の目に見えません。ですから、其の指環をお抜きなさいまして。

紳士　うむ、指環を抜いてだな。うむ、指環を抜いて。

侍女　そして、雪のやうなお手の指を環に遊ばして、高い處で、青葉の上で、虹の膚へ嵌めるやうになさいますと、其の指に空の色が透通りまして、紅い玉は、颯と夕日に映つて、まつたく虹の瞳に成つて、そして晃々と輝きました。其の時でございます。お庭も池も、眞暗に成つたと思ひます。虹も消えました。黑いものが、ばつと來て、目潰しを打ちますやうに、翼を擴げ

たと思ひますと、其の指環を、奥様の手から攫ひまして、烏が飛びましたのでございます。露に光る木の實だ、と紅い玉を、間違へたのでございませう。築山の松の梢を飛びまして、遠くも參りませんで、塀の上に、此の、野の末の處へ入ります、眞赤な、まん圓な、大きな太陽様の前に黑く留まつたのが見えたのでございます。私は跣足で庭へ駈下りました。駈けつけて聲を出しますと、烏は其のまゝ塀の外へ又飛びましたのでございます。丁ど其處が、裏木戸の處でございます。あの木戸は、私が御奉公申しましてから、五年と申しますもの、お開け遊ばした事と云つては一度もなかつたのでございます。

紳士　うむ、あれは開けるべき木戸ではないのぢや。俺が覺えてからも、止むを得ん凶事で二度だけは開けんければ成らんぢやつた。が、其とても凶事を追出いたばかりぢや。外から入つて來た不祥はなかつた。――其が其の時、汝の手で開いたのか。

侍女　えゝ、錠の鍵は、がつちりさゝつて居りましたけれど、赤錆に錆切りまして、壓しますと開きました。くされて落ちたのでございます。塀の外に、散歩らしいのが一人立つて居たのでございます。其の男が、烏の嘴から落しました奥様の其の指環を、掌に載せまして、凝と見て居ましたのでございます。

紳士　餓鬼め、其奴か。

侍女　え、。

紳士　相手は其奴ぢやな。

侍女　あの、私がわけを言つて、其の指環を返しますやうに申しますと、串戯らしく、否、此は、人間の手を放れたもの、烏の嘴から受取つたのだから返されない。尤も、烏にならば、何時なりとも返して上げよう――と然う申して笑ふんでございます。それでも、何うしても返しません。そして――確に預る、決して迂散なものでない――と云つて、丁と、衣兜から名刺を出してくれました。奥様は、面白いね――とおつしやいました。それから日を極めまして、同じ暮方の頃、其の男を木戸の外まで呼びましたのでございます。其の間に、此の、あの、烏の裝束をお誂へ遊ばしました。そして私がそれを着て出まして、指環を受取りますつもりなのでございましたが、なぶつて遣らう、とおつしやつて、奥様が御自分に烏の裝束をおめし遊ばして、塀の外へ――でも、ひよつと、野原に遊んで居る小兒などが怪しい姿を見て、騒いで悪いと云ふお心付きから、四阿へお呼び入れに成りました。

紳士　奴は、あの木戸から入つたな。あの、木戸から。

侍女　男が吃驚するのを御覽、と私にお囁きなさいました。奥様が、烏は脚では受取らない、とおつしやつて、男が掌にのせました指環を、此處をお開きなさいまして、（咽喉のあく處を示す）口でおくはへ遊ばしたのでございます。

紳士　口でな、最う其の時から。毒蛇め。上顎下顎へ拳を引掛け、透通る齒と紅さいた唇を、めりめりと引裂く、賣婦。（足を擧げて、枯草を踏蹂る。）

畫工　うゝむ、（二聲ばかり、夢に魘されたるものの如し。）

紳士　（はじめて心付く）女郎、此方へ來い。（杖を以て一方を指す。）

侍女　（震へながら）はい。

紳士　頭を着けろ、被れ。俺の前を烏のやうに躍つて行け、――飛べ。邸を横行する黑いものの形を確と見覺えて置かねばならん。躍れ。衣兜には短銃があるぞ。

侍女、烏の如く其の黑き袖を動かす。をのゝき震ふと同じ狀なり。紳士、あとに續いて入る。

三羽の烏　（聲を揃へて叫ぶ）おいらのせゐぢやないぞ。

一の烏　（笑ふ）はゝゝゝゝ、其處で何と言はう。

二の烏　せう事はあるまい。矢張り、あとは、烏の所爲だと言はねば成るまい。

三の烏　すると、人間のした事を、俺たちが引被るのだな。

二の烏　かぶらうとも、背負はうとも。かぶつた處で、背負つた處で、人間のした事は、人間同士が勝手に夥間うちで帳面づらを合せて行く、勘定の遣り取りする。俺たちが構ふ事は少しも

ない。

三の烏　成程な、罪も報も人間同士が背負ひつこ、被りつこをするわけだ。一體、此のたびの事の發源は、其處な、お一どのが惡戯からはじまつた次第だが、さて、恁うなれば高い處で見物で事が濟む。嘴を引傾げて、ことん〳〵と案じて見れば、われらは、これ、餘り性の善い夥間でないな。

一の烏　いや、惡い事は少しもない。人間から言はせれば、善いとも惡いとも言はうがまゝだ。俺は唯屋の棟で、例の夕飯を稼いで居たのだ。處で艶麗な、奥方とか、それ、人間界で言ふものが、虹の目だ、虹の目だ、と云ふものを（嘴を指す）此の黑い、鼻の先へひけらかした。此の節、肉どころか、血どころか、贅澤な目玉などはつひに賞翫した驗がない。鳳凰の髓、麒麟の腮さへ、世にも稀な珍味と聞く。虹の目玉だ、やあ、八千年生延びろ、と逆落しの廂はづれ、鵯越を遣つたがよ、生命がけの仕事と思へ。鳶なら油揚も攫はうが、人間の手に持つたまゝを引手繰る段は、お互に得手でない。首尾よく、かちりと銜へてな、スポンと中庭を抜けたは可かつたが、虹の目玉と云ふ件の代ものは何うだ、齒も立たぬ。や、堅いの候の。先祖以來、田螺を突つくに錬へた口も、さて、がつくりと參つたわ。お庇で舌の根が弛んだ。癪だがよ、振放して素飛ばいたまでの事だ。な、其が源で、人間が何をせうと、彼をせうと、薩張俺が知

つた事ではあるまい。

二の烏　道理かな、說法かな。お釋迦樣より間違ひのない事を云ふわ。いや、又お一どのの指環を銜へたのが惡ければ、晴上つた雨も惡し、ほか〳〵とした陽氣も惡し、虹も惡い、と云はねば成らぬ。雨や陽氣がよくないからとて、何うするものだ。得ての、空に美しい虹の立つ時は、地にも綺麗な花が咲くよ。芍藥か、牡丹か、菊か、猿が折つて蓑にさす、お花畑のそれでなし不思議な花よ。名も知れぬ花よ。雜と虹のやうな花よ。人間の家の中に、然うした花の咲くのは壁にうどんげの開くとおなじだ。俺たちが見れば、薄暗い人間界に、眩い虹のやうな、其の花のパッと咲いた處は鮮麗だ。な、家を忘れ、身を忘れ、生命を忘れて咲く怪しい花ほど、美しい眺望はない。分けて今度の花は、お一どのが蒔いた紅い玉から咲いたもの、吉野紙の霞で包んで、露をかためた硝子の器の中へ密と藏つても置かうものを。人間の黑い手は、此を見るが最後摑み散らす。當人は、黃色い手袋、白い腕飾と思ふさうだ。お互に見れば眞黑よ。人間が見て、俺たちを黑いと云ふと同一かい、別して今來た親仁などは、鐵棒同然、腕に、火の舌を搦めて吹いて、右の不思議な花を微塵にせうと苛つて居るわ。野暮めがな。はて、見て居れば綺麗なものを、仇花なりとも美しく咲かして置けば可い事よ。

三の烏　なぞとな、お二めが、體の可い事を吐す癖に、朝烏の、朝櫻、朝露の、朝風で、朝飯を

急ぐ和郎だ。何だ、仇花なりとも、美しく咲かして置けば可い事だ。から〳〵からと笑はせるな。お互に此處に何して居る。其の虹の散るのを待つて、やがて食はう、突かう、嘗めう、しやぶらうと、毎夜、毎夜、此の間、……咽喉、嘴を、カチ〳〵と嚙鳴らいて居るのでないかい。

二の烏　然ればこそ待つて居る。櫻の枝を踏めばと云つて、蟲の數ほど花片も露もこぼさぬ俺たちだ。此のたびの不思議な其の大輪の虹の臺、紅玉の蕊に咲いた花にも、俺たちが、何と、手を着けるか。雛芥子が散つて實に成るまで、風が誘ふを視めて居るのだ。色には、戀には、情には、其の咲く花の二人を除けて、他の人間は大概風だ。中にも、ぬしと云ふものはな、主人と云ふものはな、淵に棲むぬし、峰にすむ主人と同じで、此が暴風雨よ、旋風だ。一溜りもなく吹散らす。あゝ、無慙な。

一の烏　と云ふ嘴を、こつ〳〵鳴らいて、内々其の吹き散るのを待つのは誰だ。

二の烏　はゝゝはゝ、俺達だ、はゝゝはゝ。先づ口だけは體の可い事を言うて、其の實はお互に餌食を待つのだ。又、此の花は、紅玉の蕊から虹に咲いたものだが、散る時は、肉に成り、血に成り、五色の腸と成る。やがて見ろ、脂の乘つた鮟鱇のひも、と云ふ珍味を、つるりだ。

三の烏　何時の事だ、あゝ、聞いただけでも堪らぬわ。（ばた〳〵と羽を煽つ。）

二の烏　急ぐな、どつち道俺たちのものだ。餌食が其の柔かな白々とした手足を解いて、木の根

の塗膳、錦手の木の葉の小皿盛と成るまでは、精々、咲いた花の首尾を守護して、夢中に躍跳ねるまで、樂ませて置かねば成らん。網で捕つたと、釣つたとでは、鯛の味が違ふと言はぬか。あれ等を苦ませては成らぬ、悲ませては成らぬ、海の水を酒にして泳がせろ。

一の烏　むゝ、其處で、椅子やら、卓子やら、天幕の上げさげまで手傳ふかい。

三の烏　彼れほどのものを、（天幕を指す）持運びから、始末まで、俺たちが、此の黑い翼で人間の目から蔽うて手傳ふとは悟り得ず、薄の中に隱したつもりの、彼奴等の甘さが堪らん。が、俺たちの爲す處は、退いて見ると、如法これ下女下男の所爲だ。天が下に何と烏ともあらうものが、大分權式を落すわけだな。

二の烏　獅子、虎、豹、地を走る獸。空を飛ぶ仲間では、鷲、鷹、みさごぐらゐなものか、餌食を摑んで容色の可いのは。……熊なんぞが、あの形で、推の實を拜んだ形な。鶴とは申せど、尻を振つて泥鰌を追懸ける容體などは、餘り喝采とは參らぬ圖だ。誰も誰も、食ふためには、品も威も下げると思へ。然までにして、手に入れる餌食だ。突くと成れば會釋はない。骨までしやぶるわ。餌食の無慙さ、いや、又其の骨の肉汁の旨さはよ。（身震ひする。）

一の烏　（聞く半ばより、じろ〳〵と醉臥したる畫工を見て居り）おふた、お二どの。

二の烏　あい。

三の烏　あい、と吐す、魔ものめが、ふて〳〵しい。
二の烏　望みとあらば、可愛い、とも鳴くわ。
一の烏　いや、串戯は措け。俺は先刻から思ふ事だ、待設けの珍味も可いが、こゝに目の前に轉がつた餌食は何うだ。
三の烏　其の事よ、血の酒に醉ふ前に、腹へ底を入れて置く相談には成るまいかな。何分にも空腹だ。
二の烏　御同然に夜食前よ。俺も一先に心付いては居るが、其の人間は未だ食頃には成らぬと思ふ。念のために、面を見ろ。
三羽の烏、ばさ〳〵と寄り、頭を、手を、足を、ふん〳〵と嗅ぐ。
一の烏　堪らぬ香だ。
三の烏　あゝ、旨さうな。
二の烏　いや、まだ然うは成るまいか。此の齒をくひしばつた處を見い。總じて寢て居ても口を結んだ奴は、蓋をした貝だと思へ。うかつに嘴を入れると最後、大事な舌を挾まれる。やがて意地汚の野良犬が來て舐めよう。這奴四足めに瀨踏をさせて、可いと成つて、其の後で取蒐らう。食ものが、惡いかして。脂のない人間だ。

一の烏　此の際、乾ものでも構はぬよ。
二の烏　生命がけで乾ものを食つて、一分が立つと思ふか、高蒔繪のお肴を待て。
三の烏　や、待つと云へば、例の通り、ほんのりと薫つて來た。
一の烏　おゝ、人臭いぞ。そりや、女のにほひだ。
二の烏　はて、下司な奴、同じ事を不思議な花が薫ると言へ。
三の烏　おゝ、蘭奢待、蘭奢待。
一の烏　鈴ケ森でも、此の薫は、百年目に二三度だつたな。
二の烏　化鳥が、古い事を云ふ。
三の烏　なぞと少い氣で居ると見える、はゝはゝ。
一の烏　いや、恁うして暗やみで笑つた處は、我ながら不氣味だな。
三の烏　人が聞いたら何と言はう。
二の烏　烏鳴だ、と吐す奴よ。
一の烏　何にも知らずか。
三の烏　不便な奴等。
二の烏　（手を取合うて）おゝ、見える、見える。それ侍女の氣で迎へて遣れ。（みづから天幕の

中より、燭したる蠟燭を取出だし、野中に黑く立ちて、高く手に翳す。一の烏、三の烏は、二の烏の裾に踞む。）

薄の彼方、舞臺深く、天幕の奥斜めに、男女の姿立顯る。一は少紳士、一は貴夫人、容姿美しく輝くばかり。

二の烏　戀も風、無常も風、情も露、生命も露、別るゝも薄、招くも薄、泣くも蟲、歌ふも蟲、跡は野原だ、勝手に成れ。（怪しき聲にて呪す。一と三の烏、同時に跪いて天を拜す。風一陣、灯消ゆ。舞臺一時暗黑。）

はじめ、月なし、此の時薄月出づ。舞臺明く成りて、貴夫人も少紳士も、三羽の烏も皆見えず。天幕あるのみ。

畫工、猛然として覺む。

魔はれたる如く四邊を眴はし、慌しく畫の包をひらく、衣兜のマッチを探り、枯草に火を點ず。

野火、炎々。絹地に三羽の烏あらはる。

凝視。

彼處に敵あるが如く、腕を擧げて睥睨す。

畫工　俺の畫を見ろ。——待て、しかし、繪か、其とも實際の奴等か。

——幕——

海神別莊

時。

現代。

場所。

海底の琅玕殿。

人物。

公子。沖の僧都。（年老いたる海坊主）美女。博士。

女房。侍女。（七人）黒潮騎士。（多數）

森厳藍碧なる琅玕殿裡。黒影あり。――沖の僧都。

僧都　お腰元衆。

侍女一（薄色の洋装したるが扉より出づ）はい、はい。これは御僧。

僧都　や、目覺しく、美しい、異つた扮装でおいでなさる。

侍女一　御挨拶でございます。美しいか何うかは存じませんけれど、異つた支度には違ひないのでございます。若様、豫てのお望みが叶ひまして、今夜お輿入のございます。若奥様が、島田のお髪、お振袖と承りましたから、私どもは、餘計其のお姿のお目立ち遊ばすやうに、皆して、恁やうに申合せましたのでございます。

僧都　はあ、扨てもお似合ひなされたが、何處の浦の風俗ぢやらうな。

侍女一　度々海の上へお出でなさいますもの、よく御存じでおあんなさいませうのに。

僧都　いや、荒海を切つて影を顯すのは暴風雨の折から。如法大抵暗夜ぢやに因つて、見えるのは墓の船に、死骸の蠢く裸體ばかり。色ある女性の衣などは睫毛にも掛りませぬ。さりとも小僧のみぎりはの、蒼い炎の息を吹いても、素奴色の白いはないか、袖の紅いはないか、と胴の

間、狹間、帆柱の根、錨綱の下までも、あなぐり探いたものなれども、孫子は措け、僧都に於ては、久しく心にも掛けませいで、一向に不案内ぢや。

侍女一　（笑ふ）お精進でおいで遊ばします。もし、これは、櫻貝、蘇芳貝、いろ〳〵の貝を蕊にして、花の波が白く咲きます、其の渚を、青い山、綠の小松に包まれて、大陸の婦たちが、夏の頃、百合、桔梗、月見草、夕顏の雪の裝などして、旭の光、月影に、遙に（高濶なる碧瑠璃の天井を、髮艶やかに打仰ぐ）姿を映します。あゝ、風情な。美しいと視めましたものでございますから、私ども皆が、今夜は此の服裝に揃へました。

僧都　一段とお見事ぢや。が、朝ほど御機嫌伺ひに出ました節は、御殿、お腰元衆、いづれも不斷の服裝でおいでなされた。其の節は、今宵、あの美女が此へ輿入の儀はまだ極らなんだ。地體人間は決斷が遲いに因つてな。……其ぢやに、豫てのお心掛か。彌疾く裝が間に合うたものなう。

侍女一　まあ、貴老は。私たち此の玉のやうな皆の膚は、白い尾花の穗を散らした、山々の秋の錦が水に映ると同じに、恁うと思へば、つい其れなりに、思ふまゝ、身の裝の出來ます體で居りますものを。貴老はお忘れなさいましたか。

貴老は。……貴老だとて違ひはしません。緋の法衣を召さうと思へば、お思ひなさいます、と

右左、峯に、一本燃立つやうな。

僧都　ま、ま、分つた。（腰を屈めつゝ、壓ふるが如く掌を擧げて制す）何とも相濟まぬ儀ぢや。海の住居の難有さに馴れて、蔭日向、雲の往來に、潮の色の變ると同樣。如意自在心のまゝ、立處に身の裝の成る事を忘れて居ました。

なれども、僧都が身は、恁うした墨染の暗夜こそ可けれ、慇緋の法衣など絡はうなら、づぶ濡の提灯ぢや、戸惑をした鱣の魚ぢやなどと申さう。壓も石も利く事ではない。（細く丈長き鐵の錨を倒にして携へたる杖を、輕く突直す。）

いや、又忘れては成らぬ。忘れぬ前に申上げたい儀で罷出た。若樣へお取次を賴みましよ。

侍女一　畏りました。唯今。……あの、丁ど可い折に存じます。

右の方闥を排して行く。

僧都　（謹みたる體にて室內を眴す。）

はあ、爭はれぬ。法衣の袖に春がそよぐ。

（錨の杖を抱きて行む。）

公子　（衝と押す、闥を排きて、性急に登場す。面玉の如く蒼丈けたり。黑髮を背に捌く。青地錦の直垂、黃金づくりの劍を佩く。上段、一階高き床の端に、端然として立つ。）

爺い、見えたか。

侍女五人、以前の一人を眞先に、すら〳〵と從ひ出づ。いづれも洋裝。第五の侍女、年最も少し。二人は床の上、公子の背後に。二人は床を下りて僧都の前に。第一の侍女は其の背に立つ。

僧都　は。（大床に跪く。控へたる侍女一、件の錨の杖を預る）これは〳〵、御休息の處を恐入りましてござります。

公子　（親しげに）爺い、用か。

僧都　紺青、群青、白群、朱、碧の御藏の中より、此の度の儀に就きまして、先方へお遣はしに成りました、品々の類と、數々を、念のために申上げたうござりまして。

公子　（立ちたるまゝ）おゝ、あの女の父親に遣つた、陸で結納とか云ふものの事か。

僧都　はあ、いや、御聰明なる若樣。若樣にはお覺違ひでござります。彼等夥間に結納と申すは、親々が緣を結び、媒妁人の手を以ち、婚約の祝儀、目錄を贈りますでござります。然るに此度は、先方の父親が、若樣の御支配遊ばす、わたつみの財寶に望を掛け、もし此の念願の屆くに於ては、眉目容色、世に類なき一人の娘を、海底へ捧げ奉る段、しかと誓ひました。卽ち、彼が望みの寶をお遣しに成りましたに因つて、是非に及ばず、誓言の通り、娘を波に沈めました

のでござります。されば、お送り遊ばされた數の寶は、彼等が結納と申さうより、俗に女の身代と云ふものにござりますので。

公子　（輕く頷く）可、何にしろ些少ばかりの事を、別に知らせるには及ばんのに。

僧都　いや〳〵、鱗一枚、一草の空貝とは申せ、僧都が承りました上は、活達なる若樣、斯やうな事はお氣煩かしうおいでなさりませうなれども、老のしやうがに、お耳に入れねば成りませぬ。お腰元衆もお執成。（五人の侍女に目遣す）平にお聞取りを願はしう。

侍女三　若樣、お座へ。

公子　（顧みて）椅子を此方へ。

侍女三、四、兩人して白き枝珊瑚の椅子を捧げ、床の端近に据う。大隋圓形の白き琅玕の、沈みたる光澤を帶べる卓子、上段の中央にあり。枝のまゝなる見事なる珊瑚の椅子、紅白二脚、紅きは花の如く、白きは霞の如きを、相對して置く。侍女等が捧出でて位置を變へて据ゑたるは、其の白き方一脚なり。

僧都　眞鯛大小八千枚。鰤、鮪、ともに二萬疋。鰹、眞那鰹、各一萬本。大比目魚五千枚。鱚、鮒鯽、鯒、鰷身魚、目張魚、藻魚、合せて七百籠。若布の其の幅六丈、長さ十五尋のもの、百枚一卷九千連。鮟鱇五十袋。虎河豚一頭。大の鮪一番。さて、別に又、月の灘の桃色の枝珊

瑚一株、丈八尺。（此の分、手にて仕方す）周圍三抱の分にござりまして。えゝ、月の眞珠、花の眞珠、雪の眞珠、いづれも一寸の珠三十三粒、八分の珠百五粒、紅寶玉三十顆、大さ鶴の卵、粒を揃へて、此は碧瑪瑙の盆に裝り、綠寶玉、三百顆、孔雀の尾の渦卷の數に合せ、紫の瑠璃の臺、五色に透いて輝きまする鰐の皮三十六枚、沙金の包七十袋。量目約百萬兩。閻浮檀金十斤也。緞子、縮緬、綾、錦、牡丹、芍藥、菊の花、黃金色の堇、銀覆輪の、月草、露草。

侍女一　もし〳〵、唯今の其は、あの、殘らず、其のお娘御の身の代とかにお遣はしの分なのでございますか。

僧都　殘らず身の代と？……はあ、如何さまな。（心付く）不重寶。これは〳〵海松ふさの袖に記して覺えのまゝ、潮に乘つて、颯と讀流しました。はて、何から申した事やら、品目の多い處へ、數々ゆゑに。えゝ〳〵、眞鯛大小八千枚。

侍女一　鰤、鮪ともに二萬疋。鰹、眞那鰹各一萬本。

侍女二（僧都の前にあり）大比目魚五千枚。鱚、魴鮄、鮞、あいなめ、目ばる、藻魚の類合せて七百籠。

侍女三（公子の背後にあり）若布の其の幅六丈、長さ十五尋のもの百枚一卷九千連。

侍女四（同じく公子の背後に）鮟鱇五十袋、虎河豚一頭、大の鮹一番。まあ……（笑ふ。侍女皆笑ふ。）

僧都（額の汗を拭く）それ〳〵然やう、然やう。

公子（微笑しつゝ）笑ふな、老人は眞面目で居る。

侍女五（最も少し。齊しく公子の背後に附添ふ。派手に美しき聲す）月の灘の桃色の枝珊瑚樹、對の一株、丈八尺、周圍三抱の分。一寸の玉三―三粒……雪の眞珠、花の眞珠。

侍女一　月の眞珠。

僧都　少時。までおや〳〵、までにござる。……桃色の枝珊瑚樹、丈八尺、周圍三抱の分までにござつた。（公子に）鶴の卵ほどの紅寶玉、孔雀の渦卷の綠寶玉、青瑪瑙の盆、紫の瑠璃の臺。此の分は、天なる（仰いで禮拜す）月宮殿に貢のものにござりました。

公子　私も然うらしく思つて聞いた。僧都、それから後に言はれた、其の堇、露草などは、金銀寶玉の類は云ふまでもない、魚類ほどにも、人間が珍重しないものと聞く。が、同じく、あの方へ遣はしたものか。

僧都　綾、錦、牡丹、芍藥、縺れも散りもいたしませぬを、老人の申條、はや、又海松のやうに亂れました。えゝ〳〵、其の堇、露草は、若樣、此の度の御旅行につき、白雪の龍馬にめされ、

渚を掛けて浦づたひ、朝夕の、茜、紫、雲の上を山の峰へお潜びにてお出ましの節、珍しくお手に入りましたを、御姉君、乙姫様へ御進物の分でござりました。

侍女一　姫様は、閻浮檀金の一輪挿に、眞珠の露でお活け遊ばし、お手許をお離しなさいませぬさうにございます。

公子　度々は手に入らない。私も大方、姉上に進げた其の事であらうと思つた。

僧都　御意。娘の親へ遣はしましたは、眞鯛より數へまして、珊瑚一對……までに止まりました。

侍女二　海では何ほどの事でもございませんが、受取ります陸の人には、鯛も比目魚も千と萬、少ない數ではございますまいに、僅な日の間に、ようお手廻し、お遣はしに成りましてございます。

僧都　然れば其の事。一國、一島、津や浦の果から果を一網にもせい、人間夥間が、大海原から取入れます獲ものと云ふは、目に溜つた雫ほどに聊少なものでございつての、お腰元衆など思うても見られまい、鉤の尖に蟲を附けて雑魚一筋を釣ると云ふ仙人業をしまするよ。此の度の娘の父は、然までにもなけれども、小船一つで網を打つが、海月ほどにしよぼりと擴げて、泡にも足らぬ小魚を掬ふ。人ものが小さき故に、其が希望を満しますに、手間の入ること、何とも

まだるい。鰯を育てて鯨にするより齒痒い段の行止り。（公子に向ふ）若様は御性急ぢや。早く彼が願を満たいて、誓の美女を取れ、と御意ある。よつて、黒潮、赤潮の御手兵を些とばかり動かしましたわ。赤潮の劍は、炎の稲妻、黒潮の黒い旗は、黒雲の峰を築いて、沖から撞と浴びせたほどに、一浦の津波と成つて、田畑も家も山へ流いた。片隅の美女の家へ、門背戸かけて、疊天井、一齊に、屋根の上の丘の腹まで運込みました儀でござつたよ。

侍女三　まあ、お勇ましい。

公子　（少し俯向く）勇ましいではない。家畑を押流して、浦のもの等は迷惑をしはしないか。

僧都　否、否、黒潮と赤潮が、密と爪彈きしましたばかり。人命を斷つほどではござりませなんだ。尤も迷惑を爲ば、いたせ、娘の親が人間同士の間でさへ、自分ばかりは、思ひ懸けない海の幸を、黄金の山ほど掴みましたに因つて、他の人々の難澁如きは聊か氣にも留めませぬに、海のお世子であらせられます若様。人間界の迷惑など、お心に掛けさせますには毛頭當りませぬ儀でございます。

公子　（頷く）そんなら可——僧都。

僧都　はゝ。（更めて手を支く。）

公子　彼の親は、此方から遣はした、娘の身の代とか云ふものに満足をしたであらうか。

僧都　御意、満足いたしましたればこそ、當御殿、お求めに從ひ、美女を沈めました儀にございます。尤も、眞鯛、鰹、眞那鰹、其の金銀の魚類のみでは、満足をしませなんだが、續いて、三抱へ一對の枝珊瑚を、夜の渚に差置きまするとと、山の端出づる月の光に、眞紫に輝きまするを夢のやうに抱きました時、彼の父親は白砂に領伏し、波の裾を吸ひました。あはれ龍神、一命も捧げ奉ると、御恩のほどを難有がりましたのでございます。

公子　（微笑す）親仁の命などは御免だな。そんな魂を引取ると、海月が殖えて、迷惑をするよ。

侍女五　あんな事をおつしやいます。

一同笑ふ。

公子　けれども僧都、そんな事で満足した、人間の慾は淺いものだね。

僧都　まだ〳〵、彼は深い方でございます。一人娘の身に代へて、海の寶を望みましたは、慾念の逞い故でございまして。……たか〴〵は人間同士、夥間うちで、白い柔な膩身を、炎の燃立つ絹に包んで蒸しながら賣り渡すのが、峠の關所かと心得ます。

公子　馬鹿だな。（珊瑚の椅子をすッと立つ）戀しい女よ。望めば生命でも遣らうものを。……は、はゝ。

微笑す。

侍女四　お思はれ遊ばした娘御は、天地かけて、波かけて、お仕合せでおいで遊ばします。

侍女一　早くお着き遊せば可うございます。私どもお待遠に存じ上げます。

公子　道中の樣子を見よう、旅の樣子を見よう。（闥の外に向つて呼ぶ）おい〳〵、居間の鏡を寄越せ。（闥開く。侍女六、七、二人、赤地の錦の蔽を掛けたる大なる姿見を捧げ出づ。）

僧都も御覽。

僧都　失禮ながら。（膝行して進む。侍女等、姿見を卓子の上に据ゑ、錦の蔽を展く。侍女等、卓子の端の一方に集る。）

公子　（姿見の面を指し、僧都を見返る）彼だ、彼だ。あの一點の光が其だ。お前たちも見ないか。

舞臺轉ず。少時暗黑、寂寞として波濤の音聞ゆ。やがて一個、花白く葉の青き蓮華燈籠、漂々として波に漾へるが如く顯る。續いて花の赤き同じ燈籠、中空の如き高處に出づ。又出づ、やゝ低し。尚ほ見ゆ、少しく高し。其の數五個に成る時、累々たる波の舞臺を露す。美女。毛卷島田に結ふ。白の振袖、綾の帶、紅の長襦袢、胸に水晶の數珠をかけ、襟に兩袖を占めて、波の上に、雪の如き龍馬に乘せらる。凡そ手綱の丈を隔てて、一人下髮の女房。旅扮裝。素足、小袿に褄端折りて、片手に市女笠を携へ、片手に蓮華燈籠を提ぐ。第一點の燈の影は

此なり。黒潮騎士、美女の白龍馬を犇々と圍んで兩側二列を造る。凡十人。皆崑崙奴の形相。手に手に、すく〳〵と槍を立つ。穂先白く晃々として、氷柱倒に黒髪を縫ふ。或ものは燈籠を槍に結ぶ、灯の高きは此なり。或ものは手にし、或ものは腰にす。

女房　貴女、お草臥でございませう。一息、お休息なさいますか。

美女　（夢見るやうに其の瞳を睜く）あゝ、（歎息す）もし、誰方ですか。……私の身體は足を空に、（馬の背に裳を搔緊む）倒に落ちて落ちて、波に沈んで居るのでせうか。

女房　否、お美しいお髪一筋、風にも波にもお縛れはなさいません。何でお身體が倒などと、そんな事がございませう。

美女　何時か、何時ですか、昨夜か、今夜か、前の世ですか。私が一人、楫も櫓もない、舟に、筵に乘せられて、波に流されました時、父親の約束で、海の中へ捕られて行く。私へ供養のためだと云つて、船の左右へ、前後に、波のまに〳〵散つて浮く……蓮華燈籠が流れました。

女房　水に目のお馴れなさいません、貴女には道しるべ、また土産にもと存じまして、此が、（手に翳す）其の燈籠でございます。

美女　まあ、灯も消えずに……

女房　燃えた火の消えますのは、油の盡きる、風の吹く、陸ばかりの事でございます。一度此の國へ受取りますと、こゝには風が吹きません。たゞ花の香の、ほんのりと通ふばかりでございます。紙の細工も珠に替つて、葉の青いのは、翡翠の琅玕、花片の紅白は、眞玉、白珠、紅寶玉。燃ゆる灯も、またゝきながら消えない星でございます。御覽遊ばせ、貴女。お召ものが濡れましたか。お髪も亂れはしますまい。何で、お身體が倒でございませう。

美女　最後に一目、故郷の浦の近い峰に、月を見たと思ひました。其切、底へ引くやうに船が沈んで、私は波に落ちたのです。唯幻に、其の燈籠の樣な蒼い影を見て、胸を離れて遠くへ行く、自分の身の魂か、導く鬼火かと思ひましたが、ふと見ますと、前途にも、あれ〳〵、遙の下と思ふ處に、月が一輪、おなじ光で見えますもの。

女房　あゝ、（望む）あの光は。否。月影ではございません。

美女　でも、貴方、雲が見えます、雪のやうな、空が見えます、瑠璃色の。そして、眞白な絹絲のやうな光が射します。

女房　其の雲は波、空は水。一輪の月と見えますのは、此から貴女がお出遊ばす、海の御殿でございます。あれへ、お迎へ申すのです。

美女　そして、參つて、私の身體は、何う成るのでございませうねえ。

女房　ほゝゝ、（笑ふ）何事も申しますまい。唯お嬉しい事なのです。おめでたう存じます。

美女　あの、捨小舟に流されて、海の贄に取られて行く、あの、（眴す）これが、嬉しい事なのでせうか。めでたい事なのでせうかねえ。

女房　（再び笑ふ）お國では如何でございませうか。私たちが故郷では、最う此の上ない嬉しい、めでたい事なのでございますもの。

美女　彼處まで、道程は？

女房　お國でたとへは煩かしい。……おゝ、五十三次と承ります、東海道を十度づゝ、三百度、往還りを繰返して、三千度いたしますほどでございませう。

美女　えゝ、そんなに。

女房　めした龍馬は風よりも早し、お道筋は黄金の欄干、白銀の波のお廊下、たゞ花の香りの中を、やがてお着きなさいます。

美女　潮風、磯の香、海松、海藻の、咽喉を刺す硫黄の臭氣と思ひのほか、眞個に、清しい、い薫、（柔に袖を動かす）……ですが、時々、悚然する、腥い香のしますのは？……

女房　人間の魂が、貴女を慕ふのでございます。海月が寄るのでございます。

美女　人の魂が、海月と云つて？

女房　海に參ります醜い人間の魂は、皆、海月に成つて、ふは〳〵さまようて歩行きますのでございます。

黒潮騎士　（口々に）――煩い。叱々。――（と、ものなき龍馬の周圍を呵す。）

美女　まあ、情ない、お恥しい。（袖を以て面を蔽ふ。）

女房　否、貴女は、あの御殿の若樣の、新夫人でいらつしやいます、もはや人間ではありません。

美女　えゝ。（袖を落す。――舞臺轉ず。眞暗に成る。）――

女房　（聲のみして）急ぎませう。美しい方を見ると、黒鰐、赤鮫が襲ひます。騎馬が前後を守護しました。お憂慮はありませんが、いざ參ると、斬合ひ攻合ふ、修羅の巷をお目に懸けねば成りません。――騎馬の方々、急いで下さい。

燈籠一つ行き、續いて一つ行く。漂蕩する趣して、高く低く奥の方深く行く。

舞臺燦然として明るし、前の琅玕殿顯る。

公子、椅子の位置を卓子に正しく直して掛けて、姿見の傍にあり。向つて右の上座。左の方に赤き枝珊瑚の椅子、人なくしてたゞ据ゑらる。其の椅子を斜に下りて、沖の僧都、此の度は腰掛けてあり。黒き珊瑚、小形なる椅子を用ゐる。おなじ小形の椅子に、向つて正面に一人、略唐代の儒の服裝したる、髯黑き一人あり。博士なり。

侍女七人、花の如く其の間を裝ひ立つ。

公子　博士、お呼立をしました。

博士　（敬禮す。）

公子　此を御覽なさい。（姿見の面を示す。）千仭の崖を累ねた、漆のやうな波の間を、幽に蒼い灯に照らされて、白馬の背に手綱したは、此の度迎へ取るおもひものなんです。陸に獅子、虎の狙ふと同一に、入道鰐、坊主鮫の一類が、美女と見れば、途中に襲撃つて、黑髪を吸ひ、白き乳を裂き、美しい血を呑まうとするから、守備のために、旅行さきで、手にあり合せただけ、少數の黑潮騎士を附添はせた。渠等は白刃を揃へて居る。

博士　至極のお計ひに心得まするが。

公子　處が、敵に備ふる此處の守備を出拂はしたから不用心ぢや、危險であらう、と僧都が言はれる。……其は恐れん、私が居れば仔細ない。けれども、又、僧都の言はれるには、白衣に緋の襲した女子を馬に乘せて、黑髪を槍尖で縫つたのは、彼の國で引廻しとか稱へた罪人の姿に似て居る、私の手許に迎入るゝものを、不祥ぢや、忌はしいと言ふのです。事實不祥なれば、途中の保護は他に幾干も手段があります。其は構はないが、私は聊かも不祥

と思はん、忌はしいと思はない。此を見ないか。私の領分に入つた女の顏は、白い玉が月の光に包まれたと同一に、愈々清い。眉は美しく、瞳は澄み、唇の紅は冴えて、聊かも窶れない。憂へて居らん。清らかな衣を着、新に梳つて、花に露の點滴る裝して、馬に騎した姿は、かの國の花野の丈を、錦の山の懷に抽く……歩行より、車より、駕籠に乘つたより、一層鮮麗なものだと思ふ。其の上、選拔した慓悍な黑潮騎士の精鋭等に、長槍を以て四邊を拂はせて通るのです。得意思ふべしではないのですか。

僧都　（頻に頭を傾く。）

公子　引廻しと聞けば、恥を見せるのでせう、苦痛を與へるのであらう。槍で圍み、旗を立て、淡く清く裝つた得意の人を馬に乘せて市を練つて、やがて刑場に送つて殺した處で、――殺されるものは平凡に疾病で死するより愉快でせう。――其が何の刑罰に成るのですか。陸と海と、國が違ひ、人情が違つても、まさか、そんな刑罰はあるまいと想ふ。僧都は、うろ覺えながら確に記憶に殘ると言はれる。……貴下をお呼立した次第です。一寸お驗べを願ひませうか。

博士　仰聞けの記憶は私にもありますで。しかし、念のために驗べまするで。えゝ、陸上一切の刑法の記錄でありませうか、それとも。

公子　面倒です、あとは何うでも可い。たゞ女子を馬に乘せ、槍を立てて引廻したと云ふ、そんな事があつたかと云ふ、それだけです。

博士　正史でなく、小説、淨瑠璃の中を見ませうで。時の人情と風俗とは、史書よりも寧ろ此の方が適當でありますので。（金光燦爛たる洋綴の書を展く。）

公子　（卓子に腰を掛く）大相氣の利いた書物ですね。

博士　此は、佛國の大帝奈翁が、西暦千八百八年、西班牙遠征の途に上りました時、豫て世界有數の讀書家。必要によつて當時の圖書館長バルビールに命じて製らせました、函入新裝の、一千卷、一架の內容は、宗教四十卷、敍事詩四十卷、戲曲四十卷、其の他の詩篇六十卷。歷史六十卷、小說百卷、と申しまするデュオデシモ形と申す有名な版本の事を……お聞及びなさいまして、御姉君、乙姫樣が御工夫を遊ばしました。蓮の絲、一筋を、凡そ枚數千頁に薄く織擴げて、一萬枚が一折、一百二十折を合せて一册に綴ぢましたものでありまして、此の國の微妙なる光に展きますると、森羅萬象、人類をはじめ、動植物、鑛物、一切の元素が、一々づゝ微細なる活字と成つて、然も、各々五色の輝を放ち、名詞、代名詞、動詞、助動詞、主客、句讀、いづれも個々別々、七彩に照つて、恁く開きました眞白な枚の上へ、自然と、染め出さるゝのでありまして。

公子　姉上が、其を。――嘸、御祕藏のものでせう。

博士　御祕藏ながら、若樣の御書物藏へも、整然と姫樣がお備へつけでありますので。

公子　では、私の所有ですか。

博士　若樣は此の册子と同じものを、瑪瑙に靑貝の蒔繪の書棚、五百架、御所有で居らせられまする次第であります。

公子　姉があつて幸福です。どれ、（取つて披く）此は……唯白紙だね。

博士　は、恐れながら、それ〴〵の豫備の知識がありませんでは、自然の其の色彩ある活字は、ベエジの上には寫り兼ねるのでございます。

公子　恥入るね。

博士　いや〳〵、若樣は御勇武で居らせられます。入道鰐、黑鮫の襲ひまする節は、御訓練の黑潮、赤潮騎士、御手の劍でなうては御退けに成りまする次第には參らぬのでありまして。雖然、姉姫樣の御心づくし、節々は御閱讀の儀をお勸め申まするので。

僧都　もろともに、お勸め申上げますでございます。

公子　（頷く）まあ、今の引廻しの事を見て下さい。

博士　確に。（書を披く）手近に淨瑠璃にありました。あゝ、此にあります。……若樣、此は大日

本浪華の町人、大經師以春の年若き女房、名だたる美女のおさん。手代茂右衛門と不義顯れ、即ち引廻し磔に成りまする處を、記したのでありまして。

公子　お讀み。

博士　（朗讀す）――紅蓮の井戸堀、焦熱の、地獄のかま塗よしなやと、急がぬ道をいつのまに、越ゆる我身の死出の山、死出の田長の田がりよし、野邊より先を見渡せば、過ぎし冬至の冬枯の、木の間木の間にちら〳〵と、ぬき身の槍の恐しや、――

公子　（姿見を覗きつゝ、且つ聽きつゝ）あゝ、幾干か似て居る。

博士　――また冷返る夕嵐、雪の松原、此の世から、恁る苦患にわう亡日、島田亂れてはら〳〵はら、顏にはいつもはんげしやう、縛られし手の冷たさは、我身一つの寒の入、涙ぞ指の爪とりよし、袖に氷を結びけり。……

侍女等、傾聽す。

公子　唯、いゝ姿です、美しい形です。世間は其で其の女の罪を責めたと思ふのだらうか。

博士　先、ト見えまするので。

僧都　然やうでございます。

公子　馬に騎つた女は、殺されても戀が叶ひ、思ひが屆いて、嘸本望であらうがね。

僧都　――袖に氷を結びけり。涙などと、歎き悲しんだやうにございます。

公子　其は、其の引廻しを見る、見物の心ではないのか。私には分らん。（頭を掉る。）

博士――まだ他に例があるのですか。

博士　（朗讀す）……世の哀とぞなりにける。今日は神田のくづれ橋に恥をさらし、又は四谷、芝、淺草、日本橋に人こぞりて、見るに惜まぬはなし。是を思ふに、かりにも人は惡き事をせまじきものなり。天是を許し給はぬなり。……

公子　（眉を顰む。――侍女等齊しく不審の面色す。）

博士　……此女思込みし事なれば、身の寞るゝ事なくて、毎日ありし昔の如く、黑髮を結はせて美はしき風情。……

公子　（色解く。侍女等、眉をひらく。）

博士　中略をいたします。……聞く人一しほいたはしく、其姿を見おくりけるに、限ある命のうち、入相の鐘つく比、品かはりたる道芝の邊にして、其身は臺き煙となりぬ。人皆いづれの道にも煙はのがれず、殊に不便は是にぞありける。――此で、鈴ケ森で火刑に處せられまするまでを、確か江戸中棄札に槍を立てて引廻した筈と心得まするので。

公子　分りました。其はお七と云ふ娘でせう。私は大すきな女なんです。御覽なさい。何處に當

人が歎き悲みなぞしたのですか。人に惜まれ可哀がられて、女それ自身は大満足で、自若として火に燒かれた。得意想ふべしではないのですか。何故其が刑罰なんだね。もし刑罰とすれば、惠の杖、情の鞭だ。實際其の罪を罰しようとするには、其のまゝ無事に置いて、平凡に愚圖愚圖に生存らへさせて、皺だらけの婆にして、其の娘を終らせるが可いと、私は思ふ。……分けて、現在、殊に其のお七の如きは、姉上が海へお引取りに成つた。刑場の鈴ケ森は自然海に近かつた。姉上は御覽に成つた。鐵の鎖は手足を繫いだ、燃草は夕霜を置殘して其の肩を包んだ。煙は雪の振袖をふすべた。炎は緋鹿子を燃え拔いた。緋の牡丹が崩れるより、虹が燃えるより美しかつた。戀の火の白熱は、凝つて白玉と成る、其の膚を、氷つた雛芥子の花に包んだ。姉の手の甘露が沖を曇らして注いだのだつた。其のまゝ海の底へお引取りに成つて、現に、姉上の宮殿に、今も十七で、紅の珊瑚の中に、結綿の花を咲かせて居るのではないか。男は死ななかつた。存命へて坊主に成つて老い朽ちた。娘のために、姉上は其さへお引取りに成つた。けれども、其の魂は、途中で牡の海月に成つた。――時々未練に娘を覗いて、赤潮に追拂はれて、醜く、ふら〳〵と生白く漾うて失する。あはれなものだ。

娘は幸福ではないのですか。火も水も、火は虹と成り、水は瀧と成つて、彼の生命を飾つたのです。拔身の槍の刑罰が馬の左右に、其の譽を輝かすと同一に。――博士如何ですか、僧都。

博士　しかし、しかし若樣、私は愼重にお答へをいたしまする。身は此の職にありながら、事實、人間界の心も情も、まだ聊かも分らぬのでありまして。若樣、唯今の仰せは、其は、すべて海の中にのみ留まりまするが。

公子　（穩和に頷く）姉上も、以前お分りに成らぬと言はれた。其の上、貴下がお分りにならなければ此は誰にも分らないのです。私にも分らない。しかし事情も違ふ。彼を迎へる、道中の此の（又姿見を指す）馬上の姿は、別に不祥ではあるまいと思ふ。

僧都　唯今、仰せ聞けられ承りまする內に、條理は辨へず、僧都にも分らぬことのみではございますが、唯、黑潮の拔身で圍みました段は、別に忌はしい事ではございませんやうに、老人にも、其の合點參りましてございます。

公子　可、しかし僧都、こゝに蓮華燈籠の意味も分つた。が、一つ見馴れないものが見えるぞ。女が、黑髮と、あの雪の襟との間に――胸に珠を掛けた、彼は何かね。

僧都　はあ。（卓子に伸上る）はゝ、いかさま、いや、若樣。あれは水晶の數珠にございます。海に沈みまする覺悟につき、冥土に參る心得のため、檀那寺の和尙が授けましたのでございます。

公子　冥土とは？……其こそ不埒だ。そして仇光りがする、あれは……水晶か。

博士　水晶とは申す條、近頃は專ら硝子を用るますので。

公子　（一笑す）私の戀人ともあらうものが、無ければ可い。が、硝子とは何事ですか。金剛石、また眞珠の揃うたのが可い。……博士、贈つて然るべき頸飾をお檢べ下さい。

博士　畏りました。

公子　そして指環の珠の色も怪しい、お前たち何う見たか。

侍女一　近頃は、かんてらの灯の露店に、紅寶玉、綠寶玉と申して、貝を鬻ぐと承ります。

公子　お前たちの化粧の泡が、波に流れて渚に散つた、あの貝が寶石か。

侍女二　錦襴の服を着けて、青い頭巾を被りました、立派な玉商人の賣りますものも、擬が多いさうにございます。

公子　博士、次手に指環を贈らう。僧都、すぐに出向うて、遠路であるが、途中、早速、硝子と其の擬ひ珠を取棄てさして下さい。お老寄に、御苦勞ながら。

僧都　（苦笑す）若樣には、新夫人の、まだ、海にお馴れなさらず、御到着の遲いばかり氣になされて、老人が、こゝに形を消せば、瞬く間もなう、お姿見の中の御馬の前に映りまする神通を、お忘れなされて、老寄に苦勞などと、心外な御意を蒙りまするわ。

公子　はゝは、（無邪氣に笑ふ）失禮をしました。

博士、僧都、一揖して廻廊より退場す。侍女等慇懃に見送る。

少し窮屈であつたけな。

侍女等親しげに皆其の前後に齊眉き寄る。

性急な私だ。――女を待つ間の心遣にしたい。誰か、あの國の歌を知つて居らんか。

侍女三　存じて居ります。浪花津に咲くや此花冬籠、今を春へと咲くや此花。

侍女四　若樣、私も存じて居ります。淺香山を。

公子　いや。そんなのではない。（博士がおきたる書を披きつゝ）女の國の東海道、道中の唄だ。何とか云ふのだつた。此の書はいくらか覺えがないと、文字が見えないのださうだ。（呟く）姉上は貴重な、しかし、少しあてつこすりの書をお拵へに成つたよ。あゝ、何とか云つた、東海道の。

侍女五　五十三次のでございませう、私が少し存じて居ります。

公子　歌うて見ないか。

侍女五　はい。（朗かに優しくあはれに唄ふ。）

都路は五十路あまりの三つの宿、……

公子　おゝ、其だ、字書のやうに、江戸紫で、都路と標目が出た。（展く）あとを、

侍女五　……時得て咲くや江戸の花、浪靜なる品川や、やがて越來る川崎の、軒端ならぶる神奈

川は、早や程ケ谷に程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ。紫匂ふ藤澤の、野面に續く平塚も、もとのあはれは大磯か。蛙鳴くなる小田原は。……（極悪げに）……もうあとは忘れました。

公子　可、こゝに綠の活字が、白い雲の枚に出た。――箱根を越えて伊豆の海、三島の里の神垣や――さあ、忘れた所は教へて遣らう。此の歌で、五十三次の宿を覺えて、お前たち、あの道中雙六と云ふものを遊んで見ないか。上りは京都だ。姉の御殿に近い。誰か一人上つて、雙六の濟む時分、丁度、此の女は（姿見を見つゝ）着くであらう。一番上りのものには、瑪瑙の莢に、紅寶玉の實を裝つた、あの造りものの吉祥果を遣る。繪は直ぐに間に合ぬ。此の室を五十三に割つて雙六の目に合せて、一人づゝ身體を進めるが可からう。……賽が要る、持つて來い。

（侍女六七、うつむいてともに微笑す）――何うした。

侍女六　姿見をお取寄せ遊ばしました時。

侍女七　二人して盤の雙六をして居りましたので、賽は持つて居りますのでございます。

公子　おもしろい。向うの廻廊の端へ集まれ。そして順に成つて始めるが可い。

侍女七　床へ振りませうでございますか。

公子　心あつて招かないのに來た、賽にも魂がある、寄越せ。（受取る）卓子の上へ私が投げよう。お前たち一から七まで、目に從うて順に動くが可い。さあ、集れ。

（侍女七人、いそ〳〵と、續いて廻廊のはづれに集り、貴女は一。私は二。恁う口々に樂しげに取定め、勇みて賽を待つ。）

可いか、（片手に書を持ち、片手に賽を投ぐ）――一は三、かな川へ。（侍女一人進む）二は一、品川まで。（侍女一人また進む）三は五だ、戸塚へ行け。

（恁くして順々に繰返し次第に進む。第五の侍女、年最も少きが一人衆を離れて賽の目に乘り、正面突當りなる窓際に進み、他と、間隔る。公子。これより前、姿見を見詰めて、賽の目と宿の數を算へ淀む。……此の時、うかとしたる體に書を落す。）

まだ、誰も上らないか。

侍女一　漸と一人天龍川まで參りました。

公子　あゝ、まだるつこい。賽を二つ一所に振らうか。（手にしながら姿見に見入る。侍女等、等く其方を凝視す。）

侍女五　きやつ。（叫ぶ。隙なし。其の姿、窓の外へ裳を引いて颯と消ゆ）あゝれえ。

侍女等、口々に、あれ、あれ、鮫が、鮫が、人道鮫が、と立亂れ騷ぎ狂ふ。

公子　入道鮫が、何、（窓に衝と寄る。）

侍女一　あゝ、黑鮫が三百ばかり。

侍女二　取巻いて、群りかゝつて。
侍女三　あれ、入道が口に銜へた。
公子　外道、外道、其の女を返せ、外道。（叱咤しつゝ、窓より出でんとす。）
侍女等縋り留む。
侍女四　輕々しい、若樣。
公子　放せ。あれ見い。外道の口の間から、女の髮が溢れて落ちる。やあ、胸へ、乳へ、牙が喰入る。えゝ、油斷した。……骨も筋も斷れような。あゝ、手を悶える、裳を煽る。
侍女六　否、若樣、私たち御殿の女は、身は綿よりも柔かです。
侍女七　蓮の絲を束ねましたやうですから、鰐の牙が、脊筋と鳩尾へ嚙合ひましても、薄紙一重透きます内は、血にも肉にも障りません。
侍女三　入道も、一類も、色を漁るのでございます。生命は頃刻助りませう。
侍女四　其の中に、其の中に。まあ、お靜まり遊ばして。
公子　いや、俺の力は弱いもののためだ。生命に掛けて取返す。——鎧を寄越せ。
侍女二人衝と出で、引返して、二人して、一領の鎧を捧げ、背後より颯と肩に投掛く。
公子、上へ引いて、頸よりつらなりたる兜を頂く。角ある毒龍、凄じき頭と成る。其の頭を

頂く時に、侍女等、鎧の裾を捌く。外套の如く背より垂れて、紫の鱗、金色の斑點連り輝く。
公子、又袖を取つて肩よりして自ら喉に結ぶ、此の結びめ、左右一雙の毒龍の爪なり。迅速に一縮す。立直るや否や、劍を拔いて、頭上に翳し、ハタと窓外を睨む。
侍女六人、齊しく其の左右に折敷き、手に手に匕首を拔連れて、晃々と敵に構ふ。
外道、退くな。（凝と視て、劍の刃を下に引く）虜を離した。受取れ。
侍女一　鎧をめしたばつかりで、御威德を恐れて引きました。
侍女二　長う太く、數百の鮫のかさなつて、蜈蚣のやうに見えたのが、あゝ、ちり〳〵に、ちりぢりに。
侍女三　めだかのやうに遁げて行きます。
公子　おゝ、丁度黑潮等が歸つて來た、歸つた。
侍女四　眞個に、おつかひ歸りの姉さんが、とりこを抱取つて下すつた。
公子　介抱してやれ。お前たちは出迎へ。
侍女三人づゝ、一方は閨のうちへ。一方は廻廊に退場。
公子、眞中に、すつくと立ち、靜かに劍を納めて、右手なる白珊瑚の椅子に凭る。騎士五人廻廊まで登場。

騎士一同　（槍を伏せて、蹞り、同音に呼ぶ）若様。
公子　お、、歸つたか。
騎士一　以ての外な、今ほどは。
公子　何でもない、私は無事だ、皆御苦勞だつたな。
騎士一同　はッ。
公子　途中まで出向つたらう、僧都は何うしたか。
騎士一　あとの我ら夥間を率ゐて、入道鮫を追掛けて參りました。
公子　よい相手だ、戰鬪は觀ものであらう。――皆は休むが可い。
騎士　槍は鞘に納めますまい、此のまゝ御門を堅めまするわ。
公子　然までにせずとも大事ない、休め。
騎士等、禮拜して退場。侍女一、登場。
侍女一　御安心遊ばしまし、疵を受けましたほどでもございません。唯、酷く驚きまして。
公子　可愛相に、よく介抱して遣れ。
侍女一　二人が附添つて居ります、（廻廊を見込む）あゝ、最う御廊下まで。（公子のさしづにより、姿見に錦の蔽を掛け、闥に入る。）

美女。先達の女房に、片手、手を曳かれて登場。姿を肅に、深く差俯向き、面影やゝやつれたれども、然まで悪怯れざる態度、徐に廻廊を進みて、床を上段に昇る。昇る時も、裾捌き靜なり。
侍女三人、燈籠二個づゝ二人、一つを一人、五個を提げて附添ひ出で、一人々々、廻廊の廂に架け、其のまゝ引返す。燈籠を侍女等の差置き果つるまでに、女房は、美女を其の上段、紅き枝珊瑚の椅子まで導く順にてありたし。女房、謹んで公子に禮して、美女に椅子を敎ふ。
女房　お掛け遊ばしまし。
美女、据置かるゝ狀に椅子に掛く。女房は其の裳に跪居る。
美女、うつむきたるまゝ少時、皆無言。やがて顏を上げて、正しく公子と見向ふ。瞳を据ゑて瞬きせず。――間。
公子　よく見えた。（無造作に、座を立つて、卓子の周圍に近づき、手を取らんと衝と腕を伸ばす。美女、崩るゝが如くに椅子をはづれ、床に伏す。）
女房　何うなさいました、貴女、何うなさいました。
美女　（聲細く、然れども判然）はい、……覺悟しては來ましたけれど、餘りと言へば、可恐うございますもの。

女房　（心付く）おゝ、若様。其の鎧をお解き遊ばせ。お驚きなさいますのも御尤でございます。

公子　解いても可い、（結び目に手を掛け、思慮す）が、解かんでも可からう。……最初に見た目は何處までも附絡ふ。（美女に）貴女、おい、貴女、此を恐れては不可ん、私は此あるがために、強い。此あるがために力があり威がある。今も既に此に因つて、めしつかふ女の、入道鮫に嚙まれたのを助けたのです。

美女　（やゝ面を上ぐ）お召使が鮫の口に、矢張り、そんな可恐い處なんでございますか。

公子　はゝはゝ、（笑ふ）貴女、敵のない國が、世界の何處にあるんですか。仇は至る處に滿ちて居る――唯一人の娘を捧ぐ、……海の幸を賜はれ――貴女の親は、既に貴女の仇なのではないか。唯其敵に勝てば可いのだ。私は、此の強さ、力、威あるがために勝つ。閨に唯二人ある時でも私は此を脱ぐまいと思ふ。私の心は貴女を愛して、私の鎧は、敵から、仇から、世界から貴女を守護する。弱いものの爲に強いんです。毒龍の鱗は絡ひ、爪は抱き、角は枕しても聊も貴女の身は傷けない。ともに此の鎧に包まるゝ内は、貴女は海の女王なんだ。放縱に大膽に、不羈、專横に、心のまゝにして差支へない。鱗に、爪に、角に、一絲掛けない白身を抱かれ包まれて、渡津海の廣さを散歩しても、敢て世に憚る事はない。誰の目にも觸れない。人は指をせん。時として見るものは、沖の其の影を、眞珠の光と見る。指すものは、喜見城の幻景に迷

ふのです。

女の身として、優しいもの、媚あるもの、從ふものに慕はれて、其が何の本懷です。私は鱗を以て、角を以て、爪を以て愛するんだ。……鎧は脱ぐまい、と思ふ。（從容として椅子に戻る。）

美女　（起直り、會釋す）……父へ、海の幸をお授け下さいました、津波のお強さ、船を覆して、此處へ、遠い海の中をお連れなすつた、お力。道すがらは又お使者で、金剛石の此の襟飾、寶玉の此の指環、（嬉しげに見ゆ）貴女の御威德はよく分りましたのでございます。

公子　津波位、家來どもが些細な事を。さあ、其處へお掛け。

女房、介抱して、美女、椅子に直る。

頸飾なんぞ、珠なんぞ。貴女の腰掛けて居る、其は珊瑚だ。

美女　まあ、父に下さいました枝よりは、幾倍とも。

公子　あれは草です。較ぶれば此處のは大樹だ。椅子の丈は陸の山よりも高い。然うして居る貴女の姿は、夕日影の峰に、雪の消殘つたやうであらう。少しく離れた私の兜の龍頭は、城の天守の棟に飾つた黄金の鯱ほどに見えようと思ふ。

美女　あの、人の目に、それが、貴方？

公子　譬喩です、人間の目には何にも見えん。

美女　あゝ、見えはいたしますまい。お恥かしい、人間の小さな心には、此處に、見ますれば私が裳を曳きます床も、琅玕の一枚石。恁うした御殿のある事は、夢にも知らないのでございますもの、情なう存じます。

公子　否、そんなに謙遜をするには當らん。陸には名山、佳水がある。峻嶽、大河がある。

美女　でも、こんな御殿はないのです。

公子　あるのを知らないのです。海底の琅玕の宮殿に、寶藏の珠玉金銀が、虹に透いて見えるのに、更科の秋の月、錦を染めた木曾の山々は劣りはしない。……峰には、其の錦葉を織る龍田姫がおいでなんだ。人間は知らんのか、知つても知らないふりをするのだらう。知らない振をして見ないんだらう。――陸は尊い、景色は得難い。今も、道中雙六をして遊ぶのに、五十三次の一枚繪さへ手許にはなかつたのだ。繪も貴い。

美女　あんな事をおつしやつて、繪には活きたものは住んで居りませんではありませんか。

公子　いや、住居をして居る。色彩は皆活きて動く。けれども、人は知らないのだ。人は見ないのだ。見ても見ない振をして居るんだから、決して人間の凡てを貴いとは言はない、美いとは言はない。唯陸は貴い。けれども、我が海は、此の水は、一畝りの波を起して、其の陸を浸す事が出來るんだ。たゞ貴く、美いものは亡びない。……中にも貴女は美しい。だから、陸の一

浦を亡ぼして、こゝへ迎へ取つたのです。亡ぼす力のあるものが、亡びないものを迎へ入れて、且つ愛し且つ守護するのです。貴女は、喜ばねば不可い、嬉しがらなければならない、悲しんでは成りません。

女房　貴女、おつしやる通りでございます。途中でも私が、お喜ばしい、おめでたい儀と申しました。決してお歎きなさいます事はありません。

美女　否、歎きはいたしません。悲しみはいたしません。唯歎きますもの、悲しみますものに、私の、此の容子を見せて遣りたいと思ふのです。

女房　人間の目には見えません。

美女　故郷の人たちには。

公子　見えるものか。

美女　（やゝ意氣ぐむ）あの、私の親には。

公子　貴女は見えると思ふのか。

美女　恁うして、活きて居りますもの。

公子　（屹としたる音調）無論、活きて居る。しかし、船から沈む時、此處へ來るに何う云ふ決心を爲たのですか。

美女　それは死ぬ事と思ひました。故郷の人も皆然う思つて、分けて親は歎き悲しみました。

公子　貴女の親は悲しむ事は少しもなからう。はじめから其のつもりで、約束の財を得た。然も滿足だと云つた。其の代りに娘を波に沈めるのに、少しも歎くことはないではないか。

美女　けれども、父娘の情愛でございます。

公子　勝手な情愛だね。人間の、そんな情愛は私には分らん。（頭を掉る）が、まあ、情愛として置く、其で。

美女　父は涙にくれました。小船が波に放たれます時、渚の砂に、父の倒伏しました處は、あの、丁ど夕月に紫の枝珊瑚を抱きました處なのです。そして、後の歎は、前の喜びにくらべまして、幾十層倍だつたでございませう。

公子　ぢや、其の枝珊瑚を波に返して、約束を戻せば可かつた。

美女　否、ですが、最う、海の幸も、枝珊瑚も、金銀に代り、家藏に代つて居たのでございます。

公子　可、其の金銀を散らし、施し、棄て、藏を毀ち、家を燒いて、もとの破蓑一領、網一具の漁民と成つて、娘の命乞をすれば可かつた。

美女　それでも、約束の女を寄越せと、海坊主のやうな黑い人が、夜ごと〳〵天井を覗き、屏風を見越し、壁襖に立つて、責めはたり、催促をなさいます。今更、家藏に替へましたッて、と

然う思つたのでございます。

公子　貴女の父は、もとの貧民になり下るから娘を許して下さい、と、其の海坊主に掛合つて見たのですか。見はしなからう。そして、貴女を船に送出す時、磯に倒れて悲しまうが、新しい白壁、艶ある甍を、山際の月に照らさして、夥多の奴婢に取卷かせて、近頃呼入れた、若い妾に介抱されて居たではないのか。何故、其が情愛なんです。

美女　はい。……（恥ぢて首低る。）

公子　貴女を責るのではない。よし其が人間の情愛なれば情愛で可い、私とは何の係はりもないから。些とも構はん。が、私の愛する、この宮殿にある貴女が、そんな故郷を思うて、歎いては不可ん。悲しんでは不可んと云ふのです。

美女　貴方。（向直る。聲に力を帶ぶ）私は始めから、決して歎いては居ないのです。父は悲しみました。浦人は可哀がりました。ですが私は――約束に應じて寶を與へ、其の約束を責めて女を取る、――それが夢なれば、船に乘つても沈みはしまい。もし事實として、浪に引入るゝものがあれば、其は生あるもの、形あるもの、云ふまでもありません、心あり魂あり、聲あるものに違ひない。其の上、威があり力があり、榮と光とあるものに違ひないと思ひました。ですから、人は然うして歎いても、私は小船で流されますのを、然まで、慌騒ぎも、泣悲しみも、

落着過ぎもしなかつたんです。もしか、船が沈まなければ無事なんです。生命はあるんですもの。覆す手があれば、それは活きて居る手なんです。其の手に縋つて、海の中に活きられると思つたのです。

公子　（聞きつゝ、莞爾とす）やあ、（女房に）……此の女は豪いぞ！　はじめから歎いて居らん、慰め賺す要はない。私はしをらしい。あはれな花を手活にしてながめようと思つた。違ふ、此は樂く歌ふ鳥だ、面白い。それも愉快だ。おい、酒を寄越せ。

女房　盞を取つて、公子と美女の前に置く。侍女退場す。女房酒を兩方に注ぐ。

女房　めし上りまし。

美女　（辭宜す）私は、些とも。

公子　（品よく盞を含みながら）貴女、少しも辛うない。

女房　貴女の薄紅なは桃の露、あちらは菊花の雫です。お國では御存じありませんか。海には最上の飲料です。お氣が清しくなります、召あがれ。

美女　あの、桃の露、（見物席の方へ、半ば片袖を蔽うて、うつむき飲む）は。（と小き呼吸す）何と云ふ涼しい、爽やいだ——蘇生つたやうな氣がします。

公子　蘇生つたのではないでせう。更に新しい生命を得たんだ。

美女　嬉しい、嬉しい、嬉しい、貴方。私が恁うして活きて居ますのを、見せて遣りたう存じます。

公子　別に見せる要はありますまい。

美女　でも、人は私が死んだと思つて居ります。

公子　勝手に思はせて置いて可いではないか。

美女　ですけれども、ですけれども。

公子　其の情愛、とかで、貴女の親に見せたいのか。

美女　えゝ、父をはじめ、浦のもの、それから皆に知らせなければ殘念です。

公子　（卓子に胸を凭出す）歸りたいか、故郷へ。

美女　否、此の宮殿、此の寶玉、此の指環、此の酒、此の榮華、私は故郷へなぞ歸りたくはないのです。

公子　では、何が知らせたいのです。

美女　だつて、貴方、人に知られないで活きて居るのは、活きて居るのぢやないんですもの。

公子　（色はじめて鬱す）むゝ。

美女　（微醉の瞼花やかに）誰も知らない命は、生命ではありません。此の寶玉も、此の指環も、人が見ないでは、些とも價値がないのです。

公子　それは不可ん。（卓子を輕く掏つて立つ）貴女は榮燿が見せびらかしたいんだな。そりや不可ん。人は自己、自分で滿足をせねばならん。人に價値をつけさせて、其に從ふべきものぢやない。（近寄る）人は自分で活きれば可い、生命を保てば可い。然も愛するものとともに活きれば、少しも不足はなからうと思ふ。寶玉とても其の通り、手箱に此を藏すれば、寶玉其のものだけの價値を保つ。人に與ふる時、十倍の光を放つ。唯、人に見せびらかす時、其の艶は黑く成り、其の質は醜く成る。

美女　えゝ、ですから……來るお庭にも敷詰めてありました、あの寶玉一つも、此の上お許し下さいますなら、屹と慈善に施して參ります。

公子　こゝに、用意の寶藏がある。皆、貴女のものです。施すは可い。が、人知れずでなければ出來ない、貴女の名を顯し、姿を見せては施すことはならないんです。

美女　それでは何にもなりません。何の效もありません。

公子　（色やゝ嶮し）隨分、勝手を云ふ。が、貴女の美しさに免じて許す。歌ふ鳥が囀るんだ、雲雀は星を凌ぐ。星は蹴落さない。聲が可愛らしいからなんです。（女房に）おい、注げ。

女房酌す。

美女　（怯れたる內端な態度）もう〳〵、決して、虛飾、榮燿を見せようとは思ひません。あの、唯活きて居る事だけを知らせたう存じます。

公子　（冷かに）止したが可からう。

美女　否、唯今も申します通り、故鄕へ歸つて、其處に留まります氣は露ほどもないのです。一寸お許しを受けまして生命のあります事だけを。

公子、無言にして頭掉る。美女、縋るが如くす。

あの、お許しは下さいませんか。些との外出もなりませんか。

公子　（爽に）獄屋ではない、大自由、大自在な領分だ。歎くもの悲しむものは無論の事、僅少の憂あり、不平あるものさへ一日も一個たりとも國に置かない。が、貴女には既に心を許して、祕藏の酒を飲ませた。海の果、陸の終、思つて行かれない處はない。故鄕如きは唯一飛、瞬きをする間に行かれる。（愍む如く染々と顏を視る）が、氣の毒です。

貴女に、其の驕と、虛飾の心さへなかつたら、一生聞かなくとも濟む、また聞かせたくない事だつた。貴女、これ。

（美女顏を上ぐ。其の肩に手を掛く）こゝに來た、貴女は最う人間ではない。

美女　えゝ。（驚く。）

公子　蛇身に成つた、美しい蛇に成つたんだ。

美女、瞳を睜る。

其の貴女の身に輝く、寶玉も、指環も、紅、紫の鱗の光と、人間の目に輝くのみです。

美女　あれ。（椅子を落つ。侍女の膝にて、袖を見、背を見、手を見つゝ、わなゝき震ふ。雪の指尖、思はず鬢を取つて衝と立ちつゝ）否、否、否。何處も蛇には成りません。一、一枚も鱗はない。

公子　一枚も鱗はない、無論何處も蛇には成らない。貴女は美しい女です。けれども、人間の眼だ。人の見る目だ。故郷に姿を顯す時、貴女の父、貴女の友、貴女の村、浦、貴女の全國の、貴女を見る目は、誰も殘らず大蛇と見る。ものを云ふ聲はたゞ、炎の舌が閃く。吐く息は煙を渦卷く。悲歎の涙は、硫黄を流して草を爛らす。長い袖は、腥い風を起して樹を枯らす。悶ゆる膚は鱗を鳴してのたうち蜿る。不圖、肉身のものの目に、其の丈より長い黑髮の、三筋、五筋、筋を透して、大蛇の背に黑く引くのを見る、それがなごりと思ふが可い。

美女（髮みだるゝまでかぶりを掉る）嘘です、嘘です。人を呪つて、人を詛つて、貴方こそ、其の毒蛇です。親のために沈んだ身が蛇體に成らう筈がない。遣つて下さい。故郷へ歸して下

さい。親の、人の、友だちの目を借りて、尾のない鱗のない私の身が驗したい。遣つて下さい。故郷へ歸して下さい。

公子　大自在の國だ。勝手に行くが可い、そして試すが可からう。

美女　何處に、故郷の浦は……何處に。

女房　あれ彼處に。（廻廊の燈籠を指す。）

美女　おゝ、（身震す）船の沈んだ浦が見える。（飜然と飛ぶ。……亂るゝ紅、炎の如く、トンと床を下りるや、颯と廻廊を突切る。途端に、五個の燈籠齊しく消ゆ。廻廊暗し。美女、其の暗中に消ゆ。舞臺の上段のみ、やゝ明く殘る。）

公子　おい、其の姿見の蔽を取れ。陸を見よう。

女房　困つた御婦人です。しかしお可哀相なものでございます。（立つ。舞臺暗く成る。——やがて明く成る時、花やかに侍女皆あり。）

公子。椅女に凭る。——其足許に、美女倒れ伏す——疾く既に歸り來れる趣。髮すべて亂れ、袂裂け帶崩る。

公子　（玉盞を含みつゝ悠然として）故郷は何うでした。……何うした、私が云つた通だらう。貴女の父の少い妾は、貴女の其の恐しい蛇の姿を見て氣絶した。貴女の父は、下男とともに、

鐵砲を以つて其の蛇を狙つたではありませんか。渠等は第一、私を見てさへ蛇體だと思ふ。人間の目は然う云ふものだ。そんな處に用はあるまい。泣いて居ては不可ん。

美女悲泣す。

不可ん、おい、泣くのは不可ん。(眉を顰む。)

女房　(背を擦る)若様は、歎悲むのがお嫌です。御性急で在らつしやいますから、御機嫌に障ると惡い。こゝは、樂しむ處、歌ふ處、舞ふ處、喜び、遊ぶ處ですよ。

美女　えゝ、貴女方は樂いでせう、嬉しいでせう、お舞ひなさい、お唄ひなさい、私、私は泣死に死ぬんです。

公子　死ぬまで泣かれて堪るものか。あんな故郷に何の未練がある。さあ、機嫌を直せ。こゝには悲哀のあることを許さんぞ。

美女　お許しなくば、何うなりと。えゝ、故郷の事も、私の身體も、皆、貴方の魔法です。

公子　何處まで疑ふ。(忿怒の形相)お前を蛇體と思ふのは、人間の目だと云ふに。俺の……魔……法。許さんぞ。女、悲しむものは殺す

美女　えゝ、えゝ、お殺しなさいまし。活きられる身體ではないのです。

公子　(憤然として立つ)黒潮等は居らんか。此の女を處置しろ。

言下に、床板を跳ね、其穴より黒潮騎士、大錨をかついで顯る。騎士二三、續いて飛出づ。

美女を引立て、一の騎士が倒に押立てたる錨に縛む。錨の刃越に、黒髪の亂るゝを掻掴んで、押仰向かす。長槍の刃、鋭く其の頤に臨む。

女房　あゝ、若様。

公子　止めるのか。

女房　お床が血に汚れはいたしませんか。

公子　美しい女だ。花を拷るも同じ事よ、花片と蕊と、ばら〳〵に分れるばかりだ。あとは手箱に藏つて置かう。――殺せ。(騎士、槍を取直す。)

美女　貴方、こんな惡魚の牙は可厭です。御卑怯な。見て居ないで、御自分でお殺しなさいまし。

(公子、頷き、無言にてつか〳〵と寄り、猶豫はず劍を拔き、颯と目に翳し、衝と引いて斜に構ふ。面を見合す。)

あゝ、貴方。私を斬る、私を殺す、其の、顏のお綺麗さ、氣高さ、美しさ、目の淸しさ、眉の勇ましさ。はじめて見ました、位の高さ、品の可さ。最う、故郷も何も忘れました。早く殺して。あゝ、嬉しい。(莞爾する。)

公子　解け。

騎士等、美女を助けて、片隅に退く。公子、劍を提げたるまゝ、
此方へおいで。（美女、手を曳かる。ともに床に上る。公子劍を輕く取る。）終生を盟はう。手
を出せ。（手首を取つて刃を腕に引く、一線の紅血、玉盞に滴る。公子返す切尖に自から腕を引
く、紫の血、玉盞に滴る。）飲め、呑まう。
盞をかはして、仰いで飲む。廻廊の燈籠一齊に點り輝く。
あれ見い、血を取かはして飲んだと思ふと、お前の故郷の、浦の磯に、岩に、紫と紅の花が咲
いた。それとも、星か。
一同打見る。
彼は何だ。
美女　見覺えました花ですが、私はもう忘れました。
公子　（書を見つゝ）博士、博士。
博士　（登場）……お召。
公子　（指す）あの花は何ですか。（書を渡さむとす。）
博士　存じて居ります。龍膽と撫子でございます。新夫人の、お心が通ひまして、折からの霜に、
一際色が冴えました。若樣と奥樣の血の俤でございます。

公子　人間に其が分るか。
博士　心ないものには知れますまい。詩人、畫家が、しかし認めますでございませう。
公子　お前、私の惡意ある呪詛でないのが知れたらう。
美女　（うなだる）お見棄なう、幾久しく。
一同　――萬歲を申上げます。――
公子　皆、休息をなさい。（一同退場。）
公子、美女と手を携へて一歩す。美しき花降る。二歩す、フト立停まる。三歩を動かす時、
音樂聞ゆ。
美女　一歩に花が降り、二歩には微妙の薫、いま三あしめに、ひとりでに、樂しい音樂の聞えま
す。此處は極樂でございますか。
公子　はゝゝ、そんな處と一所にされて堪るものか。おい、女の行く極樂に男は居らんぞ。（鎧の
結目を解きかけて、音樂につれて徐ろに、やゝ、なゝめに立ちつゝ、其の龍の爪を美女の背に
かく。雪の振袖、紫の鱗の端に仄に見ゆ）男の行く極樂に女は居ない。

――幕――

戀女房

―吉原火事―

其一　三輪淨閑寺
一　鮒、蜆
二　缺茶碗
三　武藏野
四　柳提灯
五　折檻
六　拍子木
其二　根岸おまじなひ横町
一　娘　分
二　御家風
三　人目の關
四　夜　櫻
五　棒　杭
六　緋無垢
七　紫
八　借半纏
其三　仲の町
一　燒　跡
二　筒井筒
三　緋手毬
四　炎
五　見返柳
其四　再出、おまじなひ横町
一　密　談
二　帳場格子
三　勢揃ひ
四　强請場
其五　隅田川
一　赤い筏

井筒屋お柳。（浦松の戀女房）　浦松重太郎。（根岸の地主）
槇子刀自。（お柳の姑）　樫子。（重太郎の妹）
鷲坂岩造。（會社の社長）　木又氣三郎。（社員）
小森小一。（社員）　千蝶。（藝妓）　雛枝。（お酌）
どつこい屋の治助。（淨閑寺の寺男）　新調。（同寺のお小僧）
籠の源太。（消防頭）　秋刀魚の丈吉。新七。權次。松之助。
金藏。鐵八。（以上、消防夫）
お鶴（浦松の女中）　半次。（職人）
赤魔姥。（妖精）　童男。童女。（魔の眷屬多數）
嘉助。（浦松の番頭）　松野小松。（踊の師匠）

其一　三輪淨閑寺

一　鮒、蜆

治助　もし御覽じまし……旦那方、此に、はい、塔婆が、すく〳〵、墓がばら〳〵、土饅頭まじりに、哀しげに、最惜げに、寂しうござります。此が、はい、どれも遊女方、女郎衆の墓でござります。

岩造　何だ、こりや。……雜司ケ谷の藪だたみ、濕けた處に、ぐしや〳〵と、骨をさらけ出したやうな塔婆、蒼黑い胴中がむくんだと云ふ石碑の立つた……行倒れ、のたれ死、獄門首の罪人どもが、共同墓地と云ふ形だな。

千蝶　まあ、可厭だ、氣味の惡い。

雛枝　汚ならしいわねえ。（唾吐く。）

氣三郎　（岩造に向ひ）殆ど意想外に悲慘なものですな。

小一　（手套を一寸弄る）悲慘と云ふよりも、寧ろ此奴あ醜態ですな。……醜態、醜態、無論、肉を切つて鬻いだ奴等です。……死骸を燒いた粉は黴菌に成つて飛び、土葬の分は、蒼蠅と蛆に成るでせうな。

氣三　そら其の蛆だ。（雛枝の足許を杖の尖にて突く。）

雛枝　きやッ。（墓の間を縫つて退く。）

治助　（老實に）此は、はい、毛蟲のできたてでございます。……蛆ではございませぬ。其に、はい、何も此の衆の、（まじ〳〵卵塔の石碑を眴す）白骨ぢやと申して、蛆が湧くと極つた事はねえでございます。

小一　だからよ、火葬の分は、バチルスに成ると云ふんぢやないか。

治助　何か、蜂の巣とおつしやりますか。

千蝶　蜂の巣だとさ、ほゝほゝ。

岩造　おめでたく出來た爺だ。何て半間な案内者だ。

治助　はい、はい、實に行屆きませぬ儀でございます。けれども、はい、名所古跡でもございませぬ。……墓所と申してこれだけの事、別段に、御案内の方角も存じませぬで。……其のもし、旦那樣の背後に、大く一つ築きましたのが、中でも大勢投込みの無緣塔でございます。

岩造が背後に、石の段々、高き無縁塔あり。塔の前、青き花立の許に、痩せたる山吹あはれに花咲けり。

氣三　（杖にて石塔の面を突いて見つゝ）正銘まがひなし……新吉原の無縁塔だから、新吉原無縁塔――か、淺草だから、淺草で、三輪の淨閑寺だから、淨閑寺、間違ひのない處さね。はゝゝ。

千蝶　まあ、（ヴエールを、ふは〳〵と、嬌態を造つて、其の鬢を掠めながら、墓の上を雛枝の袖に舞移る、蝶を見送る。）雛ちやん、それ、蝶々が、蝶々が。

雛枝　あれ、可愛らしい。（桃色の手巾を振る、花簪と宙に搦む。）

小一　えゝ汚い。お止し、お止し……そんな蝶々。

千蝶　一寸、何故蝶々が汚いのよ？

小一　無縁塔から飛出したんです、此處は女郎の芥溜ですよ。

氣三　娼妓、賣女の總雪隱、肥桶と云ふものさね。

岩造　いや、聞いても堪らん、變に臭いぞ。ヘッ。（と唾をして、のさ〳〵無縁塔の前を離る。）

千蝶　眞個だこと、可厭な臭氣がするわねえ。（被りたるヴエールを煽る。）

氣三　（鼻に手を當つ）此は又佳い句。千蝶さんのヴエールなんざ、風に放すと、其こそ美しい蝶に成ります。やあ、雛ちやん、きみが捉へてる其の黄色い奴は、女郎の褌の切端だぜ。

小一　確説、的論、然も洗濯をした事のない、どろ〳〵どろの幽靈の裾なんだ。

雛枝　まあ、可厭だ。（と拂ふ。蝶、はらりと寺男の足に落つ。）

治助　（掌に撮で載す。）最惜げな、（と熟と視て）えゝ、ひよウろら〳〵、飛ぶ中も、強う弱つとるげに見えました。これ、はい、羽が焦げて居るでございます。

小一　（突立つたなり、金縁の目金で覗く）何、羽が焦げてる？

治助　はい、可哀げに、これ、御覽なさりまし。

氣三　嘘を吐け！（と此も覗く。千蝶、雛枝も、踞める寺男に寄りつゝ視る。岩造は一人離れたるなり、髯を反らして石塔に刻める遊女の法名を嘲り顔に讀む。）

小一　何だ、爺い、……汝そりや蝶の羽の斑點ぢやないか。

氣三　（眉を顰め）芥溜から出たと云ふのに、汚浸は恐れる。……

治助　（眞面目に）否、旦那方、眞個でございます。可恐い事がございます。……此の間の、吉原燒は、あのもし、年代記はじまりまして以來の、えら酷い惡火でございまするに因つて、廓中では、首ッ玉の輪が溶けて、飼猫は鉛の熱湯。臟腑を燒いた野犬は、鐵漿溝で、口中から炎

を吹きます。喞筒の水も赤い雨ぢや。何が、貴方方、戸障子襖はキリ、〳〵と大火の煽に舞上つて、かなりやの籠が火に引からんで飛びましたわ……火の粉の夕立。此の寺などは、ありたけの鼠が出て、本堂を駈廻りますやら、地が蒸溫れたと見えまして、穴を出るには未だ早うございますに、墓所一面、蛇や蜥蜴がのたくりますやら……

千蝶　あら眞個？

治助　眞個にも、何にも、……其の中に、ばら〳〵ばら〳〵、可哀や、種々な蝶々が、羽を焦がして、重つて落ちたでございます。此れなぞは、はい、（と掌を一ッ撓めて視て）火傷しながら、活殘つたでございませう。やれ〳〵、然う云ふうちに動かぬやうに成りました。――もし遊女、お賴申します。（一ッの墓の、傾いたる臺石に撮んで乘せて）南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

氣三　あッあ、いはれを聞けば難有い。

小一　御明あげられませうかね、へゝん。（と笑ふ。）

千蝶　嘘でせう、一寸。

氣三　馬鹿を云ふんでさ。

千蝶　ねえ。

治助　いんね、はい、決して嘘な事はございませぬ。今度の大火事も一旦は先づ、消えましたやうにございますが、むぐらもちの脊筋へも火氣がまはつて、蟲螻の羽が焦げますやうでは、何處の隅の、蜘蛛巣から、又燃上らうも知れませぬ――現に、もし、此の卵塔場に、昨夜、一昨日の夜、續きまして、火柱が立つたでございます。

雛枝　火柱ッて、何よ。

治助　其の、火事の前兆でございます。はい、朧ともつかず、闇ともつかず、空のどす黑い中へ、……やがて、ものの二丈ばかり、鬼が持ちます鐵棒を燒いて眞赤にした、……先づ、虹をづんど切にしたやうな炎の棹が、其の無緣塔よりずつと上へ、ぼつと立つでございます。此は、はい、甲羅へた古鼎が、二百三百、肩から肩へ重つて、一頭づゝ、口に火種を銜へまして、棒立ちに成るげに申します。

黃昏の色、薄く舞臺に掛る。治助は續けて言ふ。

此の二晩は、續けて、此處な卵塔場に立ちましたが、其には限りませぬ。……あの、大火事から以來は、今夜は橋場、翌の晩は三輪ぢやと、紺屋の干場、堂宮の境內、めら〳〵立ちますと申す儀で。界隈一帶、まぶたの休まる夜はございませぬ。唯今にも、赫と山のやうな火を噴出しはせまいかと、早や、此の寺へも、消防手徒が四五人で、用心をしてでございます。

氣三　御苦勞樣だよ。

治助　はい、あの衆も、火事以來、片時と樂はさつしやりませぬ。……御苦勞な事にござります。

はい。

小一　馬鹿、遠方御苦勞、と云ふ御苦勞だよ。聾と談話をするやうだ。何だ、……火ばしらだ。

……火柱なんぞを可恐がるのは、工場の煙突で寂滅する、鮒や蜆のやうな奴等さ。

岩造　（此を聞き）小森、君はうまい事を云ふな、泥鮒や、蜆貝か。わはゝはゝ、俺が工場の居ま

はりにも、煙突の煙に喘ぎ〳〵泡沫を吹く人間の鮒や蜆が、うじや〳〵と居るわ。

氣三　眞個ですな。

治助　何か早や、おつしやる事は一向に分りませぬが、鮒でも蜆でも大事ない、……此のやうに

火が危うござりましては、當分水の中にでも住ひたいものでござりますてや。

此の時、唐突に、

甘い！

と喚く。

雛枝　あれ。

千蝶　まあ、吃驚するわねえ。

墓の背後、雜樹越、藪疊みをほのかに透いて、かついで通る甘酒屋の赤い行燈見ゆ。……甘

い、甘い、甘い屋でございッ――と賣つて通る。

治助　（もつさりと立つ）やれも、赤いものは、行燈を見ても總毛が立ちます。

小一　矢張り火柱に見えるのだらう。

治助　はい、あの行燈を、縱に一百もかさねましたやうなのが、暗夜にめら〳〵と立ちますでの。

千蝶　氣味が惡いのねえ。

氣三　嘘ですよ。――何を言つて居やあがる。

雛枝　でも、蛇が出るッてのは眞個でせう。……

治助　眞個の段か、さて、うじや〳〵居るでの。

雛枝　あら、可厭だ……何うしませう。（立すくみて、カタ〳〵駒下駄の足踏みする。）

治助　やあ、あんたのやうに地面を叩くと、土の中からのたくり出るがい。

雛枝　きやあ、（と小一に縋る。）

小一　爺い、可い加減な事を言へ。

岩造　いや、事實かも分らんな……女郎どもの肥料桶だ。腐つた肉が蛇と同居か。死んでからも

蛇責だ、不便なものだ。

治助　まことに、お氣の毒な人たちでござります。回向をしておあげなさりまし。……

岩造　何が、回向だい。此奴等。（下駄を揚げて、小さき石塔の缺けたる臺石に供へたる湯呑を蹴返す、……此の遊女が生前に、好いた人より贈られたらしく、念の殘つた可哀記念。但し粗末なる瀨戸ものなり。）ヘッ。（唾を吐き）昔、何とか云つたつけ。高尾とか、尻尾とか云ふ、そんな婦でも居る時分なら、端錢をくれて遣つて、小間使がはりに肩をたゝかせうも知れないが、馬の骨や、牛の皮、南瓜、眞桑瓜の食殘しを拜んだ日にや、癩病村の溝溜へ頭を突込むも同じ事だ。俺たちが回向をすると、ひよろ〳〵亡者に罰が當るわ。

治助　無緣墓を拜んで遣らうと、其でお出ではござりませぬのか。はあ、旦那方こそ後生氣はおありなさりませずとも、お前樣方は、（と千蝶と雛枝に言ふ）婦同士ぢや。……回向してお進げなさりまし。澤山違ひませぬ。矢張りの、苦界の衆と見えました。

千蝶　何ですつて？　汚らはしい。

雛枝　まあ、酷い事。

千蝶　失禮ッちやありやしない。

氣三　撲倒されるな、爺い。

小一　新橋赤坂の藝妓を見て、投込みの安女郎と一所にする奴があるものか。

岩造　こら！　爺い、こら！　そんな鮒ぢやから煙突の煙に咽せて斃死るのだ。國家の體面を汚す……暗中の恥を明地へ電燈で曝し居つた、芳原の、あの狀を見い。今も此へ來る前に、自動車を走らかいて見物をして來たが、燒崩れた土藏の壁は、此處の石塔同然、廓中は宛然これ、此の淨閑寺の卵塔場ぢや。……此の卵塔場と云うた處で、やがて又た燒けて野原に成るぢやろ。……其處へ工場が立つ。……卽ち、國家の體面を保つ事が出來る、ト同時にぢや。……鮒や蜆は滅びて了ふわ。はッはッはッ。

氣三　眞個ですな。凡て醜惡汚穢なものは、一炬にして燒いて了ふに限るですな、はあ。……

小一　其の通り、古いものは燒くに限りますよ。其處に新しき生活の花が咲くんだ。

治助　へい、何か存じませぬが、山が燒けましたあとは、蕨、薇が、よう生えますで。別に新しい花は咲かねえでござります。

氣三　此だ、――可厭になつ了ふ。

小一　所謂緣なき衆生でせう。度し難いもんですよ。

岩造　いや、棄たものぢやない。……自動車に乘せて歸つて、俺が家の門構へでも見せたら何うか。……生れつきの盲目が、二十の時かい、突然と目が開いたら、馬を見て吃驚して又た目が潰れた、と云ふ話があるが。然う云ふ體ぢやろ。

氣三　奇拔ですな。處で、新橋赤坂と云ふのを見せたら、直ぐ又た目が開くぢやないですか。

小一　爺い、何うだ。き様いま僕たちが門へ乘着けたのを見て吃驚したらう。あの自動車に乘せて遣らうと仰有るんだが、うむ、何うするな。

治助　はあい。

千蝶　唯々ぢやないわ、一寸……眞個に乘せる氣なんですか。串戲ぢやないことよ。

雛枝　一所に……可厭だわねえ、私たち、ねえ、姉さん。

氣三　其のかはり、菰包みにして、運轉手の足の下へ蹴込んで行くです。人が聞いたら燒跡見物の土産に、妓夫の丸燒如何でごんす、と云ふ洒落は何うです。

小一　當人は天狗に攫はれた、と思ふだらうね。

氣三　おい、眞個に乘らんか、き様。……一生の思出だらうよ。新橋、赤坂を拜ませるぜ。

治助　赤坂は、もし、圓通寺様でござりますか。新橋から參りますなら、品川の千體荒神様でござりませう。あら神様なり、火伏の御願。時節がらと申し、お難有い事でござります。（繰返す）お難有い事でござります。

岩造　默れ。……（目に角立て）其の爺い。吐す事が、凡て眞面目かと思ふと、はぐらかすやうで怪しからん。馬鹿なりに癪に障る。……此方でも、汝、茶にして遣らう。うむ、木又、小森。

小一　は。

氣三　茶にするとおつしやいますと？

岩造　まあ、見て居れ。おい、爺い、爺い。

治助　召されまするか、はアい、はい。

岩造　おい、咽喉が渴いた、爺い、此の人數へ、ずらりと茶を注いで持つて來い。

氣三　（追從らしくハタと手を拍つ）イエス！　茶を持つて來い。

小一　イエス、イエス。茶だ。ろくな茶はあるまいが、……充滿とな。

千蝶　精々抹香臭くないのをね。

氣三　名言ですな。

小一　お早く願ふよ。

雛枝　のろいわねえ、自動車に乘らない人は、此だから話せないのよ。

氣三　名言々々、蛇は寸にして人を呑む。

岩造　うむ、自動車と云へば、門へ横づけにした最う一臺に、何だ——女郎の投込墓は氣味が惡い、汚らはしいと云うて、一所に素見に入らんで、——まだ三四人藝妓ども殘つてをる。其等に云うて、爺い、積込んである麥酒も一所に持ち來てくれい。

小一　やあ、休みながら、連中、一杯洒落れてるかも分りませんな。

氣三　さあ、咽喉がぐび〳〵して來た。……早くしないか、おい、爺い。

治助　正直、旦那方、此で茶をまゐりますか。……爰に何の花が咲いたやら。少と心なうござりませぬか。御堂の方で……あがつては何うでござります。

岩造　本堂は混雜して居る。

治助　火事で立退いた衆でござりますよ。

氣三　燒出されだな。

小一　婦どもがまご〳〵して居たぢやないか。八百屋お七と云ふ面でも見えりや可いに、と思つて覗いたが、年增ばかり。……何だい、彼奴等は。

治助　はい、仲之町の藝者衆が二組見えてでござります。

氣三　道理で燒出されの癖に、生意氣に髮なんぞ結はして居たつけ。

雛枝　髮結さんは綺麗な人だつたわねえ。

千蝶　でも、何だか。（と鼻で笑ふ。）

治助　いんえ、髮結ではねえでござります。あの方は、仲之町で、はい、昔から一枚看板の、井筒屋と申す引手茶屋、矢張り今度の火事で燒けました。――其の騷ぎで、豫て病氣で在さつしつた、おかみさんが、お氣の毒な、亡くなりました。――が、其の妹御で、お柳さんといふ、

評判な、美しいのでござります。……尤も唯今では、中根岸へ緣着かつしやつて、大家の御新造でおいでなさりますが、姉樣の其の初七日の、今日は逮夜で。……今戸の寺へ參詣をなさりました、歸りがけ、爰計に立退いてでござります、朋輩の藝妓衆を見舞にござつて、今しがた其の藝妓衆の髮を結うてでござりました。はい、藝妓衆も、其で漸と姉さんかぶりの手拭をとつたくらるでござりますよ。……火事から此方、夜も碌々、寢る間とてもござりませぬ。

岩造　煩い！　朱引外の藝妓なぞが、寢ようと轉ばうと汝等が勝手だ。よく、つべこべと饒舌る爺だ。茶を疾く……持ち來んか。引手茶屋の何とか云つたな、其奴、澁茶の給仕ぐらゐ出來るぢやらう。踏める面なら、其の年增に、此へ手傳ひに出ろと云へ。……五圓紙幣ぐらゐ鼻をかんで拾はせてくれて遣る。あゝ、立草臥れた。（あはれ、春も霜げたる石碑をドと倒し、どしりと其の上に腰を掛く。氣三郎、急ぎ手巾を出して其尻へ敷かす。）

治助　（手を擧げ、又腰）やゝ、滅相な事をなさりますな。

岩造　地獄の沙汰も金子ぢやと云ふが、汝にも分るぢやらう。石塔は倒れても、俺の尻が乘つたお庇に、此奴等は浮ぶんだ。言句があるなら住職に來て吐かせ、と言へ。一問答して、ぎやふんとさせるぞ。はゝはゝ。

小一　豫て御修行の禪機を以て、一喝くらはす處ですな。地獄の沙汰も金次第、こりや、俗耳に

も入易い。爺め一言もないと見えて、亡者のやうに引込んだです。

治助、此の間に見返り〳〵、とぼ〳〵入る。

氣三　何うだい、小森君、我々も一つ浮ばせて遣らうぢやないか。

小一　可からう。

二人、一ツづゝ墓石を引覆す。

千蝶　およしなさいよ、一寸、罪だわよ。

小一　さすが、婦同士、同情をなさいますかね。

千蝶　止して頂戴、汚らはしい、女郎に同情するなんて！

氣三　イエス！　動物虐待が悪いと云つて、蠅を殺さずには居られんです。投込みの女郎が可哀だと云つて、苟も大都の中に、こんな墓原を保存するのは、倶に天を戴くものの恥辱です。……所謂其の、古き醜きものを破壊して、新しき世界を建設するのは我々の任務ですからな。天、既に吉原を燒亡し畢ぬ。況や腐れたる肉と朽ちたる骨との、此の芥溜に於てをや。（はずみにかかりながら、石碑をぐる〳〵と廻り、腰を掛けむとして、洋服の臀を氣にして、中腰に密と遣り、いぢかり股から墓銘を覗く。）細眉香脣信女。

千蝶　何？　一寸。

氣三　細眉にして、而して香き脣、と云ふ法名ですな。

雛枝　隨分だわねえ。

岩造　此奴は何うだ、（其の腰に敷けるを視む）白面弱腰信女。……おい、分るまい。（と千蝶に）白い面で、弱腰と云ふ奴ぢや。

千蝶　柳の下へ出るんでせう。

小一　名言々々。

千蝶　小森さん、お合方は？

小一　お合方は恐縮しますね。多分、釋金毛九尾でせうよ。（俯向に差覗いて）はゝあ、當らずと雖も遠からず……雲鬢玉容信女で居やあがる。

雛枝　どんな事よ？

小一　雲なす鬢の黑髮で、玉のやうな顏だとさ。

雛枝　呆れるわ。

千蝶　新聞に出る土左衞門ね、皆な美人だこと。

小一　名言々々。尤も土左衞門と言はれるのさへ、火に怯えた場末の奴等は、此の際賴しく思ふでせうよ。

氣三　何にしろ、投込と云ふだけあつて、坊主もお布施の所爲でせうな、何の法名も茶なものです。

二　缺茶碗

岩造　茶と云へば何うしをつた。小森、おい、見て來んか。

小一　は、可うございます。

——行く。出合がしらに、おさきばしりの若いもの、秋刀魚の丈吉、わざとばッたり突當つて。——

丈吉　催促かね。（といきなり云ふ。）

小一　え。

丈吉　茶の催促かと言ふんだよ。

小一　（變な顏して）然うさ。

丈吉　手をお鳴らしなすつて下せえましな。

新七　（續いて出で）殿樣へ、貴下方と云ふものは、座敷にちやんとして居なさるもんだ。

權次　廊下鳶ア見つともねえ。止すが可いや。

簸の源太　（四人目にすッと出で）恁う、殿樣がお急ぎだとよ。茶坊主ども急ぎねえ。（とうしろを呼ぶ。……松之助、金藏、鐵八、ばら〳〵と續く。以上七人。いづれも、鳶口手鍵を携ふ、揃つた氣競の火事裝束。）

源太　さあ、おい、急いでお出花を差上げねえのか。

一同　おい、（と口々に應ずるや、手に手に持ちたる棧俵法師を茶盆に構へ、並べる墓の、缺け茶碗、青竹なんど拾つて乘せ、手向けの水、雨水を、五人分しやくつて汲む。）

岩造　をはじめ、氣三郎、小一これを見つゝ、肩肘を張つて擬勢を示しながら、きよと〳〵する。千蝶、雛枝は原よりおど〳〵と打震ふ。

源太　おい〳〵、茶碗や、竹筒の一杯に足りねえ分は、墓石に雨水なんぞ溜つた處を汲出しねえ。苔の眞蒼な玉露でねえと、旦那方の口には合ふめえ。氣を付けねえ。

丈吉　おつと承知だ。

源太　蛞蝓を沈澱まして、棒振蟲を浮かせるんだ。

新七　可うがす。

權次　合點だよ。

源太　此奴ア藪の裏、芥溜流の投込と云ふお手前だ。洒落たもんだぜ。恁う、成りたけ充分と注

ぎ込みねえよ。……時節柄だ、火事の消えるぐれえざぶりが可いぜ。

松之助　抜るもんか。

鐵八　心得てら。

治助　（後おさへに、片隅に鯱子張つて、齒の抜けた高笑ひ）は、は、は、此奴は可いわい。

金藏　さあ、呑め。

權次　召しまし。

新七　おう、旦那。

鐵八　恁う姉え。

松之助　呑みねえよ。

丈吉　殿樣、お茶アあがれ。

手に手に、ぷッきら棒に乘せ、突着ける。

岩造　無禮ものめ、（大喝して）汝等は何だ。

源太　鮒だよ。

岩造　うゝむ！

源太　蜆貝さ。（と云ひながら、つか〳〵と寄つて、岩造の腕を無手と取る）手前たちに蹴飛ばさ

れた、此の石塔の、此方等ア皆情人だ。半分づゝ飲合つた茶碗酒の香がするぜ。（こゝに突きつけ居る丈吉の棧俵法師から、湯呑を取つて、持直す）駄煙突の煙のやうな、もぢや〳〵髯へ注込んで、逆上を引下げて遣るから然う思へ。

岩造　俺を知らんか、俺を知らんか。

源太　べらぼうめ、木賃で宿帳を認けたら知らず、江戸むきへ來やがつて、迷子札も出さねえで、俺を知らんか。笑かしやあがら！　恁う、皆、其奴等にもさつさと飲ませろ。愚圖々々云つたら腦天をお見舞ひ申して、鳶口の穴へ流込んで、生捕りました、河童にして遣れ。

新七　心得てらあね、さあ啖へ。（と片手に鳶口。）

氣三　やあ、無法だ。

小一　（震へながら、怨めしさうに）えゝ、爺、此の連中にいつつけたな。……田舍者だと思つたら、き樣は何だい。

治助　（片肌脫ぎで、顱卷を扱きながら）淺草名物、飛んだり、跳ねたり、替つたりの化けたのさね。……お前はん許の門番や、學校の小使とは些と毛色が違ひますよ。無緣寺の寺男は、人間の數には入らないがね、時々狸に化けるてな。もゝんがあ。（ひよいと跳ねて、變な手つきで躍り踊り）や、お前は何をする。（と鐵八を見る。）

鐵八　（此の時、雛枝の口へ、樒の實を取りて、捻込まんとする處）私ア廻合せで、お前、こんなお前、石鹸球見たやうなものを承つて、張合がねえ。小兒だね。茶を呑ませるのも可哀相だから、鬼灯なみに、樒の實を頰張らせようと思ふんだ。

治助　や、そりや惡い。樒の實の腐つた奴は大毒よ。呑込ましたら生命とり……殺すほどの事はない、止さつせえ、止さつせえ。

鐵八　おつと、其奴ア危かつたな、矢張り甘茶を嘗めさせろ。――それ、啖へ。

雛枝　あゝ！　御免なさいまし……

千蝶　あれえ、（遁げむとするを、丈吉、鷲摑みに引捕ふ。）

岩造　（堪りかね）無禮をすると、許さんぞ！

と身悶えして、ぬつと立つ。

三　武藏野

無緣塔の前後左右、石碑の間を景色に、千蝶、雛枝を色どりにて、一同立廻る。……一人が、さし上ぐる石碑を見て、氣三郎尻餅を搗く趣あり。やがて、岩造は源太に、氣三に二人、小一に二人、千蝶、雛枝を一人づゝにて取つて占め、手ン手に、茶碗、湯呑などを更めて突着

くる。……此より前、自動車に居たりと云ふ、藝妓二人、舞臺片隅に出で、此の樣子を見て、慌て驚きて、うろ〳〵す。其の中をつゝと分けて――井筒屋のお柳、意氣な花月卷、えりつきのお召、淺葱縮緬の片襷を掛けたるまゝ、手にせる梳櫛を帶の間へぐい、と突込みつゝ出づ。

お柳　あれ、お前さん。（取着きに、雛枝に掛れる鐵八を先づ引分く）一寸、皆、何をするんだね、亂暴な……あれさ、お止しと云ふのに、ねえ、かしら。

源太を支ふ。それまでに、一人々々を手早く引分く。

源太　やあ、燕か。

一同　井筒屋の――姐はん。――お柳ちやん。（と口々に云ふ。）

源太　打棄つて置いてくんねえ。（お柳にきつぱり立對ふ。消防夫一同、源太のうしろ。岩造等は一同、お柳の背。）

お柳　亂暴をしちや不可いよ。

源太　亂暴なのは、其の芋掘どもだあね、お前。藝妓なんか連やがつて、自動車で燒跡の見物をしやがつたんだ。

丈吉　日本提へ、ぶう〳〵よ、變な臭氣を吐掛けやがつて、此處へ自動車で廻つたんだぜ。

松之助　あんな臭氣を嗅がされちや、第一何だ、日本提の名に濟まなからう。

金藏　合點成るめえぢやねえか。

鐵八　堪えられねえや。

源太　お剩に何だぜ……可哀相に、投込みの遊女衆をつかめえてな、蛆だわ、蠅だわ、人間の芥溜だと然う云つてよな、お柳ちやん、聞きねえ。此だ、（手にしたる湯呑を見す）泣かせるぜ。……はかねえ苦界の意氣事だ。水を入れて手向けてあつた、此を何うだ。土足に掛けて蹈むばかりか、電車でも荷に成らあ、丸太棒の臺尻を、やせた石碑に打据ゑやあがる。……面を見ねえ。牝犬の臭を嗅ぎたさうに、ひこつかした、あの、鼻を見ねえ、目尻を見ねえ、顋を見ねえ、髯を見ねえ、いきなり膏ぎつた這額へ鳶口を打込まねえのは、何うだい、此方人等も、分別のついたもんぢやねえか。

　　夥間を見廻す。

丈吉　違えねえ。此だけ分別が着いた癖に、何んだつて、天麩羅を食ふ小遣もまゝに成らねえんだらう、とね、實は不思議に思つとりまあす。

金藏　（横合から袖を引いて）あれ、よしなよ、見つともねえ。

丈吉　（目を白黑）うゝ、だからよ……だから、其の天麩羅野郎、たゞは置かねえ。

源太　默つて居ねえ。それだもの、お前、（お柳に）殺すんぢやねえ、活かして遣るんだ。氣つけの茶だぜ。……亂暴だなんて止るのは、お前、何にも知らねえからよ。さあ、退いたり。

お柳　お待ちよ……いゝえ知つてるよ。……知つてるから止めるんだよ。廓の燒あとを、遊山氣取りで、見物されたが口惜いかい、人は落目が大切だわね。時節と場合ぢや仕方がない、たとひ自分の仇敵にだつて、潔よく兜首も切られるぢやありませんか。あきらめが惡くつて往生際にじたばたするのは、三下奴の料簡だし、惡口ついたり、八つあたりは、負腹立つ、と云ふもんだわ。吉原中が灰に成つたを喜ぶ人があるのなら、其の人の御勝手さ。一方に泣くものがあれば、其を手柄に、三百石、御加增と云つた例もある……世の中は然うしたものだよ。たとへるんぢやないけれど、鈴ケ森のお仕置で、火あぶりに成つた時、あの、お七が、見物の田舍者を怨んだらうか。何の未練な、怨むものかね。廓の意氣張、色戀は、三階二階のありなしで、汐のさし引はありやしないよ。野原に成つても可いではないか、隅田のほとりに住居してさ、武藏野とか云ふ杯で、露をのんで、お月樣の情女に成つて暮さうわね。ねえ、頭。好いた同士が相合傘で、はだしで袖の濡れる時、自動車が羨しいかい。……投込み墓の遊女衆を邪險にしたのが癪だと言つては、名所で心中する時に、水晶の數珠を繰りながら、一ッ蓮の世帶の事は思はないで、金持の別莊を口惜しがつたり、羨んだりするも同じ事。……何の！……初手から

野の末、山の奥、……棄札までの望もない、情づく、義理づくなら、投げに出す身體だもの。
……錢を目當の旅人が金の土足で蹈んだつて、蹴たつて、お構ひはありやしない。頭、野晒の死骸にや、犬と烏はつきものだよ。……突つくわ、嗅ぐわといつて、其を氣にして追居た日には、此方が案山子に成るぢやないか。尤もね、私なんぞに男の心は分らない。お前さん方、皆の顔に、泥でも塗つたと云ふ事なら、差出て止めはしないけれど、女同士さ、然もねえ、町方の事は知らず、同じ廓の人だから、心持は分つて居る。——まあ此の墓所の佛たちは、大して氣にもしまいから打棄つてお置きなね。——其のかはり、此の人たちが倒した墓なら、あとで私たちが起さうし、手向けの花を拐つたら、又供へれば可いぢやないか。(徐に襷をわがね、袂に入る。)

源太　分つた、(清く頷く)實は此の中、氣が立つてる處だし、無體、癪に障つたから、其の丸太棒、一本も殘さねえで頭から塔婆ならべに、鳶口で打込んで、河豚に醉つた禁厭にして遣らうと思つたがね、成程、負腹と言はれりや、些と其處もあら。をかしくねえ。お柳ちやんの扱だ。……綺麗に手を拍つ……と云つた處で、丼小鉢と店すがゞき、間も調子も合ふめえから、おさらばと爲つ了え！……おう、お前はん方、但し此方人等の繩張内だ。火がかりぢやねえけれども、消えてなくなるのを見ねえ中あ、一足も退かねえからな。あゝ、薄暗かア成つて來る……

足許の明るいうちに……それ、蛙が鳴くぜ、歸んねえ。足行は巧者だ、轉びなさんなよ。

岩造　可！　其いぢや、汝等、言分はないのだな。

鐵八　何だ、言分がねえ？

源太　鐵やい、止せやい……おう、心配しねえで早々と歸れ。

岩造　其方には無いぢやらう、が、言分は此方にあるが。

新七　言分があるんだえ？　や、嬉い事を云やあがる。(と取つてかゝる。)

岩造　然しながら、時間がないで。

氣三　まあ、社長まあ、魚服、魚服、ね、魚服と云ふたとへがあります。……ね、天上するやうな蟒蛇でも、ね、梅干に化ければ、一口に舐められます。場所が惡いです。

小一　イエス！　千均の弩は鼠のために發せずですな。……(岩造を押遣り押遣り、己も退く。)

千蝶　(ふるへの止まぬ雛枝の手を曳き、悄々として、お柳の前に頭を下ぐ)申譯がありません。お庇樣で、(としみ〴〵云ふ。)

雛枝、同じく會釋をする。

お柳　まあ、お前さん、更まつて、それぢや私、極が惡い。……ですがね、女同士、お前さんも、察して遣つて下さいまし。……同じ遊女衆の中だつて、此處に恁うして、投込みの可哀な姿に

成つてるのは、一寸見には、何うした因果か、どんな罪の報ででもあるやうに、誰が見ても想はれませうが、慾得に意地を忘れ、算盤づくに張を棄てて、年明の始末ばかり心掛けた利口なのは一人も居りません。……戀と情に、身體も生命も、遺放しの馬鹿ばかり、馬鹿だが嬉しい人ばかり、私たちには嬉しいけれど、世間の目には馬鹿ばかり。蛆だ蠅だと言はれます。切めてお前さん方苦勞人でも、あゝ、氣の毒だ、可哀相だ、と思つてお上げなさいなね。

千蝶（聞くうちに、ほろりとなつて）おかみさん、身に染みて、悚然とするほど濟みません。……あの、（一寸あらたまる）其につきまして、少し、あの、貴女にお話が……（と云ひかくる。）

小一（小戻して、きよと〳〵しながら）おい、早くとさ、おい、きみ、おい、姐さん、（促し立つ。）

千蝶　はい、唯今。

お柳　あゝ、一寸、姐さん、大層お髮が亂れました。（千蝶のおくれ毛を撫でつけて、自分の鬢へ白い手で、横櫛にぐいと插す。）

千蝶（再び、涙ぐむ。）

お柳（又、落散つたる、花簪を見つけて拾ひ、フツと塵を吹いて、雛枝の髷にさして遣り）堪忍なさいよ。

雛枝　いゝえ。（と俯向く。）

小一　おい、大將が急ぎだつさ。

千蝶　いづれ。おかみさん。——頭、皆さん、何うも。

源太（先刻から無言にて、一同とともに、お柳の處置ぶりを眺めて、つく〴〵嬉しさうな顏色なり。此時聲を掛けられて）やあ、驚いたかい、蟲が起りやしなかつたか、氣の毒だつけな。

小一（焦つたさうに、手を擧げて）遲いね、おい、大將御機嫌、頗る斜めな處ぢやないか。

金藏（つか〳〵と小一に寄る。とぎよつとした體にて遁込む。其腕をぐい、と取る。）

小一　あゝ、……僕ぢやない。

金藏　怯えなさんな、だまし打なんて卑怯な、唐突に殺しやしねえ。……が、えゝ、恁う、後生だ。此方でお願えだから、此から其處の門を自動車で遁出す時に、あの、駝鳥が縊殺されるやうな、ピープ〳〵、變な聲を出すのだけは止してくんねえ。

鐵八　然うだ。姉はんは、……情婦と相合傘ツて時、自動車が羨しいかツて言ひなさるがね。恁う、此の面だけに、私ア情婦がねえと思ひねえ。處で、唯駈けるのはまだしもだが、音を立てられると、漸つと恁う、壓えつけた蟲が、むら〳〵と込上げるとね、おい。

新七　場合が場合だ、ポーン。（と嵩口を一つ素振つて言ふ。）

小一　わッ！（と怯える。）
新七　それ、一見舞申さずにや濟まねえからね、姉はんと約束した内濟喧嘩だ、ぶりかへしちや男が立たねえ。
丈吉　其の通り。其の通り。此方人等の男を立てて、お前たちを撲らせねえやうに、お願えだ、此だ。手を合せる。
鐵八　秋刀魚やい、何も拜まなくつても可いぢやねえか。
丈吉　何ね、一寸かさに懸つた發奮だよ。恁う、賴むから、ピーを遣らねえで駈出してくんねえよ。
小一　城下の盟です、全權委員、委細心得まして、決して、警笛は鳴らしません。……さあ。（と千蝶、雛枝をともなひ入る。）
金藏　一番、約束を見屆けようぜ。
丈吉　合點だ。いや、眼張れ、眼張れ。（と古風な假色。）
金藏　馬鹿、何うしても辻堂の焚火に當つてて、一はな懸けに武者修行に一刀斬られようと云ふ御仁體だ。
丈吉　刀でも構はねえ、金が身體へ入りや可い。

新七　あれだ、……買喰がしてんだらう。
丈吉　奴も然やうに申しましたよ。あ、テンプラクヒタイ、テンプラクヒタイ。
　四人揃つて、口三味線にて入る。
治助　（のつそりと進み、にた〳〵と笑ひ傾く）姉はん、うめえ事を言つたね。へゝゝ、ト墓原へ立つて艶麗に亡者どもを助けた處は、婀娜な觀音樣と云ふもんだ。……廓で己が當ものの「どツこい屋」を遣た時分にや、いけずッたらなかつたてな、ぷッと、頰邊を膨らましちや、初中來て、吹矢を吹いたが、いや、雨が降つても傘もさゝずに、袂を被つて暴れたもんだて。……さて、又當てるわ、一錢が五本で一本も空矢なし。中で三本くらゐ一等の星を貫いて、看板の福助と、大鯛の金花糖を、ちよろりと攫ひの、べッかッ、からころ、木履で、頤を出してあばよでえす。……此方あ資本を摺るからね。……井筒屋の小姉が、眉毛を恁う上へあげて、くるりッとした目を据ゑて、うけ口で矢筒を撓める、と俺あ其の毎度に、ぎよッとして、少え時、いかさま賽で、いけえ事人を傷めた、其の應報だと思つたてね。其がために發心して、寺男に成つたと云ふわけでもないが、ありやうは此の人ばかりは、から〳〵どつこいを斷つて、飴一本づゝ無價で進上。かすりを取られたものだつけ。……つい、此の頃と思ふがね、は、……いかさまな、おたばこ盆が圓髷に成つた、雁首も鍍金が兀げて、地金の素銅が出るわけだ。（と

兀頭をつるりと撫でる。）

お柳　可懷しいわねえ、小父さん。――あゝ、あの、時分はのんきだつた。……姉さんが居たれば こそよ、其の姉さんは……今度の火事で、（言、濕ず。）

源太　廓も野原に成つて了ツた。（と横を向く。）

治助　何にも言ふめえ、向う顫卷ぢや泣かれねえて、（と鼻をこすつて此の勢で）さあ〳〵兄哥。

お柳　頭、皆、手を貸した。……（消防夫とともに、花筒を立て、倒れたる石塔を据直す。）

源太　又、竹馬の無心ぢやねえか。爺さん。（と治助に向ひ）私が拵えて遣つたもんだ。吹矢ぐれえ何でもねえ、……田町の上總屋へ使ひに行ぐッて、お前、竹馬で跳橋だ。

お柳　今でも乘る事よ。

源太　（笑つて）親指の前で乘れますかい。

お柳　堪忍して頂戴、小兒だとさ。

源太　小兒にしちや、些と說法が出來過ぎたつけ。矢張り例の御仕込みかね。

お柳　いろはにほへとちりぬるをわか、未だ、ほんの一年生。

源太　戀の手習、つい見習ひてか、へッ、遣つてやがら、燕め。（と出て行きさうにする。）

お柳　一寸……

源太　奥さん、……私に用かい。（と振返る。）

お柳　酷いよ！　頭……其の奥さんも氣に成るがね、お前さん、先刻も私の顏を見ると、いきなり燕だッて、又いまも然うお言ひだね。……亡なつた姉さんなり、交情のいゝ人たちにも、薄薄聞いて知つてるぢやないか。お姑が嚴しくッて、めッたに外へも出られないもの。……不實な不沙汰ぢやないんだのに、人の事を燕だなんのッて、廓の古巢の故里へ、年に一度そこいらしか姿を見せない……あてツこすりの渾名ぢやないかい。私……情ないねえ、頭、餘りだわ。

源太　（やつきとして）馬鹿な、馬鹿な事を言つちや不可え。よくせきお前さんが不人情だと思つたら、恁う、同じ廓で生れたよしみだ。人に蔭口をきかしたくねえから、此奴義理知らず、と千代紙の札を立てて、竹馬にのせて引張つて連れて來るんだ。死んだ、井筒屋の姉さんはじめ、又、其處にや、義理も、樣子もある事は承知だものな。十年、お柳ちやんが影覗きもしねえで居て、うつかり出合つた大門が、地獄の仲町の入口だつて、當ツこすりなんか云ふもんかな。

お柳　忘れないでおくれ、まあ！　嬉しいわ。ぢや、燕ッてお言ひのは？

源太　むゝ、其だがね。

お柳　それ、御覽……

源太　氣にしなさんな、何も仔細のねえこッたな。

お柳　言はれないんだよ、矢張り。當ッこすりに違ひない。

源太　困るな、何うも。

お柳　御勝手になさいまし。（とツンとする。）

源太　見や、この、通り駄々兒だ。ぢや、言はあな。……恁う、皆も聞きねえ。此の姉さんがな、然うよ……十四五だつけか……竹馬が羽子板に成つた時分よ。京町の下駄屋の店で……緋の天鵞絨の緒の立つた、裏金のついた雪駄を、ひけらかしたと思ひねえ。さあ、欲くつて堪らねえッさ。やたらと姉さんを強請るんだが、生意氣お言ひでないか何かで、頭からお取上げ更になし……雪駄が穿けなけりや死ぬわで以て、田圃のお前、蓮池へ身を投げたんだぜ。

お柳　ふゝゝ、（と横を向いて忍び笑す。）

一同笑ふ。

源太　否、串戲ぢやねえ。眞劍だと思ひねえ。——雪駄を買つてくれないから死んでばけて出る事よ、かしく——さな、お前、遺書をちやんと書いて、何う言ふもんだ、……其奴を折鶴に折つて、猫板の上に置いて駈出したんだ。蓮池ぢや、お前、慈姑を掘つてる爺さんが、びしよぬれな桃割を抱いて歸ると、や、驚いたわ、内中押取卷いて、樣子を聞くと、遺書を見て頂戴が、

其の折鶴。

お柳　あれ、もう澤山。

治助　頭、其の折鶴が。何故其が燕だの。

源太　まあ、聞きねえ。居合せた客人が、をかしいんだか、可哀さうなんだか、嬉しいんだか譯の分らねえ涙を出してな、雪駄は私が引受けた、とそれ、人殺しの罪を身代にかぶるやうな言種よ。身を投げるくらゐな品物だ。仙臺樣の穿きものほどもあるめえが、安くはない、と呑込んで、其の時分、五圓と出した。其の金子で、何うだ、右の雪駄を五足と買つたぜ。……遊びなかまの、娘連へ、皆なお穿きよ、で、ずらりと並べた。——死ぬほど自分が欲いんだ。誰も嘸かしと思つたまでは、お姫樣喝采だが、さあ、嬉しくつて堪るめえ。仲の町から、角町、京町、一軒々々、軒下から店へかゝつて、妓夫臺を斜ッかけに、式臺まで、ツイと入つて、スッと出て行く。……雪駄の音がね、五人揃つてチヤラ〳〵チヤラ〳〵、軒づたひに、飜然ひらり と出入る樣子が、暖簾の柳に燕さね。……緣起はあらまし恁の通りさ。——東西々々、一寸、仕方をお目に掛けよう。何もつき合だ。續いて、遣んねえ。……それ、チヤラ〳〵、チヤラチヤラ、（と着いて離れて、離れて着いて、墓石を縫つて行く。とチヤラ〳〵チヤラ〳〵と聲を揃へて、少いもの二人あとに續く。）

源太　（舞臺を入りかけて、ふと留つて、お柳と顔を見合せる。）
お柳　（莞爾して、さしうつむく。）
源太　は、、は、。
松之助　（其の源太の背中へトンと當つて）頭。
源太　え。
松之助　惚れてるね。
源太　馬鹿を云ふねえ、洒落本ぢやあるめえし。（と手鉤をしやんと――退場。）
治助　頭、おい、（と呼懸けて）御多分にや漏れねえぜ。いや、チヤラ〳〵チヤラ〳〵、（とよた
　よた眞似る。）
お柳　小父さん、矢張り燕かい。
治助　おつと、どツこい屋。吹矢に當つた蝙蝠さね。（藪に潛る。）

四　柳提灯

暮色更に迫る。藪疊を隔てて場末の町の灯見ゆ。本堂の方、鉦の聲あり。
お柳　（靜に一人イみ、襦袢の袖の端を嚙んで、差俯向き居る。フト顔を上げて、高く無緣塔を

仰ぎながら、袖口を兩方合す）あゝ、皆さん、廓は野原に成りました。……悲しいわねえ。……いゝや、其とも、嬉しくツておいでか知ら。……まあ、ねえ、墓ぢや何にも言ひなさらない。……何うせ、私なんかも、末は無緣の投込みに成る身體。其の時は、おいらんたち、皆さんの心が分るわね。（しめやかに云ふ、寂しい姿。）
千蝶　（內端に引返し、立出づる）あなた、お拜みでございますか、お拜みでございますか。
お柳　（此にて振返る）おや、先刻の。
千蝶　はい。あの……おわびやら、お禮やら、更めて、お目に掛りたくツて參りました。先刻は何も彼も、實に申譯がありません、何うぞ御免なすつて下さいまし。私は、あの、千と言ひますものですが……
お柳　何の、まあ、言譯をなさる事がありますかツて。……お禮も何もありはしません。皆ね、大火事から以來、頭であひが、赫として、氣が立つて居るもんだから、あんな亂暴な事をして、却つて、私どもこそ極りが惡い。そして、まあ、お連は何うなさいました。お前さんお歸りでは、なかつたんですか。
千蝶　えゝ、私、先刻、貴女のお話を伺ひましてから、あの方たちと可い氣になつて、此の御近所を、見物の自動車なんか、乘つて歸るのが恥かしく成りました。……お客は大變怒りました。

決して以來、世話をしないとまで言ひましたけれども、構はないと然う云つて、私は後に殘つたんです。……もう、私、そればッかりぢやありません。あゝ云ふ方たちに呼ばれなくッては、稼業の出來ない土地に居るのも、可厭なやうな氣がします……失禮ですが、あなた、お見掛け申した御樣子では、引手茶屋の、おかみさん……で在らつしやいませうねえ。

お柳　はあ、否、まあ、ねえ……

千蝶　推着けがましうございますけれど、此がお目見得とお思ひなすつて下さいまし。……曲りなりにも踊ります、絲道だけは、口もとですが、とぼ〳〵歩行きはしますから、後生ですわ。お世話なすつて下さいましな。

お柳　抱妓さんでおあんなさるかい。

千蝶　いゝえ。

お柳　失禮を。看板ぬしでおいでだね。

千蝶　極りが惡うございますわ。……こんな風で自前ですから、あんな旦那を持たなくつては成りません。其のかはり、欲しいものは右から左、着たいものは裁おろし……乘りたいものは飛行機でも、行きたい處は京、大阪……それが可い事はでな事、勝手な事と思つて居ました。おかみさん、貴女のお話を聞いてから、悚然するほど、可厭になつて、……隅田の岸に青天井で、

武藏野とか云ふ杯で、色ある露がのみたうございます。……死んだ死骸は野晒でも、此の、（と四邊を熟と視めて）投込みにでも成るなら成れ……あんな、旦那に、唾を吐かれて、足蹴にされても構ひません。あなたの口から唯だ一言、譽められたい。お金子も何にも入らないんです。格子を拭いて働きますから、仕込みをおいたとお思ひなすつて、お傍に居さして、其の御氣象にあやからして下さいまし、……眞劍ですわ、おかみさん。

お柳　（聞くうちに、顏にひたと其の袖を當てつゝ、力なささうに無緣塔の石段に凭り掛る）嬉しい事を聞くわねえ。悲しい事を聞かせるわね。仲之町の家ッたら灰に成つたぢやありませんか。

千蝶　ですが、あなた、直にお建てなさいませう。

お柳　いゝえ、火事と一所に姉が死んで、井筒屋の跡は絕えました。……私は、堅氣へ緣着いて居りますもの。

千蝶　では、あなたは堅氣の奧樣。

お柳　えゝ、飛だ不料簡。……私もね、青天井で露を呑むつもりだつたのだが、蹈迷つたかして、路が違つて、奧さんとか御新造とかいふ、厄介な、出來損ひに成つたぢやありませんか。實家方では、まだ養子とも、養女とも言はないうちに、今度の騷ぎで、姉が亡くなりましたからね、

有る借金が、なかつた處で、もう家は建ちません。

千蝶　まあ、火事の騒ぎに、お姉さんが……お怪我でもなさいまして？

お柳　病氣です……其の病氣ですがね。……矢張り此の間の火事の所爲に思はれますよ。焼けた日の三日前、まだ夜中だつたと云ふ事です。姉が、はゞかりへ參りました。……仲之町へは、櫻が植揃つたばかりの處、陽氣も例年より寒いのに、眞夏のやうにじり〳〵ほてつて、壁へ手を觸ると熱いんですつて。……不思議に思つて、窓から何心なしに外を見ると、其處が、先刻此處へ來ました、源太さんと云ふ頭の家との廂合です。其の廂合の處を、覗くと、覗かれて、ふら〳〵と出て行く、眞赤なお前さん、何うでせう……頭巾を被つたか、頭まで眞赤な、緋色の被布を着た婆々で、七十餘りと見えるのがね、赤い杖を突張つて、片手の掌へ火を乘せて、ふう〳〵吹きながら出て行き狀に、振返つて姉の顏を見ましたとさ。

千蝶　（悚然した狀に、四邊を眴す。）

お柳　それから、どッと煩つて、譫言のやうに、火事がある、廓が焼ける、氣をつけて、と言ひ續けだつたと言ふんです。大焼の日は、看護婦が附いて、裏門の柵を越えて、煙の中を戸板に乘せて連出しましたが、吉野町の寮へ寢かした時、早や片息。すぐに其處も焼けたから、二度目の立退きをしましたつけ。途中で息を引取りました。（としめやかに云ふ。）

千蝶　（わな〳〵と）あれ、其の方は、緋色の被布を着た年寄を御覽なすつたとおつしやいますわね。

お柳　現に。……廓は夜が晝ですけれど、其でも廂合は暗いのに、眞赤な被布がめら〳〵と。……そして、白粉でもつけたやうに、顏が仇白かつたとまで、譫言に言ひましたとさ。

千蝶　いやアな、（と聲も陰々として）私も今しがた……

お柳　えゝ。

千蝶　おかみさん、（とはつと抱着く。）

お柳　あれ、吃驚するわね、何うしたの？

千蝶　何うしませう……先刻……先刻、廓から廻つて、日本堤を來ます時、途中、あの路傍に橋が架つて、其の袂に、榎が一本ありませう。

お柳　吉田橋の處だわねえ。

千蝶　其の、あの、樹の下の蔭でしたよ。眞赤なものが、蹞んで居て、私たちの自動車が駈拔けようとする前へ、ちよろ〳〵と出たと思ふと、あつと云ふ間に、車輪にかゝつて廻りました。……轢殺した、あれと云ふ間に、影もなしに消えたんです。……火事騒ぎに煙で飛んで、榎の枝にかゝつて居た、おいらんの襦袢の袖でもあるだらう、と皆は然う云つたんですが、私は

何うも、確に人間、しかも年寄。でも、あの、赤毛布を着た田舎のお婆さんかと思ひましたが、今のお話では、もしかすると、其の、（と、おど〳〵して）何ぢやありますまいか。それだと、私たちの自動車に乗つて來て、此處等には居やしないでせうか。一寸何うしませう、いやあな、ねえ。

お柳　（聞きつゝ屹と成る）私も聞いた、あちこち火柱が立つといふし、それでは、もしか。

千蝶　えゝ！

お柳　まさか。そんな事がありますものかね。

千蝶　でも。もう彼方へ行きませうよ。

お柳　もし又それだと、廓にも、姉にも仇なんです。私が捜しても屹と逢ひます。

千蝶　（熟と聞いて）あゝ、其の貴女にあやかりたいの……おかみさん。……つとめは、とに角、お宅へ伺はして下さいな。よう、後生です、可いでせう。

お柳　其が不可いのよ。……一寸、今度は私が極りが惡い。……陰口をきくやうですが、妹だと思つて話すんですよ。お姑が嚴くつて、貴女がたとおつきあひは出來ません。……姉が達者で居た時も、實家へ、と云つては年に一度か、それも精々。漸との思ひでござんした。……あなた察して下さいな。（とほろりとする。）

千蝶　まあ、だつて、まあ……よく貴女の其の御氣象で。

お柳　其が夫への義理なんですもの。……思ふ男と添つて居て、何が不足で世にすねるやうな事を言ひませう。よく〳〵だから。……私もう、時々一層死なうと思ふ。……お千さんかい、お前さん、……時節が來たら逢ひませうね。

千蝶　あんな悲しい事ばかり、（と又縋る。）

お柳　もうお泣かせでない。だけども一寸、（とあたりを見つゝ）おいらんたちも御覽なさい……こんな可愛い人もあるが、廓も町も、お互に、女は果敢ないものだねえ。

新調　（白衣、黑の腰法衣、十一二の美少年。引手茶屋の箱提灯を、あか〳〵と提げて出づ。此の看板に、桔梗の紋あり。……ゐづつや。とかなで記す）あの、あの、火事で本堂へ來ておいでの藝妓衆が然う言ひましたから、お迎ひに來ましたよ。餘り遲いからッて。あの、そして、自分ぢや來られません。卵塔場は可恐いッて、臆病でございますね。

お柳　臆病ですわね、おばけの方で可恐がりさうな樣子で居て、何うでせう。……笑つてお遣んなさいまし。……御苦勞樣ですね。（恁く言ひつゝ、看板に目を留むる）まあ、つい見馴れて居てうつかりしたつけ、其の看板は茶屋のだ事、お寺にありさうなものではないわね。それだし……井筒屋、桔梗の紋。……

新調　あの、これは立退きの藝妓衆の荷物の中へ、何うした事か、相模屋さんのが紛れ込んで居た、と云うてでありました。寺の提灯は、方々貸したり、使つて居たり、……丁ど可いから此をと云つて。……

お柳　不思議だわね、お千さん、聞いて下さい。火元は近し、姉が病氣で、何一つ出なかつたのに、――お小僧さん、私に持たして下さいな。（と手に受けて持つ、無量の思ひ）……まあ、二年越、――久しく持つた事がない所爲か、手が重い。（と俯向く。）

千蝶　貴女、私が持ちませう。

お柳　何うぞ、（と千蝶の手に渡して）お小僧さん。御褒美を上げませう。一寸頼まれて下さいよ。（帶に挾める手拭を折つて疊み、新調の新發知頭へ、ふはりと置く。）

新調　をかしいや。（とはにかむ。）

お柳　いゝえ、をかしくはありません、お千さん、よく肖合つたわねえ。

千蝶　まあ、ねえ、色が白くつて、綺麗だ事よ。

お柳　迎もの事に、恁うして頂戴。片々の手を懷へ、片手をしやんと突袖で、少し斜に成つて、然う、然う。……さあ看板を此方へ。（と取つて持直して、すらりと極る）さあ、行きませう、お千さん、一寸の間、內の藝妓に成つておくんなさいな。

千蝶　本望ですわ。

お柳　眞似だけも、褄を取つて。……右の手を袂の底へ、一つ飜して、ツ、と向うへ。

千蝶　恁うですか。

お柳　あゝ、撥をお持ちぢやなかつたつけ。……（と黃金脚、珊瑚の簪を拔いて渡す）突支棒にして頂戴、ほんの、俄の。當座の總上の紙ですよ。

千蝶　私、故つと頂くわ。（と一寸頂いて、袖を潛らし、袂へついて、袖を突く。）

三人、姿よく、すら〳〵歩行く、と、其まはりを、蝶一羽、ひら〳〵とつき絡ひ、やがて看板の明にとまる。

お柳　（恍惚とした風情）花の香が來て包む。……チヨツ（と舌打をやさしくして）一杯のみたく成つたわねえ。暗夜も朧に見えるんだもの。……（其の時、蝶はなれて空に舞ふ。看板を衝と上げて視かへす）何とも言へない里心がついて來た……仲之町の夜櫻には、井筒屋の看板に、柳の影が映るツて、言つたもの……あれ、可厭な。細く動いて、塔婆の影が黑く映る。……

千蝶　（ひたと寄添ふ。）

お柳　（看板を褄へ下げて立直る）廓は墓に成るのかねえ。（と悄然とする。）

五　折檻

寂しく三人、卵塔の間を辿る。此以前に、お柳の姑、浦松の隠居、槇子刀自。白髪の切下げ、脊低の巖乗。藪疊に窺ひ居り、新調が舞臺を入る處を遣過ごし、拔足して、お柳に摺寄り、七十餘歳の皺の上へ、薄化粧したる平扁き猫のやうな顔をぐッと低く、箱提灯の上へ出して、舐めて取るやうにフッと消す。――

お柳　あれ。（と提灯をハタと落し……立窘みて）お、ば。あ、さ、ん、（と氣を打つて云ふ。）

重太郎　（小走りに駈けて出で、お柳のうしろへ衝と廻つて）お柳、（と急込みたる聲。）

槇刀自　（提灯を仔細ありげに拾つて疊み、杖と一所に脇に抱へて）柳や、柳や、魂消たかいなう。怯したではないぞ……今の眞似は、あれは何ぞな！　明るては、お主の方が消え失せいでは成るまいで、私が情に吹消して遣つたぞ。人を辛いと思はつしやるな、や！（喚くやうな掛聲して）浦松の家の掟ぢや。惡所賣女の類とは、表向き交際ふ事成らんでの、お主が姉の初七日の今日……お主一人遣る分で、志ぢや、内々での、私が重太郎を誘うて參つた。今戸の寺から歸らいで、廻り道した事、聞いたによつて、後をつけたでは決してないぞ。迎ひがてら來て見たれば、あらう事かいの、や！　重太郎。

重太郎　馬鹿な、何の眞似をして居るんだ。

槇子　や！　聲高に叱るでないぞい。嫁の氣では、私が敎へて喚かせるぢやとひがむでの。靜に言やれ。ぢやが、餘りと言へば、餘りと申さば、……浦松家の嫁ともあらうものが、夜鷹の稽古は、何さらす！……御先祖へ言譯ないで、や！　こりや、事の仔細によつては、私が自害でもせねばならぬ。や、大それた、（躍りかゝるやうにして、お柳の耳をぐいと引く。）

お柳　あいつゝゝ、（引据ゑられる。）

重太郎　（無言にて、はッとする。）

槇子　や、これ、重太郎、荒い事をすないの。お主、柳やを打ちはせぬかいの。

重太郎　否。

槇子　なれば可いがの、必ず手荒な事はせぬものぢや。（と言ひながら、お柳の口のはたを邪險に抓る。）

お柳　あいつ、あいつゝゝ。

槇子　それ、痛いと云ふがの、重太郎、柳やを何故打つぞいの。これいの、重太郎。

重太郎　否、打ちはいたしません。

槇子　何ぢや、打たぬ。ぶたぬものが、何故、音を上げる。音ぼねを立てるのぢや。（云ひつゝ又

顎を抓る。）

お柳　あゝ……

槇子　（又片頰を抓る。）

お柳　あゝれ。

千蝶　（此の間、手探りにはら〳〵して、うろ〳〵搦む。）

槇子　（抓りながら、にこりとして）それ、泣くが、痛いと云ふが、それ。……

お柳　（蒼くなりつゝ、空を摑むやうにして搜す手と、重太郎、暗中に手を犇と取合ふ。）

重太郎　（くひしめて咽び泣く。）

槇子　折檻をしやるないの、泣くがいの、可哀や、や！　こりや柳やの本心では決してあるまい。……狐か狸が憑いたのぢや。疾う內へ行て水なと喫はしよ。車の上へ縛らずとも可からうかの。あゝ、苦患やの、苦患やの。誰の所爲ぢや。柳でないぞ。狐めが。（又捻上る。）

お柳　（縋りついたるまゝ聲をのんで、しかと重太郎の手にくひついて、震へて堪ふる。）

重太郎　（ともに戰きながら）來い。（手荒くぐいと引立て行く。）

千蝶　（聲をしるべに）もし、……（と寄る。）

槇子　（中を隔てて）何ぢや、お主あ。（と杖の尖で、胸を支く。）

千蝶　（ばつたり倒れる。）

槇子　手荒くすなや、や、重太郎。……喜の字の祝を前に控へて、苦患やの、苦患やの。（とじろりと視ながら、手に提灯を載せつゝ、退場。）

千蝶　（ほつと息して、起上り、と四邊を見て、褄を合せて、衝と急いで入る。）

六　拍子木

荒涼陰慘たる卵塔に、赤き光颯と立つ。無緣塔の裏なる二本の大卒堵婆左右に動きて、赤魔姥、立顯る。

赤魔姥　（片手を塚に、片手を杖に、ぐいと腰をのして、お柳の行きたるあとを見送る）むゝ、あれらへも火の粉は飛んだ。（北叟笑して、頷きながら、のろ〳〵と歩行み出づ）女ども、灰に成つた廓見たか。嬉しいか、悲しいか。や、（と靜に）嬉しいか、や、悲しいか。（と杖の尖にて一ッづゝ、墓石をコト〳〵敲く）ものいへよ、やれ、無緣の女郎。私はこれ。其の返事聞かうための逗留ぢや。（墓をふら〳〵と縫ふ。）

治助　（拍子木、カチカチカ、チと出で來る。打ち仰いで）可厭な空ぢやな。……（カチカチと歩行きながら）ふん、は、ふん、きな臭い。あの衆、吸殼など捨てたかい。（と鼻をひこつかせ

ながら、無縁塔の前にかゝる。と向直つて、すつくと立つ。赤魔姥を一目）わあゝ、火柱。……

……

とばつたり這ふ。

其二　根岸おまじなひ横町

一　娘　分

お鶴　（臺所より出でたる振にて——舞臺は奥座敷——其の高縁の端に至り、「植木屋の手傳、半次を呼びかく）一寸、植木屋さん、一寸……

半次　（なまけたる風にて、庭前を掃いて居て）あい、私かね。

お鶴　私かもないもんだね、外に誰も居やしないぢやないか、焦つたいよ。

半次　おめでてえな。へむ、紋切形を言つて居ら。

お鶴　おめでたいのさ、そりや、お内では御隠居様の喜の字のお祝でおめでたいんだけれど、……だつて忙しいやね、呼んだら、早々と返事をおしな。

半次　へい〳〵……何ぞ用でございますかね。

お鶴　何ぞ用つて、お前さん、御飯をあがつたんですか。

半次　御飯かね。……一杯づゝ頂戴の、其の一件の事ですかい。

お鶴　何の件だか知らないけれど、植木屋さんの若い衆は何うしたらうつて、お前さん、奥様が、お忙しい中で、氣に掛けて在らつしやるぢやないか。落着拂つて、お前さん、最う食べたんですかよ。

半次　（ぶツきらぼう）食べねえよ。

お鶴　ぢや、早くして下さいなね。

半次　食はねえから可いぢやねえか。

お鶴　おや。妙に突掛るね、此の人は。……ぢや奥様に、其の通り申上げるから可い。

半次　勝手にしねえ。

お鶴　勝手にしますよ。（とツンとして行く。）

お柳　（襖の蔭にて）まあ、静におし——然う、（と云ひつゝ、すツと出で）植木屋さん。

半次　（無言。）

お柳　植木屋さんと云ふのにさ。

半次　うゑき屋さんと言はれると、私あもぐりだ。ほんの間にあはせなんだけれど、此でも名が

ありますからね、名を呼んでおくんなさいな。

お柳　（品をよく、邊りを見廻し）松的……（と一寸、蓮葉に腰をおろす。）

半次　へい。（と突拍子な大きな聲。）

お柳　あゝ、吃驚するわね。（とトンと手をつく。）

半次　こたへたか！　はゝはゝ、私あ又空きッ腹へがくりとこたへた、あゝ、切ない。

お柳　何を拗ねてるんだい、なぜ、お前御飯をお食べでない？

半次　斷食だ。

お柳　何の洒落さ。

半次　洒落ぢやねえやね……ね、姉はん、お前さんは仲の町の娘分で、今ぢや恁うした大所の御新造だ。私あ地方の裏長屋の餓鬼で、相變らずの溝浚ひだけれど、同一跳橋を出入りして、私立へ通つた友達だからね。町方の奴等にこれんばかしもひけは取らしたかねえんだと、まあ、然う思つておくんなさい。

お柳　嬉しいよ。……

半次　處が嬉しくねえ心意氣だから、無體、癪に障るんだ。

お柳　大層、また障らせたね。何がそんなに癪なんだえ。

半次　饅さ、あの……

お柳　ぬたとは？

半次　お膳に着いてた饅だよ。……此奴ア呑めると思つたがね、聞きねえ。一所に臺所で頂いてた經師屋がね、若い衆何と、此のぬたの種は魚軒なんだ。――ね、昨夜一たてあつた客へ出した、其の魚軒の殘りものなんだが、魚軒のまんまぢや色が變つてゐて……見た目も惡い。……味噌で揑ち了へば新規のお料理、わざと拵へた御馳走に見えて、人が結構だと言つて頂く。……其處等が臺所の働きだ、と奥で話して居たのを聞いた。……成程な。猿頬貝の剝身を新規に買ふより、殘りもので生肌鮪の方がお錢はたゞて聞えが可い。世間體の見得を張つて、もとを掛けねえ寸法は豪いものだ。金子を拵へる人の料簡は行屆く、――と其の經師屋め、酷く感心して話しやがつた。何の料簡だか知らねえけれど、無體癪に障るぢやねえか。

お柳　大な聲をおしでないよ。

半次　まあさ、ものの道理がよ。

お柳　道理が、と云ふ風ですか。

半次　道理で惡けりや情合だ。ねえ、内ぢや金を溜めたいんだと、可いかい、金子を溜めるにや出入りの日傭取に、うめえものは食はせられねえから。此の魚軒はのこりものだと……可いか

い、殘りもので惡いけれど我慢して食べてくれろ、と打撒けて云つて見ねえな。其處は江戸兒だ。賴まれたからにや可厭とは言はねえ。變な臭氣の些とぐれえ、わさびで殺して鵜呑みにして遣ら。其わさびだつて生姜だらうがね。……生肌鮪の鰻とごまかして、魚軒殘品の暗討と來ちや合點ならねえ。……姉はん、何だつて、そんなさもしい、しみつたれた料簡に成んなすつた。仲の町の生拔きが、露店の指環を嵌めるやうな、資本の出ねえ見得をすると思はれると、經師屋の兀にだつて、顏が立たねえ。ねえ、然うぢやありませんかい、奧さん。

お柳　厭味をお言ひでないよ、解つてる事だから。

半次　いんや、分らねえ、分らないよ。井筒屋のお柳ちやん。

お柳　あゝ、それを言はれると……（と差俯向き）堪忍しておくれ、此の內の家風だとさ……お婆さんのいひつけだから。

二　御家風

樫子　（重太郎の妹、大ハイカラにて出づ）お姉樣、お婆樣が、何かおつしやつたのでございますか。

お柳　はい、いゝえ。……（と濁して）ぢや、植木屋さん、手落ちのないやうに賴んだよ。御隱

居樣は癇性でおいでなさるからね。（知らない顏で、と目許で云ふ。）

半次　（心得）へい、もし、御覽なさいます通り、精々氣を付けて居りますんで、へい。（と引込む。）

樫子　お姉樣、――何がお氣に入らないか知りませんけれど、出入りの、あんな下等なものに、お婆樣の惡口を云つて酷くはない事？

お柳　えゝ、（驚く）何時私が、お婆さんの。

樫子　第一、其が不可い事よ。……お婆樣と言ふものよ。……お婆さんでは安ッぽいわ。些とは言葉づかひにお氣をつけ遊ばせ。

お柳　はい。飛んだ事を。貴女、何時私が惡口を申しましたえ。

樫子　現に今、然う言ひはしなくつて？　そりやお姉樣はお育ちがお育ちですから、恁うやつた家庭の事は何にも御存じではないでせう。……ですからお婆樣が御教育なさるんだわ。教へるんぢやない事。……直ぐ一口でお覺えなさらないし、直きにおなほしなさらないから、年寄だから、氣短かで、そりや癇癪を起すでせうよ。貴女、それが氣に入らないで、腹が立つたら面と向つてなり、ちやんとした親類の前で御非難を遊ばせ。あんな無教育な下等動物に蔭口をきいて、卑怯だと思はない？

お柳　私、何うしたら可いでせう。思ひも掛けない、貴女、眞個に私が、そんな事を言ひましたか。

樫子　申しました。……お婆様は癇性だつて言つたぢやない？　がみ〳〵癇を起すつて事だもの、貴女、それでも蔭口を利かないと——然う言張る？……

お柳　まあ、（と優しく打微笑み）飛んでもない、貴女。……癇性と言ひましたのは、植木屋に、掃除なんか氣をお付け……御隱居様は綺麗ずきで在らつしやるからと、然う言つたんでございます。

樫子　はあ、綺麗ずきつて事なの、癇性とは。……嘘でせう。

お柳　否、眞個でございます。

樫子　一寸、それでは、どんな字をかくこと？

お柳　お恥かしう存じます。

樫子　癇性——（高慢に掌へ、指にて何か記しながら）分らない、何しろ、地方語ね、俗語だわね。

お柳　はい、何ですか、皆、然う申します。

樫子　皆ぢやないわ、芳原の、燒原で言ふんでせうよ。然う、綺麗ずきつて事なの、然う、（と考

ふ）……すると何ね、お姉様は、見掛けに寄らない諷刺家ね。

お柳　（何の氣もつかず）はい。

樫子　はいですか、おや、はいとは然りと云ふこと、私の言つた事を、然やう、と自認した事に成るんですね。然うですか。お姉様は諷刺家で在らつしやいますか。此から其のつもりで氣を着けませう。おゝ、可恐い。

お柳　返事がお氣に障りましてございますか、何ですか、お教へなすつて下さいまし。……

樫子　あら、御存じない、諷刺家を。

お柳　眞に不束でございますから、何うぞ、お講釋を遊ばして、下さいまし。覺えますから。

樫子　お講釋、寄席ではないわよ。ほゝゝ、ほゝ、そして覺えますからつて、お姉様、（とばかりは猫撫聲にて）覺えて可い事ではないの。一體、貴女は、それぢや何ね、人の云ふ事を、分りもしないで、可い加減な、から返事をなさるのね。澤山、然う遊ばせな、何うせ然うでございませうよ。

お柳　否、（と强く）然う云ふわけではないんですのに……（と聲やゝうるみ）行屆きませんで濟みません、何うぞお教へなすつて下さいまし。（と目を瞑つて、じつと手を支く。）

樫子　一寸、諷刺家つてのは、ね、お姉様、お聞き遊ばせ。貴女は、あてツこすりやさんだと云

ふんだわよ。（唇をぴいと出す。）

此の以前より、槇刀自、忍足にて隔ての襖の蔭に來り、立聽しながら、樫子の毒言、なまくら刀にて、お柳の顏を引こするが如くする毎に、ほく〳〵頷き、總入齒でニヤリとす。

お柳　えゝ、（と驚いて顏を上ぐ）其の、其の返事を、はい、と私が申しましたか。あの、其の返事を、（と屹と樫子を見詰めながら、思ひ返し、瞳をそらす）まあ、何うしたら可いでせう、馬鹿ですわね。（と寂しき笑ひに紛らして）なぜ、お樫様。……

樫子　又ですか、お樫様は可厭だと云ふのに、

槇刀自　（頷く。）

樫子　樫子様と云ふものよ、……無教育だわね、口の利きやうたらありやしない。

お柳　樫子様、なぜ、私が、あてつこすり屋なんでございますえ。

樫子　あてつこすりぢやありませんか。然うぢやない？　貴女、お婆さまの事を、俗語で、癇性、綺麗ずきだつて言つたでせう。一寸、何處にお婆さんが綺麗ずき？　兄様も知つてるわ。おてうづに行つて手を洗はなかつたり、疊にこぼしたお汁を舐めたり。（……と低聲なり。）

槇刀自　（此の間、耳を押當て爪立ちながら、聞えない樣子あるべし。）

樫子　其はお兄様も知つてるわ。私だつて驚く事よ。隨分汚くつて、少しばかり辟易するわ。其

を綺麗ずきなんて……此でもあてつこすりではないと云ふの。えゝ？　お姉様。

半次　（庭の隅より、ぬつと面出し、此方を窺ふ。）

槇刀自　（見附けて、恐い顏をして、ぎろりと睨む。）

半次　（慌てて引込む。）

お柳　（あらためて、頭を下ぐ）申しやうが惡くつて、お氣に障りましたら堪忍して下さいまし。……でも、御隱居樣の思召しだと申しませんと、若衆に、壓が利きませんものですから、つい、あの……

樫子　だつて、貴女は何よ？　とに角、浦松家の令夫人ではありませんか。其の令夫人が、出入りのものに壓が利かないでは困る事よ。矢張りお育ちがお育ちだから、其で人が馬鹿にするのね。庭掃除させるくらゐに、お婆樣を、だしにお使ひなさらなけりや成らないやうぢや、……あゝ、行末が案じられる。お兄樣はあんなだし……私は最うお嫁に行くし……浦松の家は何う成るんでせう、ぢごく宿にでもなりはしない事。

お柳　樫子樣。（と屹と云ふ。）

樫子　おゝ可恐い！（仰山にうしろへ反り）貴女、睨んでね。

お柳　滅相な、貴女を睨めば——此の兩眼は潰れます。（と聲が震へてまた俯向く。）

樫子　まさか……そりやお婆様を睨めばだわ、私ぢや、然うね、鳥目くらゐなものだわよ。
槇刀自　（そつとのぞいて、入りざまに）樫子や、樫子や。（と呼ぶ。）
樫子　はい。唯今、（とそは〳〵）お姉様、（と例の猫撫）些とお働き遊ばせ、もうお客様が來る時分よ。……まあ、可厭ね。俳優の身振りで鬱いでるのね。（と云ひ棄てて、槇刀自が立ぎきした、る横手の襖を出て行く。）

三　人目の關

重太郎　（着流しにて、正面よりつか〳〵出づ）お柳、（と呼ぶ。）
お柳　（俯伏したるが、つき膝に衝と起きて、重太郎の帶に縋る。）
重太郎　お柳。（聲を忍んで泣く。）
お柳　あれ、泣いては可厭、笑つて頂戴、お前さんの笑顔を見れば、どんな事でも忘れられる。
（男の胸に顔を隱す。）
重太郎　此が笑つて居られるか。樫の畜生、眞綿で首どころぢやない。竹鋸で、此、此の白い襟を刻んだ。何の仇で、恁うまでする。其のためには、骨も筋も寸斷だが、血を分けた兄妹だ、兄は然うは思はぬぞ！　今度も今度、あいつが結婚すると云ふ……嫁に行つて内を出れば、鬼

を追拂つたやうなもの。其でさへ、相手の男を山師と見た……年よりをたらし込み、妹を枷にして、金を引出す仕事らしい。……其の金子は惜くない。戀も情もないものに、道具に使はれるのが可哀さに、可慘められる當人の、此のお柳さへ心配する。……其の心も知らないで、相手の男に非を打てば、唇に反を打つて、色の邪魔でもするやうに、蜿り曲つた根性の蛇の尾で叩くんだ。罰當り！　私にまで、生れて以來、覺えのない立聽の罪をつくらせる。（樫子が出た方へ無念の目ざし）堪へてくれ、お柳、私が詫る。
お柳　止して頂戴、雪が降つて流連しても、男と云ふものは、婦にあやまるものぢやない。思つた同士は苦勞が樂み。夫婦になるのはまんがまれ。お前さんとは添ふ前に、何の苦勞もしなかつた。其の入れ合せ、と思つて居ます。……忍んで逢ふのに、氷の中を跣足で行くのも、晴れた夫婦が、炎天に血の汗を絞るのも、身に染みる嬉しさにかはりはない。私の事は氣を揉まないで下さいまし。……あの樫子様の緣談は？
重太郎　うむ、樫子様が凄まじい。……あら粉落雁の吹寄せ阿女、狼のふんの畜生め。……駄菓子で澤山だ。番太郎の金棒曳、多町で蒼蠅が集つて居やがら。
お柳　まあ、そんな事を言はないで、……そして緣談は何う成りました。
重太郎　何う成つたつて、お前も、樣子を知つてる通り、大概話は極つたんだよ。けれども、ま

だ表立つた親類と云ふわけではないから、今度のお婆さんの喜の字の祝も、内曲の親類は日を別にして、今日來るのは樫の奴と結婚をしようと云ふ、其の連中ばかりなんだがね。

お柳　内へは今日がはじめてだわね。

重太郎　妹は一寸々々出向く。……それ、あの、何時も自動車で迎ひに寄越して、お婆さんが乘つて出掛ける。……私も一度、無理にお婆さんに連れられて行つた事がある……何處か埋立地に、かじめを燒いて、何かの製造會社を遣つてる男さ。顔を見ても氣にくはない。何處を何う突留めたと云ふ事はないんだが、山師らしくて危いんだから、私の意見では止めるけれど……妹の奴は勿論、年寄が、あたまから自動車に惚込んで居るんだからね、爪尖へも取上げない。第一、俄身上、成上りと云ふではなし、兩親は少死なすつて、年數は少なくツても、奥州から出て稼上げた、お爺さん、いまのお婆さんの代から私までは三代、……根岸の上中下を掛けた、居つき地主の金貸が。……お柳。（疑と見る。）

お柳　あい、（と輕く云ふ。）

重太郎　お前を前に置いて言ふんぢやないが、此の他に一生、決して我儘は言はないと、親類の前で誓言を立ててまで、引手茶屋の娘ぶんを女房にする料間だ。結婚の事に就いては、まるッきり非常識、……てんで分別が無いのだから、妹の婿の事に是非を言ふ柄ではないと、年より

はじめ極つけます。……まあ、其は可い。本人さへ承知なれば、たとひ其の妹を利用して、家をどんなにされようと、そんな事は些とも苦にはしない、然ほどに乘つて見たいものなら、妹のために自動車ぐらる買つて遣らん事はない。けれど、自分で買つたんぢや氣が濟まない。緣遣く先方の自動車に乘ると云ふのが妹は出世のつもりだ。又、年寄は年よりで、婿が工場持、大事業家と云ふ處で、尙ほ此の上にも身代の爲にするつもりらしい。えゝ、其の、利用にするつもりが、つい利用にされて、いづれ山師の手に乘せられるのは知れて居るんだ。

お柳　だつて、お年よりが、得心でなさる事なら、どんな御損があつたつて、私たちをお怨みなさりはしますまい。又……私たちは、もと〳〵其のつもりで居るんですもの。長屋住居も、其の日ぐらしも厭はないんぢやありませんか。

重太郎　お前と恁うして夫婦に成るには、そりや初手から覺悟の前だよ。そんな事を、些とも厭ふんぢやないけれども、愈妹が結婚して、あの自動車が親類に成つた日にや……今でさへ此のありさまだ。第一お前と、あの連中の折合が煩かしい。……私は其が苦に成るんだ、妹の身も案じるけれども。……

お柳　何の、私の折合なんか、どんなにでもなりませうから、其の御心配にはおよびません。

重太郎　ぢや、辛抱をしてくれるね。

お柳　そんな、そんな苦しさうな顔をして言つては可厭。莞爾して、辛抱してくんなよ、と云つて頂戴。

重太郎　むゝ、言ふよ。

お柳　莞爾してさ。

重太郎　恁うか。……辛抱をしてくんな。

お柳　あい、（と云つて、すつと立つ。）

重太郎　何しろ、衣ものでも着換へておくれ。お婆さんが紋着だと言ふんだから。

お柳　紋着……なの。内で一口あがるのに。

重太郎　内で一口と云つちや輕々しいが、喜の字の祝でお儀式だ。……自動車で乘込む客に、まさか半襟のかゝつた衣服で、挨拶も出來まいぢやないか。妹なんざ、裙模様と云ふ事だ。

お柳　困つたお屋敷さんだわね。

重太郎　さあ、其だから私が心配。……

お柳　あゝ、あやまつた、辛抱しますよ。（と莞爾して、ついと入る。）

四夜　櫻

重太郎　（屈託さうに後を視めて）……其の辛抱が出來ようか。……なか〳〵此のくらゐぢや濟むまいからな。（腕を拱き熟と俯向く。）

千蝶　（花道より、薄色の洋傘をさし、手に綠の色したゝる如き、房りしたる青柳の一枝、地摺に提げて出づ。其の時は藝妓島田、お柳が與へた珊瑚の簪をさし、羽織を着ず、着流し、のめりの駒下駄。車夫一人、袱紗づつみの贈りものを持つて從ふ。

やゝ、舞臺に近づき、浦松の生垣つゞき、木戸を見て、洋傘をたゝんで、車夫に渡し、無言で包を受取り、柳の枝に持添へて、手眞似で、可し、と云ふ。車夫は默つて歸る。

其のまゝ、垣根に近づき寄り、木戸越しに庭前を可懷さうに差覗く。

重太郎　（身を起して立つ時、緣前より其の姿を認む。千蝶の見つけられて、すさりながら尙ほ人待顔に彳むを見て、庭下駄を突掛け、木戸の口まで行く）姉さん。

千蝶　はい。（人なつかしげに、木戸に寄る。）

重太郎　何處ぞ、お尋ねなさるのかい。

千蝶　いゝえ、あの然うぢやありませんわ。一寸、失禮でございますが、貴下は此方樣の誰方で在らつしやいますの？

重太郎　私かい、私は内の主人だよ。

千蝶　あら。若旦那。御様子で、大方然うでせうと存じました。……では、あの、私は、こんなもので、失禮ではございますけれど、御新造さん、あの、奥様に、一寸お目通りが願はれませんでせうか、貴下？……

重太郎　あゝ、誰方だか、よくおいでなすつた。……譯のない事だがね、（折惡さうに四邊を眴し）まあ、此方へ。（と言ひにごる。）

千蝶　いゝえ、あの、垣根越、此處で澤山なんですわ。私のやうな賤しいものが伺ひましては、お惡いことを存じて居りますけれども、餘りお可懷くつて我慢ができませんものですから、お内のまはりでもと思つて參つたんです。もう、此處で結構なんです。

重太郎　や、様子を知つておいでだね。それで玄關へも廻らずに、裏を入つて來なすつたか。何とも申譯がない、私がわびる、御免なさいよ。

千蝶　あれ、何のまあ、若旦那、そんな事。勿體ないぢやありませんか。

重太郎　で、姉さんは、何誰だい、廓の朋輩衆でおあんなさるかい。

千蝶　はい、いゝえ。……あの、つい四五日前に、はじめてお目に懸りました。三の輪の淨閑寺で、大層御恩に成りました。……千と申しますものなんです。

重太郎　あゝ、其の時の姉さんか。お柳に聞いて委しく知つてる。よくおいでだ。が、……いや、

最う面目次第もない、大概お察しの内曲だから、主人の私が思ふやうに容あしらひも出來ないんだ。實に何うも。（本意なく當惑さうに目を遣つて、植込から又面を出す半次を見着けて、來い、と目で云ふ。）

半次　（心得て飛んで來て、ちよんきなで耳を寄せる）へい。

重太郎　一寸。家内の様子を見て來てくんな。

半次　旦那、私も御新造さんの味方ですぜ。怪しからんもんだ、吩咐ら、ま婦め。

重太郎　馬鹿。ばつが可けりや、家内を逢はせようと云ふんだな。内へ逢ひに來た人ぢやないか。

半次　大丈夫かい。……魚軒の殘を、饅ですからね。

重太郎　何だつて。

半次　うつかり食へるもんぢやねえ。（と呟いて行く。）

重太郎　姉さん、何だか、てれ隱しに、今めかしいお世辭のやうだが、淨閑寺の墓場ぢや宵闇だし、あの騷ぎで、顔どころか、脊恰好も見なかつたから、其時では勿論ないが、何處かで、以前、お前さんを見掛けて知つてるやうに思ふがね。

千蝶　えゝ、不躾ですから。何にも申さずに居りましたが、私も貴下を、何處かでお見上げ申したやうなんですよ。

重太郎　眞個だ。……ト家内に聞いた、お前さんは赤坂だつけね。

千蝶　はい。

重太郎　何だか、話は種々だが、此から、すぐ家へお歸りかい。

千蝶　いゝえ、赤坂の方は、客の事で些と面倒でございますから、唯今は一寸餘所に隱れて居ります。今日は、此から淺草へ參ります。そして、惡い事をしました。自動車で見ぶつなんかして、眞個に心が濟みませんから、燒跡へお詫に行つて、此方の、奥さんの、仲之町のお住居のあとも拜んで來ようと思ふんです。

重太郎　お待ちよ。……然う言ふんで思出した。――お前さんを見掛けたのは、其の仲之町ぢやなかつたか。

千蝶　あゝ、一昨年の春……

重太郎　花時分。

千蝶　櫻が盛りの。

重太郎　宵の口。……京町の角を曲つた處の、おでん屋の暖簾越に、……目の覺めるやうな綺麗なのが、しどけない、媚かしい、袂も褄も風采を、微醉機嫌の投遣りで、茶碗酒を飲んで居た。

……

千蝶　綺麗だなんて存じませんが、世話に成ります……旦那ッてのに連れられて、飛鳥山の花見のかへり、皆で夜櫻へ浮かれ込んで、連は格子をぞめくうち、つい、酒の上のお轉婆から、あの、おでん屋へ私が一人で。

重太郎　此方も同一花見のかへるさ。彼の人ごみで連は、ばら〳〵……一人で格子前をぶらつくうち、霞の掛つたおでん屋の暖簾越に、其の一枝が見えたぢやないか。提灯を提げて寄つて來た……辻占賣の年增の袖を、黑板塀へ密と曳いて、あの藝者の名、と聞いたつけ……土地のだらうと思つたからです。辻占賣は知らぬと云ふ。此方も醉つた勢だね。……おでん屋の爺とお前さんが蔭の緣臺へ並んだ中へ、ふら〳〵と割込んで、戀の封〆の丁ど解けた、「不思議な緣」と紅筆の辻占を突附けて、一ッ願ふ、と茶碗を出す……

千蝶　私、お酌をいたしました。

重太郎　渡る世間の鬼は知らぬが、櫻の蔭に他人はない、と恍惚と成る處を、突然、四五人飛懸つて、私を路傍へ引摺出す……

千蝶　傍杖くふな、と手を摑んで、旦那が私を引立てました。

重太郎　其の時、夜櫻に灯を點けると、何處ともなしに、柳の影が映すと云つた。井筒屋の看板が、婦の姿を映して通つて――寄つて懸つて手籠めにする大勢の破落戸の手から、私を救つて

くれたのが、辻占どほりの縁に成つて、其が、今の家内なんだよ。

千蝶　まあ！……

重太郎　お前さんとも不思議な縁だね。……後で聞くと、其藝妓の旦那と云ふのが、ごろつきに錢を握らして、私を打たしたんださうだつけ。

千蝶　えゝ、私も、それは聞きました。では、其の時の若旦那、……まあ何うしたら可いでせう。

重太郎　亂暴をさしたのは、お前さんの知らない事さ。しかし彼の時は驚いたぜ。

千蝶　何とも申しやうがないんです。……淨閑寺で、おいらんたちの墓を荒らして、奥さんのお庇で助かつたのも、矢張り其の時の旦那なんです。最うフツ〳〵可厭に成つて、其の人の手から離れようと、身を隱して居る處ですわ。かさねゞ〳〵お可懷い、奥さんに逢ひたいわ、若旦那。

重、太郎　私だつて逢はせたい。お柳も嘸ぞ逢ひたいだらう。……むすぶのかみが見えたのに……

（とさみしく笑つて）半次は何うした。

半次　旦那、此處に居らあね、（と最う來て居る……）お話に夢中だから、引退つて居ましたつけ。だがね、樣子を聞いて安心さ。私も何うか、をがみたいね、南無むすぶの神樣。（と手を合せる。）

重太郎　巫山戯ないで。……あちらの樣子は？……

半次　御新造はお召しかへが濟んだと思ふと、一尺三寸、（と額の前へ廂の手つきで）お嬢さんの廂の撫着にかゝんなすつた。

重太郎　まづいなあ。其奴は弱つた。（當惑する。）

千蝶　（よく、知つて）あ、もし御心配では濟みません、今日に限つたと云ふんではありません。……又うかゞひますわ。私、若旦那。

重太郎　察しておくれ。……殊に、今日は追着來よう、更まつた客もある。……旁々何とも。……近いうちに屹と私が、……と云つた處で、内では何うも都合が惡い、いづれ、何處か、外で逢はせる事にしよう、眞に濟まない。

半次　夜中に忍び込んで、お前さん、三人で寢ながら話したら可いぢやないかね。旦那、野暮でねえのが揃つたんだ。其のくらゐな寸法はおきかせなさいな。

重太郎　大きにお世話よ。しかし餘り心殘りだ。

千蝶　いゝえ、何うぞ。あの、此は眞個にお恥かしいものですが、……そして、此の柳は途中の花屋で見掛けました。……奥さんのお名のお懷しさ。それに……仲之町のおさと方がお燒けに成つた當座ですから、花も赤いものは氣におなんなさいませうと、青いのを濡れたまゝお目に掛けたう存じます。松の葉のかはりです。奥さんにおあげなすつて。

重太郎　（受取りつゝ、じつと身にしみ）なよ〳〵とした此の枝より、優しいお前さんの心を聞いては、むざ〳〵歸す義理ぢやない。あとの面倒は、夫婦が三日、齒をくひしばつて堪へるばかり。爰へ呼ぶ。一寸、逢つて行つておくれ……まあ、入つて。

千蝶　飛んでもない、若旦那。

半次　えゝ、入んねえ、私がついて居るうちや、生命に別條はねえからよ。

重太郎　大袈裟な事を云ふなよ。さあ、お前さん、――お柳。（と呼ぶ。）

千蝶　まあ、……貴下、（と止める。トタンにがッと自動車の音がする、ふと見遣つて吃驚！）一寸、あれ、今表通りをお門へ留りました、自動車は？

重太郎　やあ、折も惡し、客が來たな。

千蝶　まあ……何うしませう。あれが、私の申しました、其の時の旦那ですよ。

重太郎　え、鷲坂岩造が其の男か。……道理こそ！……私は唐突に打たれて知らんが、破落戸を雇つて手籠めにさした、先方は顏を知つてるから、其とは言はないが氣が咎めて、成りたけ私に遠ざかつて居たんだな。

千蝶　見附かりますと面倒です。……又、お二方が御迷惑。では、……私は。

重太郎　（默つて頷く。）

千蝶　戀しい人に逢ひたいほど、お慕ひまをして居りますと、くれ〳〵も奥さんに。

重太郎　可し、可し、難有う。喜ばせよう。――近い内に。

千蝶　後生ですわ、失禮。（と、かた〳〵と駈けて行く。）

五　棒杭

半次　何だか喧嘩にでも成りさうだ。や、難有え。……が腹が空いてちや、いざと云ふ時役に立たねえ。茶漬でかッ込め。（とひよいと行く。）

千蝶は丁度花道の眞中あたり、迎ひに來た車夫とはッたり。で、ものをも言はず、洋傘を引手繰つて、呆氣にとられる車夫に構はず、姿をかくすやうに舞臺の方へ。腕をはずんでポンと開く、と同時に……半次が、――岩造の意を體し、千蝶を見定めむため、自動車から突如庭へ廻つて侵入したる木又氣三郎とドンと打つかる。……氣三郎、此の時寫眞器械を携帶す。

半次　えゝ、氣を附けろい、棒杭め。

氣三　や、棒杭は嚴しいぞ！

半次　すき腹だ、まだ喧嘩は出來ねえ。（と入る。）

此の一たて、と相引いて、千蝶は、車夫を手眞似で押遣りながら、洋傘を横に其まゝ揚幕へ。

――

重太郎　（立直つて目迎へる。）

氣三　（我を忘れて、木戸から千蝶を追はんとする身振をす。）

重太郎　あゝ、通抜けは不可ませんな。

氣三　（心付き）は、これは、失禮。……唯今の、唯今の婦人は、あれは何です。

重太郎　何ですか……こんな横町の、もひとつ裏路を胡亂ついて、通りがかりに、淺草の觀音樣へは何う參りますつて聞いたんですから、多分、田舍ものでございませうよ。

氣三　はあ、成程。（ときよとんとして居る。）

重太郎　一體、貴下は誰方です。

氣三　え……こりや何うも失禮しました。僕は恁う云ふもので、（と名札を出して）――鷲坂社長と同伴をして參つたものです。

重太郎　鷲坂さんと御一所に。其は、……輕々しい、こんな處へ、何うもお出迎ひもいたしませんで。

氣三　否、つい、其の、……貴下は御主人。……樫子さんの御令兄、――お妹御には鷲坂氏の邸で、度々。御隱居にも御懇意に願ふのですが、貴下には掛違ひまして、はあ。（額の汗を拭く。）

重太郎　鷲坂さんもお見えですか、つい知らないで、飛んだ失禮を。さあ、まあ、貴下、此方へ。

岩造　（襖の内より）木又君、君は、まあ、御免蒙つて其處に居給へ。（と云ひながら正面へぬいと立はだかり）直ぐに寫眞を撮るとせうで。……いや〳〵、（と鷹揚にうしろを見向く。……其處に槇刀自あり）更らずと、こゝで御挨拶ぢや。其がお心安だてで可えですわ。

重太郎　（座敷に歸りて、待迎ふ。此より前、柳の枝は、石の手水鉢にさして置く。刀自に續いて、盛裝して樫子。臺にのせたる二組の花環を据ゑて出づ。）

お柳　（あとにつき、皆座に直る。）

六　緋無垢

岩造　はッはッはッはッ、づか……づか……奥へ濫に遣つて來ました。

重太郎　御挨拶痛入ります……お出迎ひもいたしませんで。

岩造　奥さんには、初對面の御挨拶を、謹んで、な、（とお柳に目づかひ、淨閑寺のいきさつを打消す料簡）えゝ、念入りに遣つたですで。……はッはッはッ。（と高笑ひ）御主人、君とは既に別懇ぢや、内曲が可えです。私は細節に係はらない事を以て得意とする。すべて洒々落々とし

て居る。野人禮に傲はずかい、はッはッはッ。

樫子　お兄様、お客様が、お婆様に、（と花環を見せる。）

重太郎　眞に何うも……（とばかり。）

岩造　御老人にはお氣に入るか何うあらうか思うたですが、外の老寄とは違ふ。……浦松家に斯の如き財産を造られた功勞者で、且世の所謂隱居でない。私などとも提携して、壯に新事業を起し、國家のために殖産工業の大道を、以來自動車で駈廻るんぢや。其の功を讃へ、其の壽を祝するのだ。眞綿や若布では不可んですでな。

槇刀自　（にこ〳〵ほた〳〵して）お心を籠められた、や、何と云ふ、見事なものぢやよ。

樫子　立派だわ、ねえ、お兄様。

重太郎　結構さね。

槇刀自　私ばかりでない、浦松家の名譽ぢや、のや、（とお柳を見向く。）

お柳　（うつかりして居る。）

槇刀自　や、（と喚いて）柳や。

お柳　はい。

槇刀自　名譽ぢやらうが。

お柳　如何なものでございますか。

重太郎　（氣を揉んで）內の譽だ、とおつしやるんぢやないか。

お柳　おめでたう存じます。

樫子　呆れるわよう、無教育で。（と座がしらけける。）

氣三　（其の間に寫眞器械を据着けて、……此の時飛石を緣に進む）社長、如何ですか……御都合で御撮影なさいませんと暗く成ります。尤も、夜分でも差支へありませんが。

岩造　いや、直ぐが可え。時に、晩餐の後ぢやと、醉うて姿勢が取れんと不可ん、はッはッ。何か、豫め馳走に成つて醉ふ氣で居る。……御隱居、私は此の通りぢや。遠慮せん、遠慮はないです。洒々落々として居る、はッはッはッ。分けて、奧さんには、はじめてお目に掛る、澤山のんで貰はん成らんで、旁々酒の前が可えですわ。……處で、誰方も支度なさつて、揃うた處で御隱居を眞中へ、……樫子さん。

樫子　は、（と、しなをする。）

岩造　貴女が、左へ。奧さん。

お柳　はい。

岩造　貴女が右へ立つて、其の花環を左右から御老人へ捧げて貰ふです、可えかね。

お柳　（もの言はず。）
重太郎　分つたらう、ね。（屹と目くばせする。）
お柳　畏りました、が、不束でございますから。
槇刀自　柳や、不束も何も要らぬがい。
お柳　は……
岩造　可えですな。其のつもりで二個進呈したですで。――さ、それでは御隠居。
槇刀自　重太郎、まだ、なう、鷲坂さんがお心を籠められて、や、分けて祝うて下された品がある。……これは、の、取つておきぢや。酒の席で開いて見せて、皆に、あツと云はせう思うたが、寫眞取る言はるゝで、此から、着かへて見せるがい。……あはゝ、つい、嬉しさに云うてしまうた、衣類ぢや、や、衣るものぢや。
岩造　つい言うて了うたですか。無邪氣、無邪氣。はッはッはッ。洒々落々として居らるゝ。私と氣が合ひますぞ。……さ、早くお見せ。四邊まばゆき扮装は、爽なりける（と節）はッはッはッ、醉はぬ前から此の通り、不遠慮な處が可え、洒々落々として居る、はッはッはッ。
槇刀自　一寸御免さい。（と座を立つ。）
お柳　おめしかへ？……お手つだひ申しませう。（つゞいて立つ。）

槇刀自　（じろりと見て）儀式ぢや、貴女のやうな粋な着方は埒あかん。惡くは言はぬぞ。（と面でしやくつて）や、氣にせまい、樫子や、來さい。（と連れて行く。）
お柳　（しをれる。）
重太郎　（打鬱ぐ。）
岩造　や、それに何です。……晩餐が濟んだら、腹こなし運動がてらぢや。皆で揃うて、自動車で、私が會社へ出向くとするです。……一家族揃うてですわい。はッはッはッ。まだ樫子さんと結婚もせんが、一家族、他人交ぜず……はッはッはッ、洒々落々として居る。いや、奥さん、是非自動車にのせてあぐる。
お柳　私、澤山です。階子乘の方が結構。（すつきり云ふ。）
岩造　（苦い顔で大にてれ）は、はあ、血の道に障るかな、（と嘲笑つて）御隠居、支度が長いな。贈ぬしの私が後見せうか。（と座を退く。）
重太郎　お柳。
お柳　此の花環を持つの。
重太郎　まあ……あゝ云ひなさるもんだから。……
お柳　自動車で出掛けるの。

重太郎　可いぢやないか、乘つたつて？
お柳　私、可厭ですわ。（とぶる〳〵と肩を搖つて、駄々を揑ねる、仇氣のない風采。）
重太郎　何もつきあひではないか。……
お柳　私知らない。（とツンとして、斜かひについと立ち、緣の柱に立ち姿。前髪をつけて、いやいやをする。）
重太郎　（熟と案じ）然うだ……一寸見せるものがある……（と肩に手を掛けて、拗ねるを抱くやうに振向かせ、下なる手水鉢の柳を見せる）內の妹は妹でなくても、姉妹は世間にある。……今日は逢はせる間がなかつた。此の間話しの千蝶が、忍んで來て、お前に此を寄越したんだ。お柳、お前の名ぢやないか。何事も柔順に、柔順に、な、逆らうな、風に靡けよ、雪に折れるな。（と氣を籠めて云ふ。）
お柳　（引向けられる、と二人の顏、柳ながら手水鉢の水に映る。じつと視めて）嬉しい人もあるわねえ。ぢや、おとなしくしますからね。此の水に映つたまゝで、お前さん、莞爾と、笑つて見せて下さいな。
重太郎　又かい。
お柳　だつて、先刻と今と、たつた二度ぢやありませんか。苛められるのは、のべつだわ。

重太郎　むゝ、困つたな、さあ、（切なげに莞爾する。）
お柳　まあ……可愛い。
氣三郎　（人も忘れた二人の狀に、身の置場所なく、植込をうろたへまはり、一所に顏を映したあたりで、やり切れなく成つて、据ゑ置く寫眞器の蔽を、すつぽりと被りたるが、我慢ならず、ぬつと長い顏を出す。）
重太郎　（衝とのいて）羽織を持つて來な。
お柳　あい。（と女房ぶりに輕く駈込む。）
樫子　（引きちがへに、今度は、白の被衣を被けつゝ出づ。）
重太郎　（呆氣に取られて）何だい、それは？
樫子　あら、お兄樣。いつか、お爺樣の時は、お婆樣が、お父樣の時は、私が、おとむらひに被つたぢやない。祝儀と、不祝儀のお儀式に使ふんですつて、お婆樣が取つておきよ。……故鄕の風俗ですとさ、高尙ねえ。
重太郎　高尙だか何だか知らないが。まだ一枚手に持つて居る、それは何だい。
樫子　同じ被衣よ……お姉樣が被けるんだわ。
重太郎　え、お柳が、（と眉を顰めて）そりや堪忍してお遣り。似合ないから。

樫子　お兄様、貴兄がそれだから我儘する事よ。お婆様が然う言つたわ。お柳は可厭だと言ふだらうが、何か言つたら、淨閑寺の卵塔で、引手茶屋の眞似をしたのは誰だつて、お言ひッて……

……

重太郎　（うつむく。）

お柳　（いそ〳〵出ながら）まあ、（樫子の風を見て云つたきり、うしろから羽織をきせる。）

重太郎　（力なげに紐を結ぶ。）

樫子　おや、お姉様が、人の見る前で、お兄様の肩に摑まるわよう。（と舌たるい聲を出す。）

お柳　（はつと手を拂つて）まあ、お人の惡い。お樫さん……

樫子　又ですか、お樫さんて、有平糖ぢやない事よ。

重太郎　お柳、其を着るんだ。樫子の通りに。

樫子　さあ、着て頂戴。（突出す。）

お柳　（受取つて、しなよく、柔順にはらりと被ぐ……）

樫子　さあ、お持なさい。（とさしづする。）

お柳　（花環を持つて立つ。）

樫子　木又さん、飛んだ寫眞屋さんで、お待遠ねえ。

氣三　何うもお見惚れ申すんですよ。富士の背景がありたいですな。

此の時、女中二人、庭から廻つて、沓脫へ赤い端緒の雪駄を、緣側へ掛けて、朱塗りの杖を立掛け、一人は二三足庭下駄をならべて引さがる。

岩造　皆さん、支度よくば、庭へ、庭へ。（と先に立つて庭へ出る。）

重太郎、お柳、樫子續いて庭に出る。槇刀自、緋の小袖、緋綸子の長襦袢、緋綸子の被布、緋の總、赤足袋、眞赤な頭巾、皺面に白粉を塗つて、座敷の眞中へ顯れる。

岩造　何うですか。（とずらりと見渡す。）

樫子　まあ、天降つた方のやうね。

重太郎　緋縅ですな。お婆さん……

槇刀自　心ばかりは若武者ぢやがの、（つか〳〵と達者に進み、杖を取つて、立身に緣側へドンと突いて）座敷から杖御免と云ふのぢやよ。（とニヤ〳〵笑ふ。）

樫子　お姉様、お穿ものを。（と氣をつける。）

お柳　（悄れて、うつむいて居たるが）はい。（と心づき何心なく沓脫の上に雪駄を据ゑ直す。）

槇刀自　（無遠慮に赤足袋を、ぬいと突出す。足を取つて緒をはめようとする。華奢な其の白い手を、意地惡く杖の先で突き拂ふ。）

重太郎　（面を背く。）

お柳　（拂はれて、沓脱に手を辷らし、怨めしさうに、槇刀自をはじめて仰いで、眞赤な其の服裝を一目見るや、じり〳〵とすさつて、すつくと立つ。被衣の中に、影を籠めて、うつくしき眉キリ、と成る。）

途端に、ジャン、と急な半鐘。

皆、空を見る。

氣三　一ツ半鐘です、大丈夫。

お柳　（傍目も觸らず……屹と槇刀自を見る〳〵、顏の色かはつて、臺のまゝ花環をばツたり落す。）

樫子　何をなさるのよ。（と強く云ふ。）

お柳　（耳にも入れず、眉に掛る被衣のはしを、犇と取つて、引かゝげつゝ、槇刀自を凝視めて、すつくりと彳み居る。半鐘やむ。）

槇刀自　睨むかいの、私を睨むかいの。や、柳や。（荒く云ふ。）

お柳　（と心付き、落した花環を見て、はツとする。）

槇刀自　あゝ、苦界ぢや。お主はさて〳〵根性の拗けた人ぞい。聞かされ、や、（と云つて、頭をふつて四邊を睨め）今見れば、其處な柳の葉の影がな、あだ白い手に映つたぢやろ。……毛蟲が這ふと見えたでの。や、可愛や、氣味が惡からうと思うたが、踞んで下に居る人ぢや。老年の身體はきかず、さかとんぼ打つて手で退けて遣らう法もないで、杖の尖で、や、此の杖の尖で拂うた。其に何ぢやぞい。お主が、其のまつすぐに通つた鼻筋には、肖ずとこそいへ肖ずとこそいへ、くねり曲つた根性で、ソツと當ればグワツと騒いで、腕脚を折つたほどに睨まさる。此方は然うは思はぬぞ。……あゝ、苦界ぢや、可厭やの、可厭やの。（と頭をふり〳〵。）

重太郎　（其のうちに、花環を拾つて自分で持ちつゝ）お婆樣、然うまでおつしやるものではありません。餘りお服裝が目覺しいので、うつかり見惚れたのでございませう。此奴あ小兒のやうに赤いものが好きなんですから。――さあ、お柳しつかりしなくツちや不可いぢやないか。（と花を取れとて差寄する。）

岩造　（葉卷をぱくり〳〵。）

お柳　（少時ためらひながら、あらたまつて）お婆樣、皆さん、何うぞ、此のお役ばつかりは、お許しなすつて下さいまし。

槇刀自　何ぢや。花環の役が、勤まらぬ、や、柳や。……

岩造　何故ですかい。

樫子　何う云ふわけ、お姉様。

重太郎　浮かりした事を云ふんぢやないよ。

お柳　（重太郎に）此の間もお話して、お前さん……あの、あなたも知つていらつしやるわね。井筒屋の姉が、夜中に、はゞかりの中から、眞赤な衣服を着た顔の白い婆々を視て、其が廂合を出て行く時、掌で火を吹きながら、振向いて莞爾したのを、一目見てから病氣に成つて、燒出されて亡くなる時まで、赤い魔が、よし原中を灰にすると譫言に云つた事を――御存じですわね。――姉にも井筒屋にも、故郷にも、それぢや、私の仇敵ぢやありませんか。勿體ないやうですけれど、おみなりが、眞赤です……花環とやらを捧げるのは、其の人の繁昌を祝つて、手柄を讃めるんだと云ふんですもの。私……（と聲うるみ）家も棄てました。姉も故郷も棄てました。けれども、あなた、恩愛こそあれ、義理こそあれ、何の怨みもないものを。同じ姿の、同じ眞赤な、お婆様の背後に立つて、現在、姉の妹が、仲之町で育つたものが、花環を持つのは辛うござんす。……踏まれても、打たれても、あなたの傍に居るんです。どんな事も厭はない。厭やしない、此ばつかりは勘辨して、何うぞお察し下さいまし。

七　紫

槇刀自　や！　柳や、まあ、主ア。（つか〳〵と庭へ下り、じろりと睨んで岩造に目を返し）鷲坂様、常、不斷、此の通りぢや、と思うてくんされ。何と、何うぢやぞい。

岩造　こりや、方外な迷信ぢや。

樫子　まあ、呆れた、まあ、呆れた。……一寸……呆れるわねえ。

槇刀自　重太郎、默つて居るかいの、默つて居るかいの。……今言はさつたを聞かぬかいの。聞いて默つて居るかいの。あゝ、情ない。一生涯、藏の鍵の外には曲つたもの一ッ身につけぬ老寄が、嫁のお庇で、鬼に成つた、魔に成つたぞ。後生のほども可恐しい、身ぶるへがする。怖毛が立つ。前世の仇と云ふなれば、死ねかしと思ふまでも、死んだあとでは棄念佛も唱へるに。私は今の一言で、無限地獄へおちるがいや。や、もんどり打つておちるがいや、淺ましい。（と、わあ、と泣く。）

重太郎　お婆様、そんな、あなた、そんな事が。（身悶えして）お柳、馬鹿な事を、馬鹿な事を云つちや不可ん。お客もおいでだ。さあ、優しく、此を持て、そしておともして寫眞を願へ、よ。

お柳　（かぶりを振る。）

重太郎　分つたらう、それ。（と切なさうに莞爾して見せる。）

お柳　（顔を背ける。）

岩造　強情ぢやね。

樫子　とに角、花環をお持ちなさい、でないとお婆様を悪魔にした失禮な言が消えないわ。

槇刀自　よう云うた。や、柳や。……樫子が云ふ通り。とにかく、其の花環を、私の前に捧げさつしやれ。や、柳や、持たぬか、さ、持たぬかいや。

お柳　（兩の肩で息をせきつゝ）御免なすつて下さいまし。

槇刀自　出て失せう、出をれ。（と杖をドンと突く。）

重太郎　一寸、お待ち下さい、お婆様。さすがに、此も一年半季の奉公人とは違ひます。……一條、いひつけを肯かないわで、直ぐに離縁も出來ますまい。……又御存じの通り、家も燒けて、實家も絶えて、親類と云つてもないのですから。……少時……少時御料簡を願ひます、いづれ、お言は背かせません。……失禮だ、お柳、（言强く）此處に居ては御機嫌に逆らう、彼方へ行け。女中部屋、納屋の隅にでも引込んどれ。

お柳　はい。（とツゝと行きかける。）

槇刀自　や、柳や。……

お柳　（立留る。）

槇刀自　私が許さぬ、浦松家の先祖が許さぬ。私の言葉を聞かぬとなれば、庭でさへ、一足も疊

の上は蹈ませぬがい。何うあれ花環持て、汝！　可厭となれば出て失せ、出て失せんかい。

樫子　お婆様は慈善家ね。吉原を燒いて、人を殺した、赤い魔だつて言はれながら、たゞ許す事はないわ。一旦花環を持たせて、降參させた上で、あの、其の上で出すが可いわ……私が持たせる事よ。一所に侮辱されたんだから、此のまんまぢや、お婆様が何を云つても、私が鷲坂さんに濟まないわ。さあ、お持ちなさいよ、さあ、お持ちなさいよ。（とせり詰め、すりつけ、お柳のすさるを、緣側におしつける。）

お柳　（片手に其花環の眞中を犇と握るや、と倒るゝやうに緣側へ沓脫をかけて小腰を落し）え　え！　鬱陶しいねえ。……（と片手で被衣をかなぐり棄て、樫子をトンと突離す）口が臭い、寄んなさんな。私の身體へ觸りたかつたら、井戸の水でも浴びておいで。（と花環を見て）どなたか御贔屓とござりまして、眞赤な隱居丈へ下さるが、聞いて呆れるよ。（とはらりと投出す。）

岩造　何をするかい！（睨んで詰寄る。）

お柳　尼なら數珠を切る處を、お柳ちやんは江戸兒だから、（おくれ毛を搔上げながら）一寸たんかを切つたのさ。……可愛い男の云ふ事だつて、可厭な事なら可厭なんだよ。……勿體ないやうだけれど、世間を忍ぶあひゞきにはお月樣さへ嫌ふぢやないか。眞赤なきものの婆さんは、口で言つても悚然とする。……私が一言、可厭だと言へば、油蟲もげぢ〳〵も廓中に根絶えが

したのさ。……其のお柳ちやんが手を支いて、お免しなさい御免なさい、堪忍してと言ふものを、肯かれないんなら何うともおしなね。……さあ、して御覽な。此の土地こそ今言つた、油蟲やげぢ〳〵の土足に掛けて踏まれても、柳に、花に、紫の、隅田川の水が絶えないで、白魚の目の黒い内は、江戸の女はお前はんたちの好き勝手にやならないから、まあ、然う思つておくなはいよ。

重太郎（飛かゝり、お柳の頸髪を取つて、座敷へ引倒し、二ツ三ツ打擲する。）

岩造　夫婦喧嘩を、庭へ立つて見物も成らんですが。（一同、氣三郎とともに座敷へ入つて取卷き見る。）

お柳（打たれたあとを突離されて、くの字に、しなやかに莞爾して）まあ、嬉しい、男は然うして打つものよ。お前さんは、優し過ぎて、旦那には可くつても、いろには些と張合がなかつたよ。……さあ、其の氣で一所に出ませうよ。一所に、……私、此處には居られないんだから。

重太郎　愚圖々々言はずと、早く出ろ……

お柳　出ろッて、（と驚いた顔して）あの、私ばッかり。そして、お前さんは？

重太郎　俺は主人だ、何を云ふ。

お柳　一寸……（と熟と顔を見て）家を出ろとおつしやるのは、あなたと別れる事なんですか。

重太郎　當前さ。（と横を向く。）

お柳　まあ。（呆れて）そんな……そんな約束ぢやないんですもの、（とはッと泣く）そんなら持ちます、花環を持ちます……堪忍して下さいましな。

槇刀自　賣女が、今さら何を吐す。片時も置かれぬ、すぐに出され。……荷もつは後で始末する。内へ入れるも汚らはしけれど、教諭いて、其の性根直して取らしよ、と意見のために持つて居つた。……宿なしが、家を出たら、のたれ死ぢやろ。冥土の路の燈火にしされ。（と云ひ〳〵戸棚から井筒屋の箱提灯を出して、バッタリ投げる。）

お柳（顔を上げ、袖に引取り、膝を直す）重さん、私ほどの女を持つて、何が不足で、家、藏が惜いんです？……あゝ、町の人の氣は然うかねえ。（とみかへりながら、なごり惜さうに、重太郎を見つゝ出で、庭下駄をかなぐり穿く時、手水鉢の柳を見る）あ、私の名だ。こゝへ置いて行くのは可厭、（と濡れたを其のまゝ、人形のやうに仇氣なく胸へ抱く……）おゝ、可愛い。（木戸を出て、行きかけつゝ、忘れたやうに手に提げたる、其の提灯に柳の枝しだれかゝる——上野の鐘。垣根の空に、三日月出づ。）

お柳（仰いで振返る。）

重太郎（縁側に立つて見送る、顔を合せる。）

槇刀自　鹽まけや、樫子。座敷を替へようで。――えゝ、未練な男ぢや！　浦松家を忘れたか。
（ぐいと手を引き）さ、鷲坂様――あんたも來さい。（と氣三郎と共に入る。）
お柳　（ぱッたり蹟いて、ト足許をじつと見て、庭下駄を脱いで、鼻緒を抓みながら、ぐい、と
片褄を上げると一所に）金の泥が附て居ら。（ポンと庭下駄を投出し、つか〳〵と花道へ駈けて
入る。）
（お柳が庭下駄を投ぐる時と、其の重太郎の奥に入ると同時なるべし。）
半次　（今度は、垣根外の隅から出で、木戸まで來る。）遣つたな、姉はん。（ハタと手を拍ち、自
分の穿いた雪駄を見て、脱いで、手に持ち）へむ、金の泥がついて居ら。（と投げようとして）
こいつは短氣だ、己がのだ。（と帶へ挾む。）

八　借半纏

重太郎　（此の時引返して、煩悶しつゝ出で、手にせる茶碗酒をぐい、と飲んで、緣側へづいと
立ち、木戸越に半次を見て、決意の色あり）おい。（と手招く。）
半次　（傍へ寄る。）
重太郎　（手早く帶を解き、小袖、羽織を脱ぎ、襦袢に成る。）

半次　何をするんだい、若旦那。
重太郎　今日つから半纏着だ。かはりは此を遣らあ。半次、脱ぎな。（とはだしで下りて、半次の
半纏を脱がせて着る。）
半次　（呆氣に取られ、やがて）遣つたな。――（又拍手す。）
樫子　（出で、）あら、ま、お兄様、あら、ま。
半次　置いてつちや損だ。質ぐさだ。（と羽織小袖を帶ぐるみ背に引掛ける。）
重太郎　（樫子を見たのみ、ものをも言はず、半次と木戸を出づ。）
樫子　あら、お兄様。（と駈寄るトタンに外からハタと木戸をしめる。）
重太郎　（ぐい、と大きく伸をうつて）家だの、藏だの、浦松家だの、チョッ煩い。あゝ、一時に
肩が凝つた。半次や。
半次　へい。
重太郎　歩行きながら、敲いてくんねえ。（と花道へ、すた〳〵。）
半次　（うしろから、肩を叩いて歩行きながら）……毎晩、お柳ちやんに叩かせたらうね。
重太郎　違つてら。餘り苦勞をさせるから、私の方で敲いて遣つたよ。
半次　こいつあ、やり切れねえ。（と入る。）

岩造　樫子さん、樫子さん。（と呼びつゝ出で、すり寄る樫子の手を取つて、二人して、ニヤリと笑ふ。）

其三　仲の町

一　燒跡

お柳　（其のまゝにて、箱提灯、柳を提げたなり、深くものを思ひつゝ、赤く亡びたる城跡の如き燒原を辿り、井筒屋の燒あとを、唯一人。曠野に迷へる狀に、其處此處と、搜し來て、瓦落ち、壁崩れて、死したる雲の如く立ち殘る一棟の土藏を目印、心あてに彳みて、一人悄然とす。悲しげに皺嗄れて、疲れ細りたる猫の聲、きれ〴〵に聞え來る。打傾き）駒や、駒ぢやないか。……あゝ、駒の聲だよ、おゝ、確かに。……駒や、駒や（猫、ひよろ〳〵鳴きつゝ這ひ寄る）あれ、駒だよ、駒や……（と最惜しさうに抱かうとすると、飛退つて爪を立てて、うゝ、と唸る。……）忘れたか、私だよ、駒や、私だよ。（と心を籠めて呼ぶ。猫、嬉しげに鳴いて縋り寄る。膝に乘せて袖で抱く）何うしたの……火事の騷ぎに迷子に成つたッて聞いたけれど、何うする事も出來なかつた。……よく、お前、こんな燒原に居て、活きて居ておくれだね。……ま

あ、痩せて、（と背をさすつて）骨が堅いわ。何を食べて居た。え、あれ、わな〳〵震へて……嬉しいの、悲しいの、切ないの。私が歸つたら、最う大丈夫、お喜びな。私が人形を抱いて寢ると、よく、お前、怒つたつけね。岡燒だよ、岡燒猫、岡崎の猫と聞えやしないか、串戲ぢやない。ほゝゝ、お前、美いちやんの許へでも、玉ちやんの處へでも、立退いた前へついて行つて、少時臺所に置いて貰へば可いんぢやないか。目ばかり、光らして、痩ッこけて、こんな處を宵闇に可厭な聲して、人に化猫だッて言はれます。――一寸、叱るんぢやない。だのに、目を光らすと云つたつて、すぐ然う眠らなくッたつて可いよ。久しぶりだわね、さあ、お遊び、そら〳〵……（と、下におろし、柳の枝にてすら〳〵とあやす。猫動かず。……）可厭だ、近頃、不精に成つて……あら、眠いんだね。（と又抱取る）そんなら、私が、怨みッこのないやうに、お人形さんと兩方へ抱いて寢て上げようね。……まあ、根岸へ置いて來て了つたつけ。（と言ひかけて、もの思ふ。……）あの人形は、目つきが重さんに似て居たつけが、えゝ、もう、（とひしと猫に頰摺りして）……お前ばかりだよ。あら、冷たいわ。（と顏を離す）がた〳〵震へてさ……あゝ、お腹が空いたんだね……私だつてお晝ッから食べやしない。おでん屋の一軒くらゐ出て居さうなもんだがねえ。（猫に片頰をつけたなり、立つて、帶の間に手を入れる）あ、紙入も財布もないが、久しぶりだ、お柳ちやんの顏で、總仕舞にして遣るけれども、……（と

眴す）板圍さへまだ揃はず……土藏にたてた障子から、墓所のやうな灯の色が、黑い霞に映るばッかり。……昔は知らず、生れてから、今月の今夜まで、夢にだつても覺えのない、廓は暗闇に成つたねえ。（とうつかりする、手を辷つて、猫ばつたり落つ）あれ、（と覗いて）死んだんだよ、……まあ……死んだんだよ、まあ。……死んだんだ。駒、何うした、駒、駒や。可哀さうに、……可哀さうに。……此の骨ばかり皮ばかりの樣子ぢや、身體は疾くに死んで居て、魂ばかりが、私たちを待焦れて居たんだわねえ。——姉さんも亡く成つたよ、駒や、堪忍しておくれ。私が居たら、こんなに灰にはしなかつた。（面を蔽ひ落涙する。）

二　筒井筒

源太　（刺子にて、手鉤を三尺帶。鐵棒をつき、弓張を提げて出づ。お柳の隣地、其の住居の燒けたる跡を、無言にて徘徊し、追懷の念に堪へざる如くなりけるが、鐵棒をドンとつく）まゝよ勝手にしやがれ。（言ひ棄てて立去りざまに、通過ぎにお柳の姿を見つけ、行かんとして、立停まり、振返る。）

お柳　（顏を上げる。）

源太　（透かして）や、お柳ちやん。

お柳　かしら。

源太　お柳ちやんだな、何うしたい、まあ。（と懷しさうに寄る。）

お柳　何うにも、お前、此の體だわ、察しておくれな。

源太　跣足か、跣足か。威勢が可いな。

お柳　然うお前、人間が威勢の可いことばかりなものかね。……

源太　燒ぼこりと言はあ、構ふもんか。や、泣いてたな。氣の弱い。何だ、お柳ちやんのやうでもねえ。

お柳　燒けたのは構はないけれど、姉さんが亡く成つた！……まあ、見ておくれ、此のいたづらぢや、隣同士で、お前とも喧嘩をしたッけ。……駒がこんなに成つ了つたよ。

源太　（弓張をさしつけて）やあ、たうとういきついたな……可哀相に、此ン畜生はね、あの、どえらい火が、ばッと一ッ津波のやうに煽つたんで、氣が顚倒したと見えるんだ。迷子に成つて胡亂つくから——前に、お前が居る時分にや、犬將軍の犬ぢやねえが、井筒屋のお姫樣御寵愛と云ふ首ッ玉を看板に、大な面あしやがつて、おふくろがお前、なけなしの小遣をはずんで大事にして置く、夕顏の鉢植をひつくりかへす、小鳥の籠へは惡戯れつくし、癪に障るから、お前、內證で、時々、コツンと其の、な……

お柳　あら、邪險な、打つたのかい。
源太　むゝ……其の打たう、と何だ、思つたんだ。思つた事もあるけれど、迷子に成つた此の體よ。可哀相でならねえから、チヨチヨ……なんてね、姿を見せえすりや呼んだッけ。人を見る と怯えて遁げらあ、矢の如く、ぴよんと飛ぶのよ。
お柳　不斷、邪險にするからさ。いつかなんざ、背戸へまたゝびを焚いて、手遊の空氣銃で狙つて居た人ぢやないか。そんな料簡だから、御覽なね、消口の一箇處も取れないで、筒口を引張つて遁げたんです。
源太　こりや嚴しい、覿面に猫の祟だ。いや、串戲はよして、あんなに可愛がつてた、お前、伊勢又の遣手婆さんが、此猫のために故々寮から出て來たけれど、其れだつて寄つかねえ、……人さへ見りや遁げやあがる。しまひにや晝間明い内は影を隱して、夜に成ると、ぴか〳〵と目を光らして顯れちや、公園の池へかゝつて、お前、緋鯉、金魚をして遣つたッさ。其だつて、可加減に、片身焦げてる奴は横銜へにもしたらうが、活殘つた徒は、泳いで遁げるから堪らねえ。飢死をしたんだ、此奴あ。可哀相に、お柳ちやんと並べて見りや、駒も他人とは思はねえ。
お柳　あゝ、最う止しておくれ……言ふだけ未練の種だから。
源太　然う來なくッちや不可ねえ。……然うだ。言ふだけ未練のたねだ。……で、何か、燒あと

を見ぶつか。何時來た。
お柳　今しがた……見に來たんぢやない、私、歸つて來たんだわ。
源太　かへつて來た？　何處へ。
お柳　内へさ。
源太　うち……？　内はねえぢあねえか。
お柳　憚りさま、何うせ私は宿なしさ。……かしら、臺所へでも使つておくれな。
源太　おつしやるもんだぜ。臺所は勿體ねえ、緣起棚と云つた處で、私も矢張り宿なしか。お柳ちやんの家は根岸ぢやねえか。
お柳　根岸も内ぢやないんです。（きつぱり云ふ。）
源太　あゝ、お前の其の樣子ぢや、嫁入りさきを追ん出たな。
お柳　いゝえ、追出されて來たんです……恥しいねえ。（と、さしうつむく。）
源太　何だ、追出された、追出したか、罰の當つた奴等ぢやねえか。恁う、お柳ちやん……癪に障る事あねえか。有るだらう、むゝ、有る、……屹とあら。有るか、（と摺寄り）有るなら言ひねえ。江戸中の加勢を私一人で引受けるぜ。
お柳　（默つて、かぶりを振りつゝ）何にも言はない。……口惜い事も、癪な事も、手足を斬ら

れるやうな事も、惚れた男にまけて遣つたよ。今夜ツから井筒屋の、これ、見ておくれ。（と箱提灯をツト提げて）もとの娘……も壓が強い、送りの姉やに成りましたよ。

源太　眞個か、おい。

お柳　何の洒落に、嘘なんか吐くものかね。

源太　まつたくだな！

お柳　あい、……また喧嘩をしようねえ。

源太　むゝ、よく出されて來た、お柳ちゃん、お前、よく歸つて來てくれた。（とはら〳〵と落涙し）こんな嬉しい事はねえ。……眞個のこつたが、私あ泣いた覺はねえぜ。お前も知つてら、實はねえ、消防夫とも言はれるものが、お前、手前の内の燒跡の灰なぞ搔いちや見つともねえから、一騒ぎ鎭つて、恁うして人ッ子の居ねえ處を狙つて來たのは——隨分不孝をしたつけが、死んだ、ちやんが遺言に、源太、位牌だけは見てくんねえ、ごと〳〵痰の中で言やがつた。火事だ、と云ふと飛出して、三日おふくろの顔も見ねえで、其のまんまに成つたから、今夜、お前、密と來て、灰の中を、ちやんの位牌を探したのよ。入齒を落したほどの砂利もねえ。えゝ、源太ッて小兒を忘れねえなら、手前の戒名をかいた位牌ぐらゐ、火の中を、一人で飛出しやあがれば可いものを、と口惜く成つてな。……其にせえ、小腹は立つても泣かなかつた。が、お

前が歸つて來たと云ふんで、嬉しくつて涙が出る。……私あ、鼻端ばッかりで、弱蟲だつけな、

お柳　お柳ちゃん。……最う、何處へも行かないでくんねえよ。

お柳　あい、（と齊しく打泣いて）私も矢張り弱蟲かねえ。

源太　（涙を拂つて）あゝ、つい我知らず……何だ馬鹿な面な、太郎稻荷に笑はれら。さあ、もう、餘所へ行かねえと云ふ誓文に。……そら、何だ、……町の奴等が手を握らあ。一寸、遣つて見たくもあるがね。ありや氣障だから、一ッ指切を遣つてくんねえ。

お柳　盆まで喧嘩をしない事。……（と指をからむ。）

源太　些と氣障だな、はゝゝ、（笑つて）處で、今夜、何處へ行く。……宿なしだッて平氣でも居られめえ。私ン許は、野郎のお芋の煮ッころばし、押くら饅頭と云ふ形だ。美いちやんも、玉ちやんも、立退いてる處は澤山遠かねえ。其處へでも行くなら案内しようぜ。其とも何處か、心當りがありや出掛けねえ。

お柳　かしら、一寸蠟燭を貸しとくれな。

源太　おい、何うする。（と出す。）

お柳　（箱提灯に灯を入れて、置直す。……）根岸のおまじなひ横町から、入谷を拔けて、此處へ來るまで、途中人の顔も見ないほど、考へたよ。私が恁うして歸つた上に、御覽、井筒屋の看

板に明を入れた……私あ渾名は燕でも、姉妹分にもお友達にも餘所の塒は借りやしない。死んだ姉への義理もある……井筒屋の土に芽を萌して、散つても柳に成るつもり。……風も吹け、雲も降れ、袖は濡れても、袂は裂けても、此處を一寸でも動きやしないよ。

源太　うむ。

お柳　かしら。

源太　お柳ちやん。

お柳　さあ、看板と一ッ所に、井筒屋のお柳が身體を張つた。……千兩箱を車に積んで、一六勝負に出ておいでと……かしら、後生だから賴まれて、金を貸すものを引張つて來ておくれ。

源太　可、面白い！　日本半分あり金を攫つて了へ。吉原八丁八百軒、お前の氣象で建直るぜ。夜中に金貸はとに角だ。……此から野郎どもを連れて來て、お前のまはりへ高張弓張、三階の屋臺を築いて馬鹿囃子でおかぐらよ。此奴を聞いたら廓中が立退さきから今夜中に引返して、星天井の花盛り、小袖幕の板圍ひで、霞の屋根が葺けようぜ。景氣は直つた、面白え。恁う、お柳ちやん、金馬簾の旗印を地面へ置くと云ふ法はあるめえ。待てよ、九尺柄に引掛けて、筑波の上へ押立てろ。（と鐵棒の尖へ結んで立てる。）

お柳　嬉しいねえ、大黒柱が立つたやうだよ。

源太　氣丈夫に凭掛つて待つて居ねえ。ぢや私あ、此から行つて、勢揃ひに及んでな、あはよくば今夜中にも、金方を背負引いて來ら。

お柳　あゝ、濟まないが、賴みました。

源太　チヤラ〳〵、チヤラ〳〵、わけなしだ。（と仕方をする。）

お柳　おや、憚り樣だわね。

源太　やあ、久しぶりでお柳ちやんの笑顏を見た。が、待ちねえ、笑ひ事ぢやねえ。……お前、意地張で、野宿は可いが、此の通の寂滅爲樂だ。一人ぼッちに成つた時、どんな奴が入込んで、惡巫山戲をしねえとも限らねえ。

お柳　もう此處へ歸つたら、私、可恐いものは何にもないもの。

源太　我慢を云ひなさんな、心は弱い癖に。……それ、（手鉤を拔いて渡す）守刀に持つて居ねえ。源太の手鉤だ、土地ぢや此でも魔除に成らあ。そしてね、おい、夜あかしの度胸だらうが、夜露に冷えちや堪るめえ、此奴を着て居ねえ。（と刺繡半纏をぬぐ。）

お柳　まあ、かしら、其をお脫ぎだと身すぼらしい。

源太　何、お前、前座の羽織だ、一寸〳〵脫があね。まあさ、可いつて事よ……心は弱い癖に。（と自分が着せかけて）やあ、堪らなく似合つたぜ。（と密と肩を抱く。）

お柳　（熟として）確乎お抱きよ。
源太　いんや、煩悩が起ると成らねえ。一體私あ、生命がけで。
お柳　え？
源太　未練はなしさ、決して口説かねえ。
お柳　ためして御覽なさいなね。
源太　田圃の太郎に笑はれら。
お柳　近所をお前通つたら、太郎樣に御不沙汰をいたしました、濟みません、と言託かつて下さいな。
源太　皆まで言ふめえ、心得た。（とずつと出て、猫の死骸にばつたり）おつと、南無阿彌陀……あとで若いものに片づけさせよう。いづれ姉さんの墓の傍だらうが、此奴とお前、睨みつこでも居られめえ。待ちな、可い處がある、隱して置かう。（と提げて、崩れ落ちた其の土藏、斜めに見ゆる戸口に寄る）――行倒れたる猫の死骸、一夜の宿を御無心申す。（と差込んで、土藏の中を屹と透かし）誰か、誰か中に居なさるかい。
お柳　一寸、上總屋さんで來てゐるの？
源太　何だ、隅つこが薄赤く、ぽつとしたつけ。……壁の崩で遠灯が射した奴さ。こんな雨露も

凌げねえ中に、誰が。……お前ぢやあるめえし……だから、お前の、其意氣張を手本にしたら、廓が昔に返ると云ふんだ。
お柳　難有う、御贔屓分に精々早くさ。
源太　チヤラ〳〵チヤラ〳〵、歸りに雪駄を買つて來るぜ、お柳ちやん、泣かずに居ねえ。（とすたすた、花道の際にて一寸振向く。）

三　緋手毬

赤魔姥　（破れたる土藏の中より、猫の死骸を皺手に掴み、戸口に半身を顯し、源太を見送る。顏を合す時、其の猫にて面を蔽ふ。）
源太　（氣がかりらしく猶豫ひながら）氣をつけて居ねえよ。（其のまゝ急ぐ。）
赤魔　（猫の死骸の蔭より、半面を振向けて、赤く輝く眼にて、じろりとお柳を睨む。）
お柳　（心付かず）あゝ、一面に野原に成つた。……水も燒けたか、蛙も鳴かぬが、淺草田圃が又出來ようか。……太郎樣で、狐火が燃えさうな晩だ事……寂しいなあ。……
（上野の鐘鳴る）何時だ知らん、（空を仰いで）まあ、海老屋の時計は最うないのだつけ。（と寂しく微笑む。）

赤魔　（此の間に、土藏の裏をめぐりて、のそ〳〵とお柳の背後に出て、赤き杖を取直して、ハタハタと敲いて、箱提灯の灯をばつさり消す。）

お柳　あれ〳〵、何やら、眞赤な蟲が、火を取りに、（と心付き、ちらりと赤魔姥の形を認めて、退つて、身構へ）お婆さん？

赤魔　おゝ。

お柳　一寸、お婆さんですか。（お柳の目には姑、槇刀自に見ゆ。）

赤魔　おいの……

お柳　何うして、貴老、何しにおいでなすつたんです。……又、看板を消しにかい。（と屹と云ふ。）

赤魔　言はつしやるな、違うたぞ、違うたわいの……過ぎた夜さりは、あの夜はな、主が面目なからうと、な！　情の取越ぢや、灯を消した。消したれどもな、今宵はな、今宵はな、己が面目なうて灯を消した。消したれば此の暗さ、星も曇つた暗さを見され。子ゆゑの闇と云ふわいの。よ……日頃の事は惡かつたれば、己が詫るに、婆々が詫るに、あやまるに、根岸の里へ歸れえの、己が迎ひに來たのぢやわいの。

お柳　愛想づかしを言はして下さい。……はい、御深切は忝ないが、お心根が可恐しい。最う御

近所へも參りませんから、まあ、然う思つて下さいまし。

赤魔　はアはア。（と赤い舌で二聲笑ひ）若い婦が氣短な、一旦の事に、身も忘れ、世も忘れて、や、あのやうな事を言ふがいの。壁に耳ある、鬼も聞け、佛も聞けや。……己が手引を好い汐にして歸らいで、二世掛けた男は先づ……何とする氣で居るのぞい。

お柳　似合ない事を云ふのねえ。お婆さん。私たちの情愛が、貴老なんぞに分りますか。此方で聞きたい事だけれど、二世かけた男は何うする氣だ、とお問ひなさるから申しませうね。重さんは家を出ます。家出をして、私の許へ來るんです。……早くから親御はなし、貴老が育てた人だけれど、情愛の事ばかりは、私が丁と教へました。遲くつても、疾くつても、必ず此處へ見えますから、離緣された、はい然やうならと、男を棄てて出たやうでも、好いた同士が何の、……何時まで分れて居るもんですか。

赤魔　はあ、はあ、（と赤い口で）おゝ〳〵、可愛い奴が、あの、云ふ事はよ。……主が出れば、男も出る、其を己が知つたればこそ、老寄が賴むわいの。重太郎が家出をして、根岸の家は何うなるぞ。

お柳　お樫さんもおいででせう……が、そんな事は何うでも可い、私たち二人一所に暮せば、何だつて構やしません。

赤魔　何と、先づ、世間を知らぬに程のある……それは主の我まゝぢやぞな。

お柳　我まゝでござんすともさ、其の我まゝがしたいために、焼あとへ歸つて來ました。世間の事は存じません。――お婆さん、此處は貴老がたのおいでなさる處ぢやありませんから、早くお歸んなさいまし。

赤魔　此處は己の來る處でなくば、主の居る處でもないんぞの。いや〳〵、年寄の役目として、主が其料簡を直さぬうちは、去にたうても、さて、去なれぬのぢや。……や！　主がやうな我まゝさせて、世間で許すものかいの、許さぬぞい。

お柳　えゝ、許さなけりや、何うするのよ。焦つたいねえ。

赤魔　許さずば何うする、と主は聞くかいの。……おゝ〳〵、よう、聞いた。近いたとへぢや、これ見され、此のやうに、骨も皮も、（と猫の死骸を差しつけて）家も、藏も、燒爛れて亡びるんぞい。

お柳　くどいねえ、お婆さん、死んだものは斷念めます。……家や藏なら建直すから、其で可いぢやありませんか。

赤魔　おゝ、さて言ふわいの。……それも生命があつての事ぢや。これ水に逆らうて流されまいか、炎に向うて燒けまいか、若い婦の人間づれ、生身を以た分際で、口廣い事云ふないの！

お柳　私は言ひます、言ふんですから、貴老聞かないで去つて下さい。

赤魔　いや去ぬまい、去んでは己の役目が濟まぬ。……何事も時ぢやわいの、時節ぢやわいの。……此、コヽナ（と地をガツシと打ち）みだらな、汚れた、朽ちた、腐れた、爛れた、……いちじくが潰え、腐柿が挫げて、栗の花の蒸し蒸すやうな、廓が燒けて灰に成たは、な、それをこれは、世界の心ぢや、望みぢやと思はされ。愚癡、愚昧の迷ひから、痩我を張つて、何とする。……主の目には何と見える。……花の中に涼しい蔭や、柳の軒に、月も射すと思はうが、己をはじめ世間の目には、それ何ぢや、コナ提灯。棺桶の前に立つて、早や主の其の散り際の、柳の葉を待つやうぢや。な、今の間に心を直いて、花環を取つて、婆々に捧げや、な、其の捧ぐるを、婆々一人にすると思ふまい。世間の心、目上の言葉に從ふ印ぢや。すれば、身も立つ、亡びはせぬ。……な、分らぬか。分らぬか。これ、あのやうに淺ましい、投込み墓を忘れたかいの。

お柳　あゝ、お婆さん待つて下さい、其の貴老、投込み墓が、私大すきなんだから、些とお困んなさいなね。

赤魔　むゝ、惡たれな、憎い口の。死際も樂ではあるまい。片目潰れて、片目投げ出て、皮は爛れ、毛は拐れ、尻尾は切れ、腮は裂け、蚯蚓、蚰蜒を、齒じほに塗つて、のたれ死した猫を見

ぬか。おのれの身の行末ぢや。それ、見され、づぶ〳〵と田樂ざしに、くさや、くさや。腸が出て搦んだがいの。（杖につッかけ、お柳の頬へ差つけ、摺りつけ、附廻す。）

お柳　可い加減におし、根岸ぢやない。何處だと思ふ、お柳ちやんの縄張うちだ。（手鉤に掛けて引拂ふ。）

赤魔　は、は、（と赤く笑ひ）それ〳〵人殺しの道具を掉つて、年寄りに手向ひさらす！　無間の奈落、五逆罪、早や、それ田樂ざしの火あぶりが、覿面に、主の目前へ迎ひに出た。はアはア。（嘲笑ふ。）

お柳　えゝも、口惜い、殺すなら殺しておくれ、うるさいねえ。

赤魔　恁ほど云うても肯分けなうて、殺せと云ふか、云ふか、云ふか、婦。

お柳　知れた事だよ。

赤魔　おゝ、殺さう。

お柳　何だとえ。

赤魔　其の前に、も一度聞かう、聞かう、婦。己は聞いた。……頭とか云ふものに、柳の枝を土に插いて、……何とか云うた、あれは何ぢや。

お柳　覺悟したのを忘れようか。私あ渾名は燕でも、姉妹分にも、お友達にも、餘所の塒は借り

やしない。死んだ姉への義理もある、……井筒屋の土に芽をさして、散つても柳に成るつもり、風も吹け、雪も降れ、袖は濡れても、袂は裂けても、此處を一寸でも動きやしない、と云つたが、それが何うしたのさ。

赤魔　おゝ〳〵、それ〳〵……うゝ、意地と張と、コナコナ、恁る婦が、まだ此の地にある上は、一夜の内に、又もとの、廓は極樂淨土と成らう。……やあ、闇に目のある鬼も見よ、佛も見よ。……此の婦一人打棄て置いては、地軸を搖つて虚空に放つた、猛火、劫火の效がないわ！……それでは己の役目が濟まぬ。佛よ、鬼よ、見許され。コナ、コナ婦、近う寄れ。……障子襖とおなじさまに、其の黒髪を炎に搦んで、袖も、裳も、中空高く捲上げようぞ。（赤き光一閃す。）

お柳　あれえ、（と遁げながら、土藏を楯に屹と視る）えゝ！　不思議なことを云ふと思つた……姉を殺した、廓を燒いた……あゝ魔ものか、畜生。（と手鉤を振つて飛びかゝる。）

赤魔　（立廻りつゝ悠然と杖にてあしらひたるが、烈しき一念に打立てられ、あしらひかねたる體見えて、あとじさりにじり〳〵すさり、うしろ飛びに、土藏の口へひらりと入る。ト同時に、壁のくづれ、處々、……あまたの顔。中には、二つ三つばかり、押かさなりて見ゆるもあり。戸口にも五つ六つ、面を見せて、恰も人參菓の如く、おなじ緋の衣着たる童男、童女、ニコニコと笑ながら、手に〳〵赤き鞠を取つて、一齊にパッ〳〵とお柳に投掛く。）